

序 文

仁多町教育委員会は、国土交通省斐伊川神戸川総合開発工事事務所の委託を受け、平成11年度から尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査を行っております。本書は、12年度に実施した遺跡の発掘調査記録であります。

仁多町が位置するここ斐伊川の上流はかつて「肥乃河上」と称され、名勝天然記念物「鬼の舌振」、「ヤマタノオロチ伝説」など神話の舞台の地として知られ、数多くの歴史的文化遺産を有する地域であります。

今回の調査では、平成11年度に7カ所の確認調査と試掘調査、続いて12年度に6カ所の遺跡の発掘調査を実施しました。本報告書は、二カ年にわたるこれらの調査内容及び成果をまとめております。

今回の調査の特徴としては、6基の横穴墓が発見された「殿ヶ迫横穴墓群」からは、けが治療のため足を固定した副木が人骨とともに出土し、当時の治療法を推測する上で貴重な発見がありました。また、「時仏山横穴墓」からは、埋葬者（女性）が身体を飾ったであろう多くの玉類（勾玉・切子玉・小玉）が出土したこと、また、これまで全国的にも例のないうつぶせ状態での埋葬方法が確認されたことなどであります。このように、数々の貴重な発見と資料を収集することができ、大きな成果が得られました。これらの成果は、今後の当地方の歴史解明と歴史学習に活用され、文化遺産の保護に役立つものと期待をいたしております。

終わりに、本調査にあたり国土交通省斐伊川神戸川総合開発工事事務所、島根県埋蔵文化財調査センター、地元関係者をはじめ、多くの皆様から格別の御指導、御協力を賜りましたこと厚くお礼申し上げます。

平成13年7月

仁多町教育委員会教育長 石 飛 弘

例 言

1. 本書は、仁多町教育委員会が、国土交通省斐伊川神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて実施した、尾原ダム建設に関わる予定地内の埋蔵文化財について、遺跡の確認と発掘調査の成果報告である。

2. 調査対象遺跡等とその所在地は次のようである。

平成11年度

仁多町大字佐白及び三沢地内の踏査によるマーク地点の分布確認調査。但しNo.27. No.30. No.32. No.68. No.70. No.71. No.72. の各地点について

平成12年度

殿ヶ迫横穴墓群：	仁多町大字佐白1278	(旧No.27)
西尾社遺跡：	大字佐白1287他	(旧No.27)
亀ヶ谷遺跡：	大字佐白1202	(旧No.99)
シベ石遺跡：	大字佐白1183他	(旧No.72)
時仏遺跡：	大字佐白1182他	(旧No.72)
時仏山横穴墓：	大字佐白1179	(不時発見No.105)

3. 調査体制は次のとおりである。

平成11年度

調査主体者	仁多町教育委員会 教育長 石飛 弘
事務局	和久利弘幸 (教育次長) 植田 一教 (教育次長補佐) 広野 進 (主任主事) 平田 昭憲 (社会教育主事)
調査員	杉原 清一 藤原 友子 野津 旭 (仁多町教育委員会)
調査指導	島根県教育庁文化財課 島根県埋蔵文化財調査センター
調査作業員	青戸 延夫 安立 一男 春日 昭二 新田 意道 山根 知雄

平成12年度

調査主体者	仁多町教育委員会 教育長 石飛 弘
事務局	藤原 久一 (教育課長) 植田 一教 (教育課長補佐) 平田 昭憲 (社会教育主事)
調査担当者	杉原 清一 (島根県文化財保護指導委員)
調査員	野津 旭 (仁多町教育委員会嘱託職員) 藤原 友子 (三刀屋町文化財委員)
調査補助員	足木 嘉宏 赤名 卓大 (仁多町教育委員会)

調査指導 島根県教育庁文化財課

蓮岡 法暲 (島根県文化財保護審議会委員)

山根 正明 (島根県立松江南高等学校教諭)

調査作業員 青戸 延夫 安立 一男 伊藤 正樹 春日 昭二 田中 修司

山根 知雄

4. 出土人骨遺物等の鑑定、年代測定、科学分析は次の方々へ依頼し、その結果は本書付録に収録した。(敬称を略す)

人骨鑑定 井上 晃孝

^{14}C 年代測定 川野 瑛子 柴田せつ子 (大阪府立大学先端科学研究所アイソトープ総合研究センター)

鉄滓等の分析調査 村川 義行 (安来市体育文化振興財団和鋼博物館)

5. 現地調査と報告書作製にあたっては下記の方々から助言と協力をいただいた。(敬称を略す)

内田 寛・落合 進 景山 真二 宍道 正年 鈴木 結・田中 一雄

西尾 克己 林 健亮 松本 岩雄

内田工務店(有) 佐藤工務所(株) まるなか建設(株)

6. 挿図中の方位は、国土Ⅲ座標系の値を示したもののほかは調査時の磁針で示した。なお磁気西偏角は $7^{\circ}15'$ ほどであった。高さは標高で示した。
7. 遺物の実測、挿図の浄書等は藤原、赤名が担当し、野津、足木が協力し、藤原 信幸も加わった。写真撮影は野津、赤名がそれぞれ行った。カットは赤名が担当した。
8. 執筆は杉原、野津で分担し、目次と文末に氏名を記した。編集は杉原、野津、藤原、赤名が行った。
9. 出土遺物や調査図・写真は仁多町教育委員会が保管している。



目 次

序文	教育長 石飛 弘	
例言		
I 調査に至る経緯と経過	(植田・杉原)	1
いささつ 平成11年度遺跡確認調査について 平成12年度発掘調査の経過		
II 位置と環境	(杉原)	13
殿ヶ迫横穴墓群	(野津・杉原)	15
はじめに 立地と環境 調査の概要と範囲 遺構 出土遺物		
若干の考察 むすび		
西尾社遺跡	(野津・杉原)	63
はじめに 地形と環境 調査方法 遺構と遺物 若干の考察とまとめ		
亀ヶ谷遺跡	(野津・杉原)	83
はじめに 試掘調査の概況		
土器片包含散布区域 (A区) について		87
土器包含層の状況 土器片を主とする遺物検出状況 出土遺物 小結		
製鉄址 (B区) について		97
遺構の検出 製鉄遺構について 採取鉄滓等 炉体復元の試み		
理化学的検討 小結		
シベ石遺跡・時仏遺跡	(杉原)	117
はじめに 調査の概要 シベ石遺跡 時仏遺跡 むすび		
時仏山横穴墓	(杉原)	127
発見と経緯 遺構 遺物 付近の分布確認 むすび		
付編 I 仁多町時仏山横穴墓・殿ヶ迫横穴墓群出土人骨	井上晃孝	143
II 亀ヶ谷遺跡・殿ヶ迫横穴墓群より発掘された木炭の ¹⁴ C年代測定	川野瑛子・柴田せつこ	163
III 亀ヶ谷遺跡出土鉄滓・炉壁片の分析調査	村川義行	167

挿図目次

図1 調査地点全図	3	図3 30・32地点地形図	6
2 27地点地形図	4	4-1 68地点地形図	8

4-2	68地点土層図	8	図6	72・105地点地形図	10
図5-1	70・71地点地形図	9	7	99地点地形図	12
2	# 上層図	9	8	遺跡分布図	14

殿ヶ追横穴墓群

図1	後背墳丘他トレンチ土層図	18	図14	5号穴実測図	36
2	殿ヶ追横穴墓群地形図	19~20	15	墳丘出土遺物	37
3	後背墳丘と周溝断面	21	16	1号穴丘上出土遺物	37
4	1-1号穴実測図	24	17	1号穴前庭流入土中出土遺物	38
5	# 玄室内の状況	25	18	1-1号穴出土遺物	39
6	1-2号穴実測図	26	19	2号穴前庭トレンチ出土遺物	40
7	# 玄室内の状況	27	20	2号穴出土遺物	41
8	2号穴玄室内の状況	28	21	3号穴前庭流入土中出土遺物	41
9	3号穴 #	28	22	3号穴出土遺物	42
10	2号穴実測図	29~30	23	4号穴前庭トレンチ出土遺物	43
11	3号穴 #	31~32	24	4号穴出土遺物	44
12	4号穴 #	34	25	No8 落込み出土遺物	46
13	# 玄室内の状況	35			

西尾社遺跡

図1	地形実測図	65	図5	参道断面図	72
2	トレンチ配置図	67	6	石積部実測図	72
3	土層図	68	7	妙見社跡実測図	74
4	虎口部実測図	70	8	出土遺物	76

亀ヶ谷遺跡

図1-1	地形図	85	4	B区鉄滓散布状況	98
2	土層図	86	5	排滓の分布	99
2	A区遺物出土状況	88	6	B区加床部とが壁破片の落込み	100
3-1	A区出土遺物(1)	90	7	B区減出滓	101
-2	# (2)	91	8	# 炉底滓	102
-3	# (3)	92	9-1	B区炉壁片(1)	104
-4	# (4)	94	9-2	B区炉壁片(2)	105
-5	# (5)	95	10	炉の推定復元	107

シベ石遺跡・時仏遺跡

図1 シベ石遺跡・時仏遺跡実測図	120	図3 シベ石遺跡主部平面図	122
2 シベ石遺跡調査前地形図・十層図	121	4 時仏遺跡実測図	123

時仏山横穴墓

図1 地形図・トレンチ図	129	4-1 勾玉・切子玉	133
2 遺構図	131	2 ガラス小玉	134
3 玄室図	132	5 ガラス小玉計測分布	134

図版目次

殿ヶ迫横穴墓群

PL1 遠景・他	51	PL7 4号穴・5号穴	57
2 発掘状況	52	8 墳丘・前庭・他出土遺物	58
3 周溝と炭散布状況	53	9 1-1号穴・1-2号穴出土遺物	59
4 1-1号穴・1-2号穴	54	10 2号穴出土遺物	60
5 2号穴	55	11 3号穴出土遺物	61
6 3号穴	56	12 4号穴出土遺物	62

西尾社遺跡

PL1 A地点発掘状況	79	PL3 出土遺物	81
2 B地点	80		

亀ヶ谷遺跡

PL1 遠景とA区発掘状況	109	PL5 B区発掘状況	113
2 出土遺物(縄文・弥生土器)	110	6 出土遺物(流出滓・炉底滓)	114
3 " (土師器)	111	7 " (炉壁片)	115
4 " (須恵器・石礫器)	112		

シベ石遺跡・時仏遺跡

PL1 シベ石遺跡発掘状況	125	PL2 時仏遺跡発掘状況	126
---------------	-----	--------------	-----

時仏山横穴墓

PL1 遠景と発掘状況	139	PL2 出土遺物(玉類)	140
-------------	-----	--------------	-----

I 調査に至る経緯と経過

1. いきさつ

本町の尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査は、平成4・5年度2カ年にわたって県文化財課及び県埋蔵文化財調査センターによって踏査、分布調査が行われた。以後、追加調査が実施され、本町のダム建設計画区域内において、約30カ所の遺跡及び必要試掘カ所、要注意カ所が確認された。

こうした調査結果を踏まえ、町では11年度から仁多町教育委員会が調査主体となり、尾原ダム建設事業による工事等によって現状が変更され、また将来にわたって保存及び調査不可能な遺跡について、文化財調査を実施することとなった。

11年度は、周辺道路建設及び残土処理計画予定地内において、事前調査で埋蔵文化財調査が必要とされたNo.27、No.30、No.32、No.68、No.70、No.71、No.72の計7カ所について確認調査、試掘調査を実施した。11年度に実施した確認調査の概要については、本報告書にあわせて記載しているのでご覧いただきたい。

12年度は、11年度の確認調査結果を踏まえ、No.27-A(西尾社遺跡)、No.27-B(殿ヶ迫横穴墓群)、No.32-C・D(林原山頂遺跡)、No.32-F(小廻上遺跡)、No.72-A(シベ石遺跡)、No.72-B(時仏遺跡)の発掘調査、そして新たにNo.99(亀ヶ谷遺跡)の試掘調査、計7カ所について調査を行うこととした。年次計画により調査を進める中、9月下旬、尾原ダム建設付替道路町道八代三沢線工事中に横穴墓一基が新たに発見され、関係者協議の上、仁多町教育委員会が緊急の発掘調査を行った。この遺跡はNo.105(時仏山横穴墓)とした。こうした緊急の調査を実施したこともあり、当初予定していたNo.32-C・D(林原山頂遺跡)とNo.32-F(小廻上遺跡)の調査については、次年度以降の調査となった。なお、No.99(亀ヶ谷遺跡)については、試掘調査に引き続き発掘調査を実施した。

12年度の調査は、面的には小規模ながら調査カ所が多く、場所的にも山あい位置するなど調査自体多くの困難が伴ったが、調査団の精力的な取り組み、少人数ながらよく連携が図られた調査体制により、当初の計画が概ね達成され、多くの新たな発見と成果を見ることが出来た。

以下、12年度の発掘調査結果をここにまとめた。

(植田)

2. 平成11年度遺跡確認調査について

県教委によって行われた事前の遺跡分布調査（踏査）により指摘された地点について、平成11年度仁多町教委は次の諸地点の確認調査を行い、本調査の要否等を検討した。その調査経過と成果の概要は次のようである。

1) 経 過

作業の流れを抄記すると次のようである。

平成11年4月5日	打合せののち現地の下見
15日	作業計画打合せ
21日～	30地点 地形測量～試掘
5月13日～	32地点 地形測量～試掘
6月4日	32-B地点 石積遺構現地指導を受く 宍道正年・松本岩雄（島根県埋蔵文化財調査センター）
〃	（27地点 地形測量を委託する）
28日～	72地点 草刈りから始める
7月8日～	68地点 草刈りのち地形測量
21日～	71地点 草刈りから始める （ 中 断 ）
12月10日	27地点で横穴墓群を確認
12月12日	
～3月14日	各地点の補充調査
平成12年1月13日	調査概要とりまとめ

2) 成果の概要

27地点

∴地 形

斐伊川に大きく張り出す丘陵の先端部で地区の氏神である西尾神社が祀られていたところである。この尾根を登りつめると中世三沢氏の支配する水ノ手城跡に至る。小字地名は斐伊川に面した西斜面は「西ノ尾」、東の谷に面しては「殿ヶ迫」であり、社地は「東垣内」となっている。

∴調査方法

約200×120m範囲について立木のまま地形測量を行い、一部に試掘トレンチを設けて観察した。

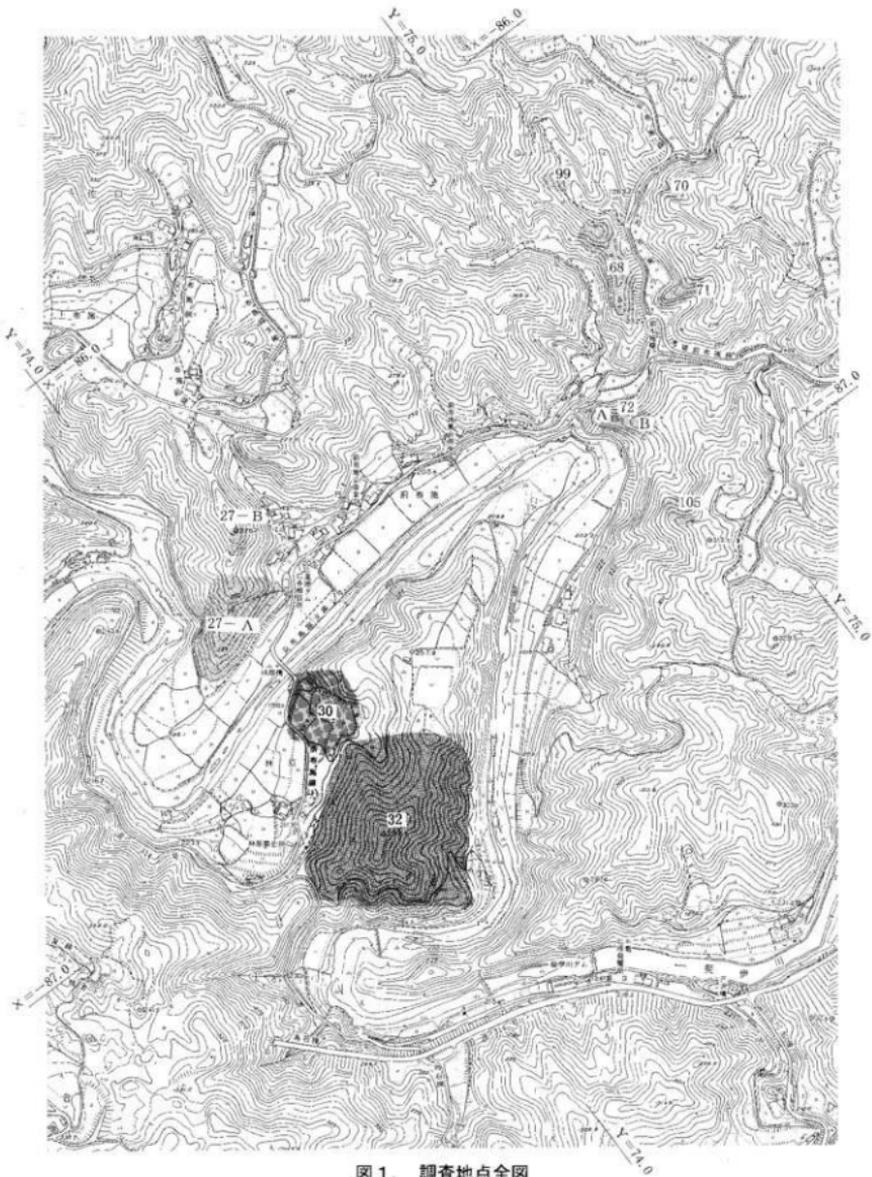


图 1. 調查地点全图



図2. 27地点地形図

∴調査所見

- 1) 事前分布調査で指摘されている鉄滓等は認められなかった。
- 2) 麓から尾根沿いに登る路は大きく掘り割ったもので、西尾神社敷地とともに中世城郭の一端かと思われた。
- 3) 南西突端部は「トウダエカケ」「灯台掛道上」などの地名から近世行われていた川舟運輸に関与するものかと思われた。
- 4) 社祠後背丘上に集石遺構がある。

5) 社地から約150mほど登った尾根上に小マウンドがありその東斜面に連続する落ち込みがあり、試掘によって横穴墓群を確認した。

以上から西尾神社付近をA地点とし、中世砦遺構かとした。

尾根を登った横穴墓群はB地点としてこれを区分した。

30地点

∴地 形

林原地区字橋詰の南西で、北に開くやや広い谷地形の水田部分である。小字地名は「色黒」「家ノ廻」で、10数年以前に圃場整備工事が行われ旧来の棚田地形は大きく変わっている。対象範囲は宅地を除く約150×130mで、事前の指摘の「地名により鉦ありや」は誤りである。

∴調査方法

範囲内の地形測量を行い、谷を縦断するトレンチ2本を設けて観察した。

∴調査所見

2本のトレンチの結果は本質的にほとんど同様で、圃場整備工事による敷き均し土層が幾重にも重なりあっているが、その下に部分的ながら旧水田土の残るところと、粘質地山のところがほぼ交互に認められる。いずれも地下浸透水が多く、旧来の伝承であるフケ田（強湿田）であったことがうかがわれる。これら下層土中からも文化財に関する何らも検出し得なかった。この状況から開田以前の旧地形は浅く広い谷間で水湿であり、人為は及んでいなかったと思われた。よって、遺跡調査の対象地から外すこととした。

32地点

∴地 形

当初指摘が「緩斜高まりあり、山林」としている山林で、南北約400m・東西350m頂部に林原三角点のある独立山塊のほぼ全域が対象である。この頂部から四方へ派生する支尾根があり、山腹はいずれも急斜面である。

∴調査方法

稜線上総延長約800mについて実測したうえで、頂部のほかに小平坦面や緩やかな部分もあることからこれに着目して、A～F地点としてトレンチを設けて観察した。

∴調査所見

A地点：北尾根下端近く荒神神木の巨株がある、わずかな緩斜面である。トレンチによってみる

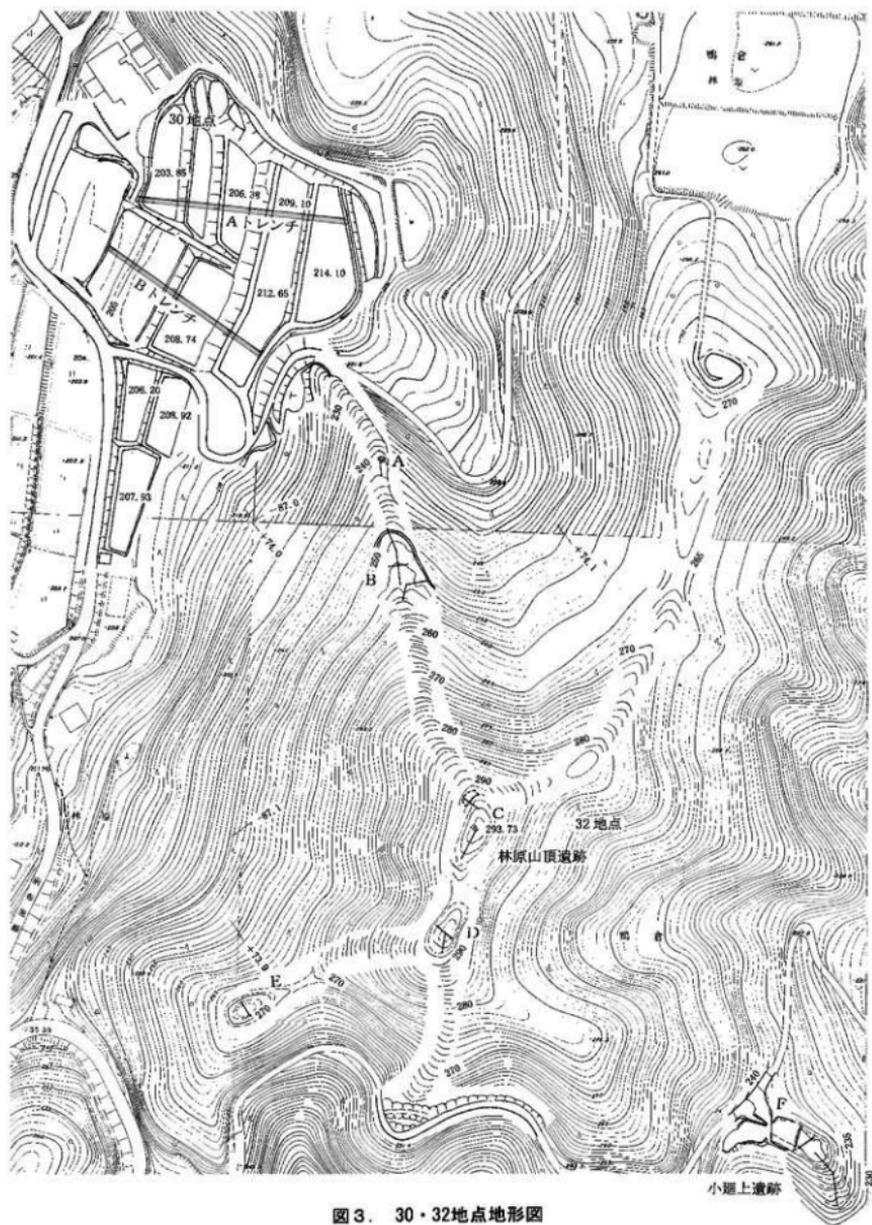


图3. 30・32地点地形图

と全く人為の痕跡はなく、また焚火跡等も認められなかった。この状況からA地点は調査対象地から除くこととした。

B地点：北尾根中ほどに20×8mほどの平坦面があり、中央に石積み遺構と縁辺に2ヶ所凹入地形があった。また付近には1～2mほどの巨石が露頭していた。トレンチによってみると石積みは川原の円礫を用いた石積み塚で、中心部は深く攪乱されている。これは“イシグロサン”と呼んでいて墓地移転に際し掘り返したところと聴いた。しかし残存状況は良いとは云えず、またその性格もいまひとつ明確にし難かった。凹入地形部分は試掘によって炭焼窯とその材料粘土採掘部であると判断された。

C・D地点：山頂のフラットな面の南側（C地点）と北側のやや高まる所（D地点）であり、その間はわずかに鞍部をなしている。トレンチによってみるとC地点北東縁部に縁石を置いたわずかな削り出しテラス状地形が、D地点北西縁には2段の小テラスが削り出して造られており、その1つにはわずかながら木炭片が認められた。しかしこれらの性格については明確にし難かった。

E地点：山頂から南東へ大きく急降下してやがて高まる陵端部でその先下方は“三沢坂の路”とされる間道があったところである。このフラットな面は略円形で人工的な面か否かをトレンチで検討した。土層はすべて自然土層序であったが、表面中央に幅1.2～1.5mの踏圧かと思われる部分があり、かつて山通りの路であったかと思われた。しかし、遺跡につながる何らも認められなかったので今後の調査対象からは外すこととした。

F地点：山頂から南東へ大きく下って斐伊川の屈折するあたりに張り出す瘤状地形のところ、現行の墓地とそれに続くやや平坦な面が3面認められる。調査は60×20mほどの範囲について地形測量を行い、3本のトレンチを設けて観察した。最も広いフラットな頂面は表上が厚く畑耕作が行われたところであった。それに続く第2面、第3面は削り出して前方に盛ったテラス状にした加工段であり、それぞれ前端には土留めとみられる石積みがみられる。これらも一時畑地となっていた可能性があるが付近には耕地はなく、墓地も含めて中世に関わる川沿いの物見郭の可能性も否定出来ない。

32地点については以上のようにB、C～D、Fの各地点についてさらに調査を要するものとし、

A、E地点は自然地形のままであることから調査対象から外すこととした。

68地点

①地形

上布施地区から南へ長く延びる丘陵の前半部分で、町道によって先端部分が切断されている。尾根上はやや狭くところどころで高まりながら続き、山腹はいずれも急斜面又は旧崩壊崖となっている。事前の指摘は「字大横手で、平坦面」となっているが、ところどころの高まりを指すのであろうか、かつての旧山路の痕跡がほぼ尾根伝いに認められる。

△調査方法

稜線上を対象に約170mについて刈払いの後地形測量を行い、高まり部と極く狭隘な鞍部にトレンチを設けて観察した。

△調査所見

尾根上の幅は2.0～2.5mほどで高まり部はやや厚い衣層土の森林土層序であり、自然のままであった。鞍部は幅0.75mほどの路面で旧地形の上に台形の盛土を行ったものであり、地形鞍部に盛土した陸橋状の通路であった。この通路はほぼ尾根沿いに通っていて柚路とみられた。このように文化財に関する所見はなく、調査対象から外すこととした。

70地点

△地形

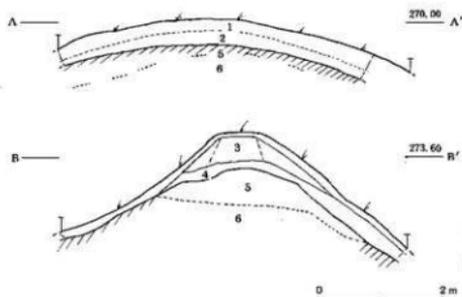
奥まった谷間に北から張り出す小支尾根とその西側の小谷部分である。この尾根は傾斜しながら谷川へと急降下している。事前の指摘は「平坦面」となっているが、何処を指しているのか不明である。



図4-1. 68地点地形図

△調査方法

刈払い後精査の予定で、先ず現状のまま踏査した。しかし何らの異状もなく自然地形のままであることから谷間やや下方のやや広い部分にトレンチを設けて観察した。



- | | | |
|---|------|--------------|
| 1 | 表層 | 5Y 7/4 浅黄 |
| 2 | 表土 | 2.5Y 4/2 暗灰白 |
| 3 | 盛土 | 5Y 7/2 灰白 |
| 4 | 旧表土 | 2.5Y 7/3 浅黄 |
| 5 | 風化地山 | 2.5Y 5/3 黄褐 |
| 6 | 地山心土 | 5Y 8/3 暖黄 |

図4-2. 68地点土層図

△調査所見

人工的加工地形もな

く、トレンチでは近世とみられる枝木焼きの炭灰層が一部分にみられたのみである。よって調査対象から外した。

71地点

1. 地 形

前布施橋のあたりに向かって南西に下降する支尾根で、尾根端はやや平坦気味であるが高まりにはなっていない。尾根を70mほど遡ったあたりから急峻となる。南裾の谷間は林木運搬のため



図5-1. 70・71地点地形図

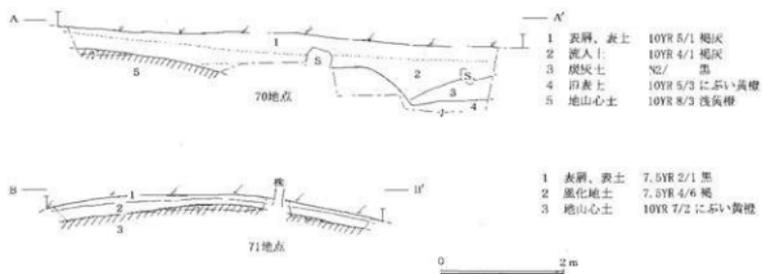


図5-2. 70・71地点土層図

重機によって作業路がつけられ、それより急昇して谷奥に達している。指摘事項は「平坦面」となっている。

△調査方法

延長約130mについて刈払い、踏査による地表からの観察と丘端上のフラットな面にトレンチを設けて観察した。

△調査所見

谷入口部は現町道と運材用の埋め立て平地になっている。丘陵南側中腹にはほぼ水平に走る水路跡と思われる横手路があり、その先端は丘端の崖に達している。丘端部のフラットな面は森林自然土層のままで人為の痕跡はなかった。これによって調査対象から外すこととした。



図6. 72・105地点地形図

72地点

・地 形

斐伊川が強く屈曲して流れる瀬先にあたる丘陵端部で、川に面した南向斜面は岩盤質の崖地形である。約70mの尾根基部あたりはややフラットな面となり、さらに一段高くフラットな面が奥に広がっている。

・調査方法

100×10～20mの丘陵上面を刈払い、地形測量ののちトレンチ3本を設けて観察した。

・調査所見

丘陵頂部は岩質の地山に狭い削平面がつくられていて、尾根上にはこれに連なる削り出した山路があり、その際に排除した礫石が傍らに積まれている。この路は南谷奥方面へと続き、南西方向麓部の集落へ至るものと思われる。尾根基部 一段高い緩斜面には直径約5mの人工とみられるマウンド1基がある。この2ヶ所については次年度以降調査を要するものとした。

平成11年度の調査概要は以上のものであり、これによって次の結果を得た。

棄却した地点はNo.30, No.32-A, No.32-E, No.68, No.70, No.71

本調査を要する地点はNo.27-A, No.27-B, No.32-B・C～D・F, No.72-A・B

3. 平成12年度発掘調査の経過

年度当初、仁多町教育委員会は昨年度において確認した諸点について発掘調査を行うこと、及び新しく要確認地点として99地点の分布確認とそれに引き続いて本調査を行うこととした。ところが、9月に調査区域としていなかった地点で施工中に横穴墓が発見され、これの緊急発掘調査を行うこととなった。そのため当初予定地点のうち32地点についてはこれを次年度以降に延期することとし、次のような流れで作業を進める結果となった。

平成12年5月9日	本年度発掘調査予定地について伐木を森林組合へ依頼
22日	72-A地点 発掘調査開始
25日	72-B地点 発掘調査併行開始
6月12日	27-B地点 地形測量開始
15日	99地点 草刈り、地形測量のち試掘確認
26日	〃 本調査発掘に切り替える
7月27日	27-B地点 発掘調査開始
8月	〃 この間1-1号穴～5号穴の調査
9月1日	〃 現地指導会（池淵氏、蓮岡氏、西尾氏）
2日	〃 現地説明会 参加者42名

- 9月4日 " 被葬者供養
- 6日 " 井上晃孝先生により人骨取り上げ
- 13日 " ¹⁴C年代測定依頼のための木炭試料準備のち発送
- 22日 亀ヶ谷遺跡出土鉄滓等の冶金学的検討を和銅博物館に依頼
- 27日 宇時仏山にて工事中、横穴墓を発見との連絡あり現地確認す
- 10月3日 三者協議の結果、以降の予定を変更して時仏山横穴墓の緊急発掘調査を始める
- 11日 時仏山横穴墓 人骨取り上げ 現地終了
- 12日 27-A地点 試掘拡大及び本調査開始
- 11月14日 " 現地指導会（山根氏、蓮岡氏、池淵氏ら）
- 12月1日 " 現地調査終了

24日～ 各地点の調査データ整理、出土土器の処理等、内業を開始する

このように平成12年度の調査は当初計画を若干変更しながら次の各地点について行ない、32地点関係を後送りすることになった。

旧分布地図No.	届出遺跡名
72-A	シベ石遺跡
72-B	時仏遺跡
27-A	西尾社遺跡
27-B	殿ヶ追横穴墓群
99	亀ヶ谷遺跡
(105)	時仏山横穴墓

(杉原)



図7. 99地点地形図

II 位置と環境

各調査地点は大まかに仁多町中心部である三成の町並みから北西約3km、標高約300mほどの斐伊川本流沿い地帯にあたる。

斐伊川はこのあたりで南北から張り出す比高100mほどの支尾根の先端を削りながら大きく蛇行して北西方向へ流れ下るところであり、河床には流れで円磨した巨岩が類々と重積している。

一帯に母岩は角閃石を含む花崗岩の地域で、近世以来かんな流しによる砂鉄採集が盛行したところでもある。中世には出雲最強の国人と呼ばれる三沢氏の拠点区域であり、城砦が点在する。さらに古くは、出雲神話の“肥の川上み”にあたることとされ、古墳時代後～末期の古墳や横穴墓等がやや密に分布している。これらは大字佐白及び八代地区と大字鴨倉地区に集中する傾向がみられ、また河岸段丘上には点々と縄文時代の痕跡がみられる。

図示した範囲について主な遺跡を概観すると、縄文晩期初めごろの墓地遺跡は倒立並置埋壺が発見されて著名であり、下鴨倉遺跡は縄文前期以降晩期に至るまでほとんど各期の土器片を出土する中国山地での代表的な縄文遺跡である。この2例は斐伊川及びその支流である阿井川の河岸丘に立地している。弥生時代の遺跡は顕著でないが後期から古墳時代へかけての集落を思わせる遺物散布地が挙げられる。

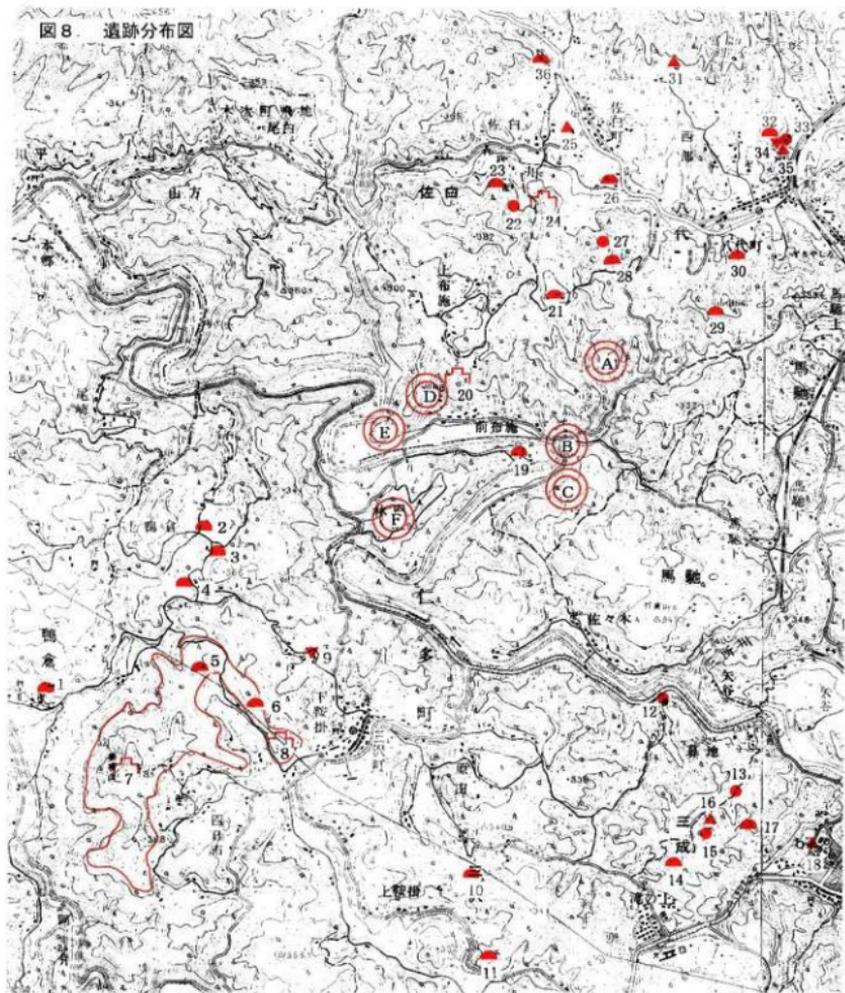
古墳や横穴墓は多数知られているが、中期後半の丸子山古墳以外は後期～末期に属す。丘陵頂部や尾根上には主として中小の円墳があり、代表的ものは布勢地区では米雲寺上古墳群、一畑山古墳群や希少な前方後円墳の長福寺古墳がある。三沢・鴨倉地区では丸子山古墳に近い深谷古墳群や正覚古墳群、家ノ上古墳群、菅田古墳群等があり、穴観2号墳は前方後方墳として仁多郡内最大である。横穴墓もこれら円墳の分布にほぼ等しく、支尾根山腹に数穴単位の群をなしており、発見時には立地が風化花崗岩（真砂土質）のためにか人骨の残存が特に良好であったとされるものが多い。そのうち比久尼原V号横穴では集骨葬で、その上に絹布が被せてあった希少例である。

中世城郭では県指定文化財の三沢城跡が筆頭で、これに関わる支城の布広城のほかに築城として水ノ手城や、やや後出する佐白城などが山頂或いは丘頂に築かれて出雲国南端部の守りの一角をなしている。

中～近世は製鉄産業の盛行したところであり、近世以降原料砂鉄の採掘場であるかんな流しのあとは大字鴨倉や大字佐白、八代あたりに散在する。中世は河川から採取していたようだ。この砂鉄を製錬するたたら跡は大字八代地区の金原炉跡（近世）、大字三成の古ヶ迫製鉄跡（中世か）或いは三成鍛冶屋小路遺跡などが知られている。

(杉原)

図8 遺跡分布図



- | | | | | |
|------------|------------|--------------|--------------|--------------|
| A 亀ヶ谷遺跡 | 1 光徳寺古墳 | 10 正覚古墳群 | 19 林原古墳 | 28 上布施横穴群 |
| B シベ石遺跡 | 2 穴観古墳群 1号 | 11 家ノ上古墳群 | 20 水ノ手城跡 | 29 才げた横穴群 |
| C 時仏山遺跡 | 3 " 2号 | 12 暮地遺跡 | 21 上布施-畑山古墳群 | 30 堂ノ前古墳 |
| D 殿ヶ追横穴墓群 | 4 菅田古墳群 | 13 武者山遺跡 | 22 六方遺跡 | 31 金子松鉦跡 |
| E 西尾社遺跡 | 5 比久尼原横穴群 | 14 深谷古墳群 | 23 玉雲寺上古墳群 | 32 長福寺古墳 |
| F (林原山頂遺跡) | 6 どけや古墳 | 15 吉ヶ追遺跡 | 24 佐白城跡 | 33 長福寺遺跡 |
| | 7 三沢城跡 | 16 吉ヶ追製鉄跡 | 25 佐白・原鉦跡 | 34 長福寺古墓 |
| | 8 布広城跡 | 17 丸子山古墳群 | 26 中山古墳群 | 35 金原鉦跡 |
| | 9 為石古築 | 18 三成鍛冶屋小路遺跡 | 27 上布施遺跡 | 36 伊賀神社境内横穴墓 |

との が さこ
殿ヶ迫横穴墓群

所在地	仁多町大字佐白1278
調査面積	1000㎡ (内 発掘855㎡)
調査指導	西尾克己 (島根県埋蔵文化財調査センター) 蓮岡法暉 (島根県文化財保護審議会委員) 池淵俊一 (島根県教育庁文化財課)
人骨鑑定	井上晃孝
¹⁴ C年代測定	川野瑛子 (大阪府立大学先端科学研究所)
調査期間	平成12年7月27日～9月27日

1. はじめに

尾原ダム建設関連で計画された前布施地区作業道敷設予定地内の該地において、事前の指摘は27地点「散布地（鉄滓）」となっていた所で、平成11年度の分布調査においては遺物としては何れも発見できなかったが、この地点には中世城郭の虎口を思わせる構造（27-A地点）や、北へ上る尾根中程にある数カ所の落ち込みから横穴墓（27-B地点）が予想され、トレンチにより確認した。そして本年度木発掘調査を行ったのである。遺跡名称は、27-A地点を「西尾社遺跡」とし、27-B地点を「殿ヶ迫横穴墓群」とした。

殿ヶ迫横穴墓群は、斐伊川に向かい南西に大きく張り出す丘陵を北へ登る尾根の中間にあたり、稜線南～南東斜面上方に位置する。数カ所の落ち込みのうち、一つ（4号としたもの）にトレンチを入れた結果、横穴墓の前庭部を検出した。そして本年度横穴墓と思われる箇所すべてにトレンチを入れ、検出した6穴について750㎡を全面発掘した。

2. 立地と環境

隣接する高地の上下布施地区から南西の斐伊川に向かって長く延びる高い尾根の中ほどに位置する。この尾根の先端部には西尾神社や虎口状構造が造られているところである。

この丘陵は尾根上の幅が約6～8mほどで東西両斜面ともに急峻であり、特に字「殿ヶ迫」の谷に面した東側は大きく崩壊崖となっている部分が多い。また尾根に沿って地山母材に地割れかと思わせる破砕帯又は亀裂状の部分が多々みられ、上記の大きな崩れ崖の起点もそれかと思われるふしがある。尾根半ばあたりではこれを幅広く削って袖路としていたところもあり、その高まる所を活かして墳丘状小マウンドがつくられ、その南～南東斜面に当該横穴墓群が営まれている。

またこの横穴墓群の南東麓には「堂木」「元屋敷」「本家」などの屋号がみられ尼墓などと伝える古墳もある。

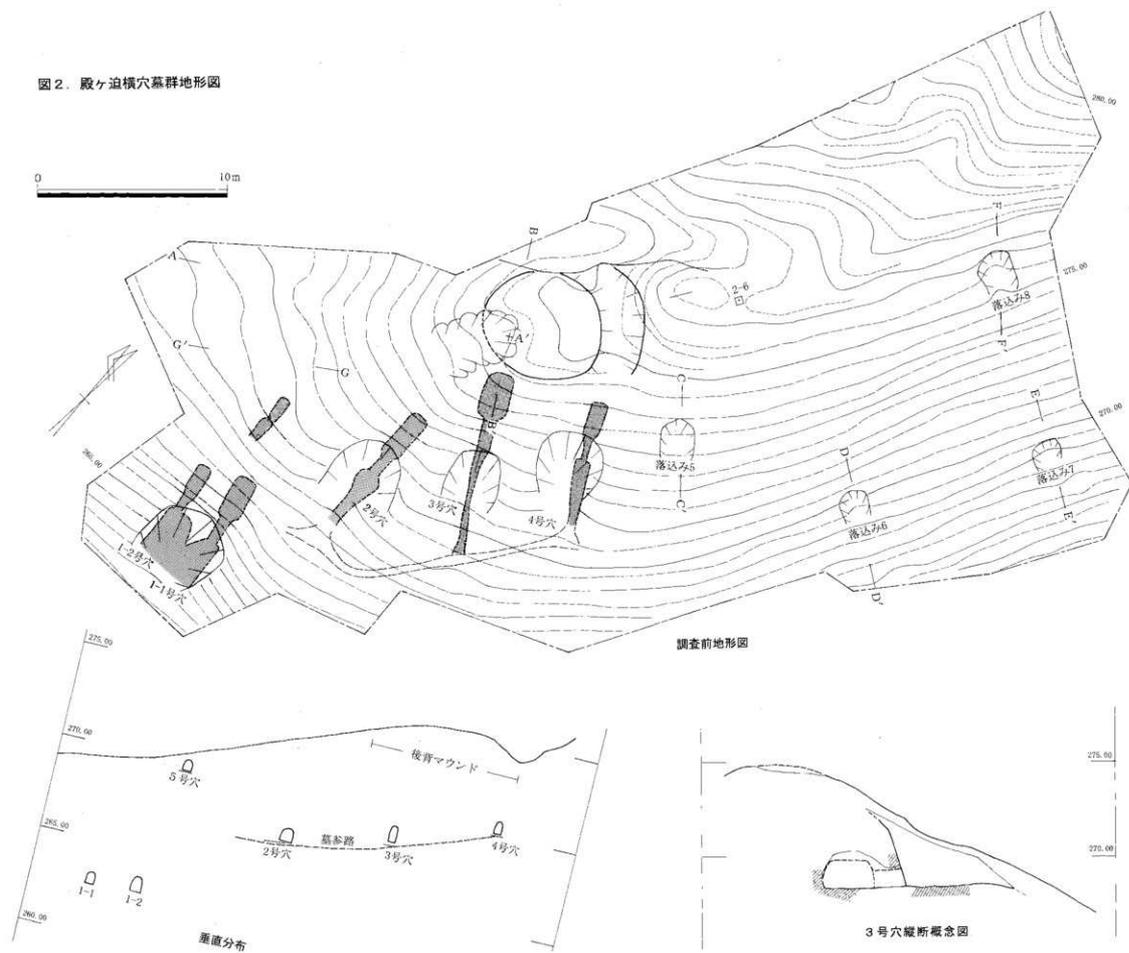
3. 調査の概要と範囲

斐伊川に大きく突き出す丘陵を北へ上る尾根中程の稜線南～南東斜面に位置する8ヶ所の落ち込みにトレンチを入れ半掘し、横穴墓であるか否かを確認した。《うち1つは前年度に確認済み（落ち込み4）》

その結果、落ち込み4より南にある落ち込み3箇所は横穴墓であり、南側から1号横穴墓・2号横穴墓・3号横穴墓・4号横穴墓とした。残りの落ち込み（5・6・7・8）はトレンチで断面を観察した結果、根株を掘り起こした跡であった。落ち込み№5～7には遺物は何れもなかったが、落ち込み№8の急斜面の表層からは弥生土器の平底部を検出した。これは他からもたらされて流れ込んだのであろう。

1号墓については当初1穴だと思っていたが、発掘する過程でもう1穴発見したので、向かっ

図2. 殿ヶ泊横穴墓群地形図



で右側を1-1号穴、左側を1-2号穴とした。のちに1号の上方5m程の所で小型の横穴墓を発見、これを5号穴とした。

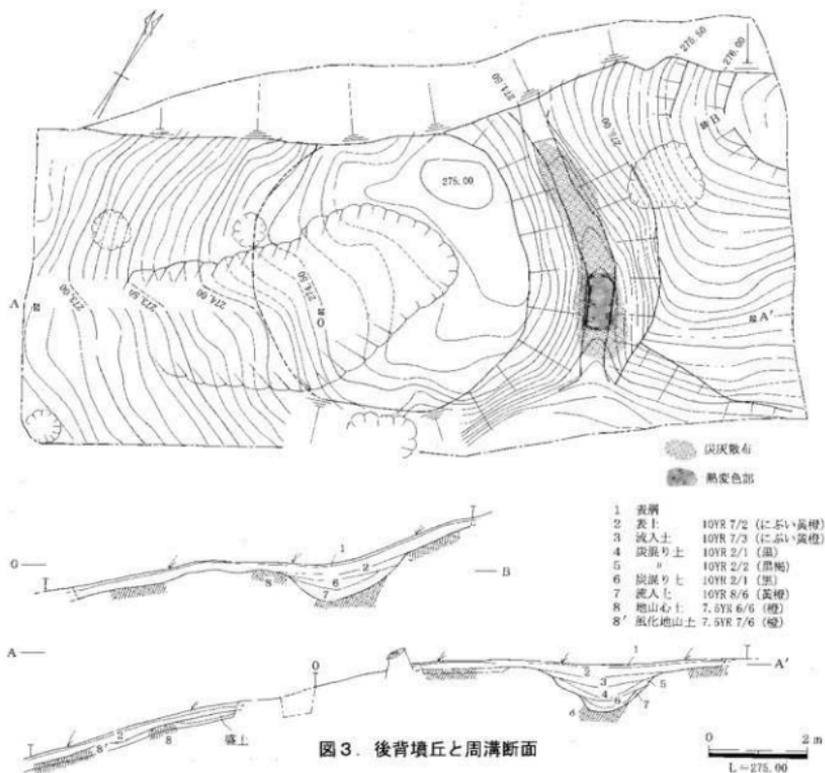
各横穴墓はトレンチで半裁した後前庭から玄室にかけての土層の堆積状況を観察し、その後全掘し玄室内の流入土・崩落土を排出した。また、調査区全域約1000㎡を25cmコンターで平板測量した。

後背墳丘については、四分法により全面発掘を行った。全面発掘面積は855㎡であった。

4. 遺構

1) 尾根上の遺構と墓道

軸路沿いに尾根上が縦断された東側のわずかな高まり部で、北に続く尾根筋を深く掘り切って若干盛り上げマウンドとしている。



この周溝は上端幅2.7m・深さ1.1m・底幅0.6mであり、溝底では2回にわたる焚火跡が検出された。この周溝は尾根を切断するのみで、他の丘表面は自然斜面に摺りつけている。マウンド頂面は現状で薄く盛土しており、直径約5.5mの円形と推定されるが南西地下り方向は雨水の流下によるとみられる幅2～2.5mほどの浅い溝状に崩壊している。

1-1～5号の横穴墓群はマウンドの南東～南側5～10mだった斜面に営まれていて、マウンドに直入するプランのものは3号穴である。マウンドの斜面や、下って各号横穴墓の前庭部に流入した土中から土器片が検出された。これらの多くはマウンド上からの転落流入とみられた。

マウンド上では橙色に焼成した須恵器の細片が雨水溝内から1片出土したのみであるが、周溝の南端付近には同様の須恵器片3個や須恵器大甕片2個が検出された。この溝内での出土レベルは溝底からそれぞれ40cmほど浮いていて、焚火跡や炭灰はその下に堆積していた。なお炭片は小杖状のものであった。

また、マウンドから雨水溝の流下にそって南西へ尾根の緩やかとなる15～20m位置では、表土下面へ流入土中から須恵器大甕片7個が検出された。しかし、これは頂部の品と同一の個体ではなく、マウンド上から流下したものか或いはマウンドから下った尾根上からのものなのかは不明であった。この個体の破片とみられるものが直下の1-1号穴前庭流入土にもみられた。

各号横穴墓についてみると、2号穴及び5号穴は玄室上もすべて崩落して上方から流入土が積もっており、1-1号穴は玄室奥部が剥落はしているものの底状に残っていて、玄室内は流入土で充ちている。1-2・3・4号穴は羨道部を含むほぼ全容が残っていたが入口から土砂が流入していた。そしていずれの号についてもその前庭部は両側面の崩土の上に上方からの流入土が多量に積もっている。これらの流入土中には土器片が混入しており、特に左端で一段低い1-2・1-1号穴においてである。これらの多くは須恵大甕片であるが、なかには例えば4号穴前庭では中世陶器や、1-2号穴前庭では川石の小円礫なども一緒に出土している。

表1 丘上・前庭部出土遺物一覧

	頂部	スエカメ片1 (表土下)		
マウンド	周溝内南寄り	カメ片2 (堆積土)		
	南斜面	スエ(細) 1	スエ(赤) 坏片 4	黒曜石片1 (表土下)
4	号穴前庭	スエカメ片1	スエ(赤) 坏片1	中世陶1 (流入土)
3	号穴前庭	スエカメ片2	スエ(赤) 坏片1 (流入土)	
2	号穴前庭	スエカメ片2	石斧片1 (流入土)	
5号穴及びその付近		— なし —		
1-1	号穴前庭	スエフタ5	スエ台坏2	平瓶2 (羨道直前堆積)
1-2	号穴前庭	スエカメ片5	小円礫4 (流入土)	
1	号上方尾根上	スエカメ片7 (堆積土)		

なお、1-1号穴の羨道の高さに相当する部分にはカカリの付く須恵の蓋片や高台付坏片、平瓶片及び刀子片などが集中して出上する砂土層があったが、これは丘上からの崩落流入とは考え難かった。

このほか各号穴の前庭前端を連絡する路面を部分的ながら検出することが出来た。2号穴から斜め上方へ3号穴、そして4号穴の前庭前端を結ぶもので掘削土を掻き出した盛土上に幅50~60cmほどの踏圧面として認められる。この路面は地山や旧表上面を掘削することは行っていなかった。

2) 1-1号横穴墓

当該調査区最南端に位置し、磁方位S8°40'Eの方向に開口する。床面の標高は262.7mである。

前庭部

奥幅1.1m・奥行き2.6mを測る。向かって左側に隣接する1-2号穴と前庭を共有している。床面は前庭部に向かって僅かに傾斜する。

前庭部遺物出土状況

1-1号穴は1-2号穴と前庭を共有しているため、1号穴前庭として一括して扱う。

須恵器10点・石礫4点を検出している。須恵器は内面にかえりの付く蓋が5点・坏身2点（うち高台の付くもの1点）・平瓶1点・大壺片2点で完形のものではなく破片のみであった。これらの遺物はいずれも堆積土中に包含され、上方からの流れ込みと考えられる。うち、須恵器片2点は羨道部へも流れ込んでいた。

羨道部

奥幅0.68m・前幅0.60m・奥行き1.3mを測る。天井部は完全に崩落している。推定復元高は0.8m弱くらいだろうか。前庭部の閉塞部は床面に深さ6cmほどの抉りが認められる。

玄室

現況では幅が奥壁側で0.96m・袖側で1.16m・最も広い部分で1.3m・奥行き2.45mを測る。天井部・奥壁の遺存状態はきわめて悪い。平面的には長方形胴張りのプランを呈している。天井部は崩落し原型を留めないため高さは不明である。玄室の形態は断面三角形をなす三角テント形で、妻入り両袖様式であったと推定される。

玄室内遺物出土状況

玄室内からは須恵器8点・鉄器1点を検出している。奥壁右隅の壺は、横になった状態で薄い敷砂の上から検出した。奥壁左隅の台付長頸壺は、横に倒れた状態で1cmほどの敷砂上から検出。玄室中央部の刀子は浮いた位置で検出した。天井崩落の際に移動したものと思われる。右袖部の大壺は床を6cm掘り込み据えられていた。大壺奥隣の疎は、横に寝た状態で敷砂5cmの上から検出した。左袖部には手前から輪つまみ付き蓋(18)・やや大ぶりの高台付坏(20)・高台付坏

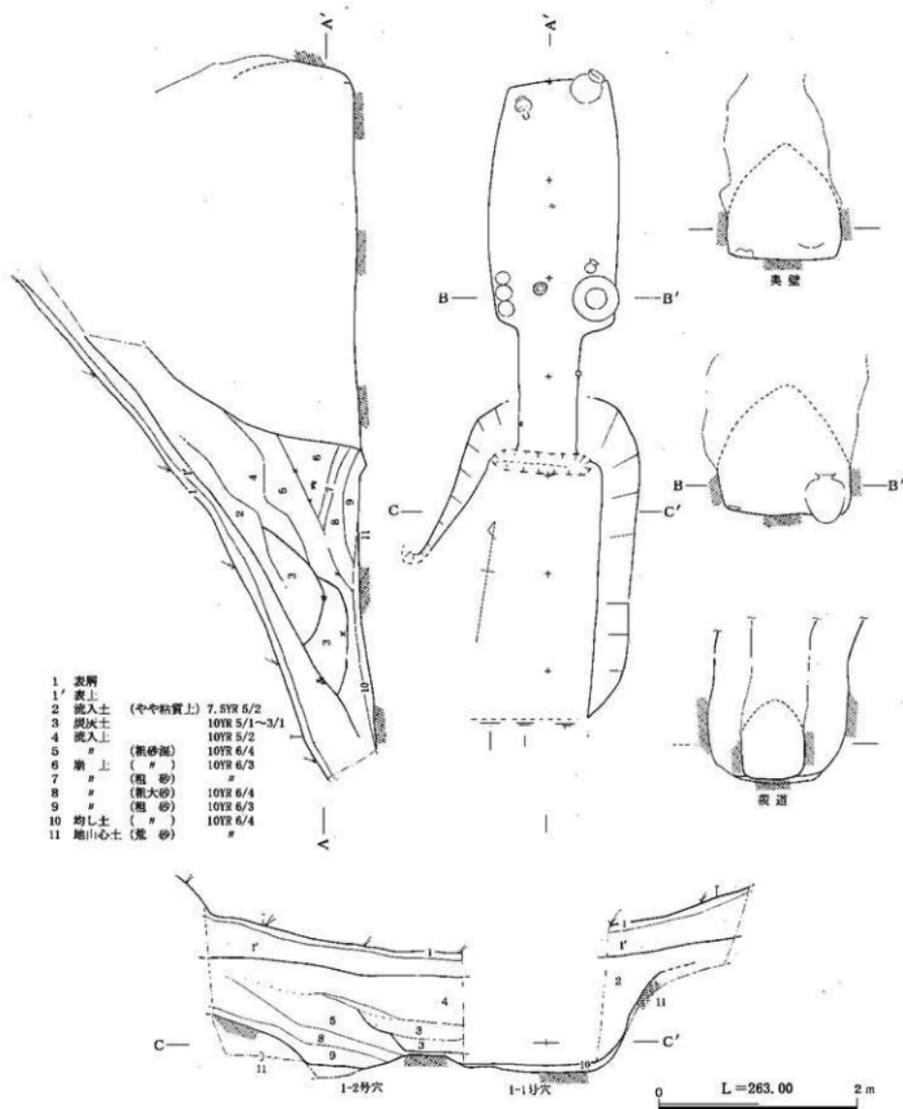


图4. 1-1号穴 実測図

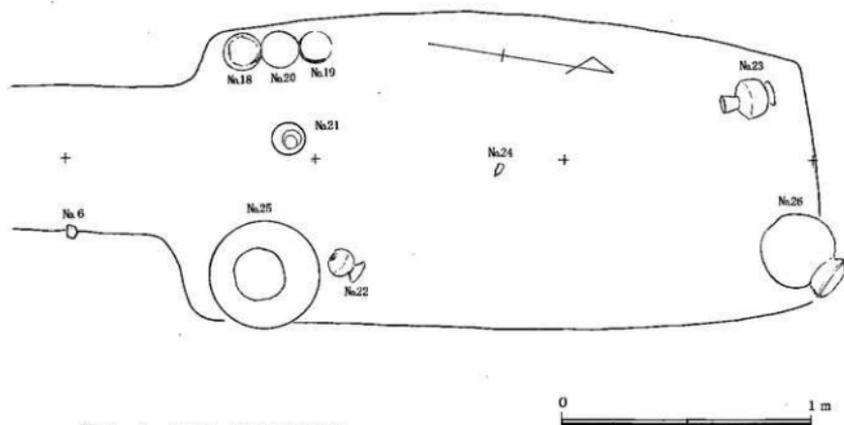


図 5. 1-1号穴 玄室内の状況

(19) の順で検出した。これらは 1cm の敷砂の上に据えられていた。(18) と (20) はセット関係と考えられる。この(18)(19)(20)とも上向きの状態であった。中央の(19)は床より 5cm 浮いた位置に伏せた状態で出土した。

3) 1-2号横穴墓

1-1号横穴墓の西側に隣接し S 8°00' E の方向に開口する。床面の標高は 262.55m である。

前庭部

奥幅約 1.2m を測り、1-1号穴と前庭を共有しているためか右側に広い。床面は玄室床より約 10cm ほど高く前端部に向かって僅かに傾斜する。

羨道部

やや歪な形であるが奥幅 0.7m 弱・前幅 0.5m・奥行き 1.1m を測る。玄室に向かって僅かに広がるタイプである。天井部は一部崩落しているが推定復元高は 0.7m 程だろう。前庭部境界の閉塞部は深さ 9cm ほどの抉りが認められる。

玄室

規模は幅が奥壁側で 0.73m・袖側で 0.76m・奥行き 1.63m を測る。玄室中央部から羨道にかけての天井は崩落していたが奥壁左右両壁の残りは良かった。天井部の残存している所で高さ 0.85m である。非常に高さの低い玄室である。平面的には長方形プランを呈している。両袖は現況では崩落のため歪な形状であるが、元来は右袖は左袖に対する位置にあったと考えられる。しかし、両袖とも僅かなアクセントしかもたず羨道から玄室にかけての平面プランはずんどうな印象をうける。玄室の形態は断面は丸味のある三角テント形で妻入両袖様式であろう。

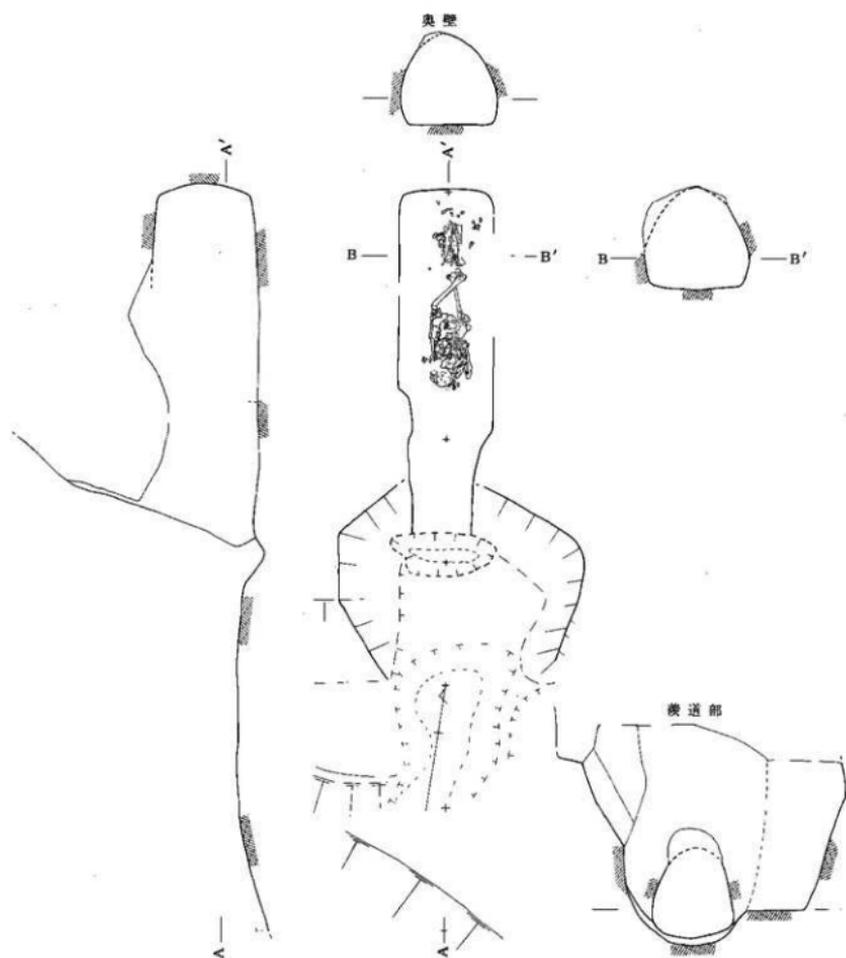


図6. 1-2号穴 実測図

埋葬状況

玄室内には1体の埋葬人骨があった。骨の残存状況は概ね良かった。埋葬は頭位を手前にして玄室ほぼ中央に仰臥伸展位で置かれていた。供献土器、装身具等は何らも検出できなかった。

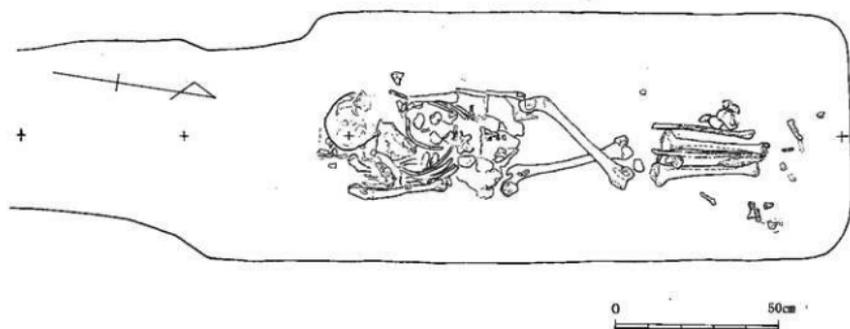


図7. 1-2号穴 玄室内の状況

4) 2号横穴墓

2号穴は前述の1号穴より1段高い位置に造られた横穴墓群に属し、5号穴の東側約6mのところの位置し、S 2°00' W方向に開口する。床面の標高は267.18~267.27mである。

前庭部

奥幅約1.4mで最も広く前庭奥から手前に2mの位置で最も狭く0.8mである。床面は奥端が高く前方へ向かって僅かに傾斜する。

前庭部遺物出土状況

流れ込みによる堆積土中から石斧片を検出したのみである。

羨道部

奥幅0.65m・手前幅0.67m・奥行き1.2mを測り、平面的にはほとんど幅に差の無いものである。天井部は崩落しているが推定復元高は0.7mほどだろう。羨道前端的の閉塞部床面には深さ8cmほどの抉りが認められる。

玄室

規模は幅が奥壁側で0.88m・袖側で1.12m・奥行き2.66mを測る。天井部は完全に崩落している。平面的には奥が狭く、手前がやや広い長方形プランを呈す。床面は奥壁側が高く中央部でやや窪む。推定高は天井部のやや残りの良い奥壁部分から考えて1.2mほどと考えられる。玄室の形態は断面三角テント形で妻入り両袖様式である。

玄室内遺物出土状況

玄室内からは須恵器6点を検出している。奥壁中央~右寄りに坏蓋2点、坏身3点を0.5cm~3cmの敷砂の上から検出。いずれも上向きの状態であった。玄室手前から75cm入った右壁沿いからは床面直置き壺が、右壁側に倒れた状態であった。

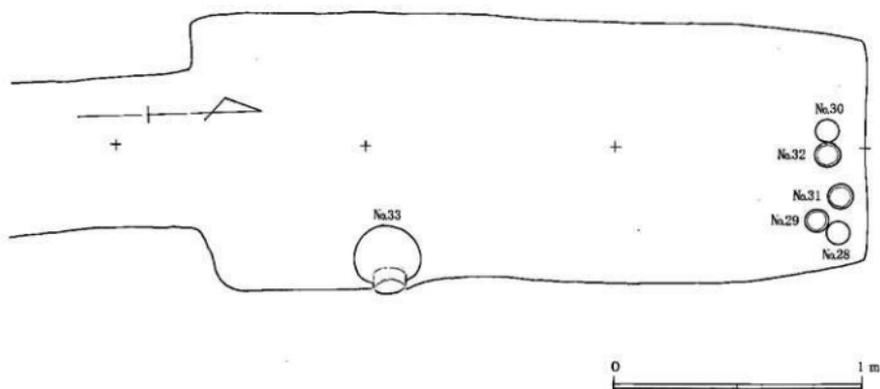


図 8. 2号穴 玄室内の状況

5) 3号横穴墓

2号横穴墓の東側6mのところに位置し、S24°00'E方向に開口する。床面の標高は268.32mである。

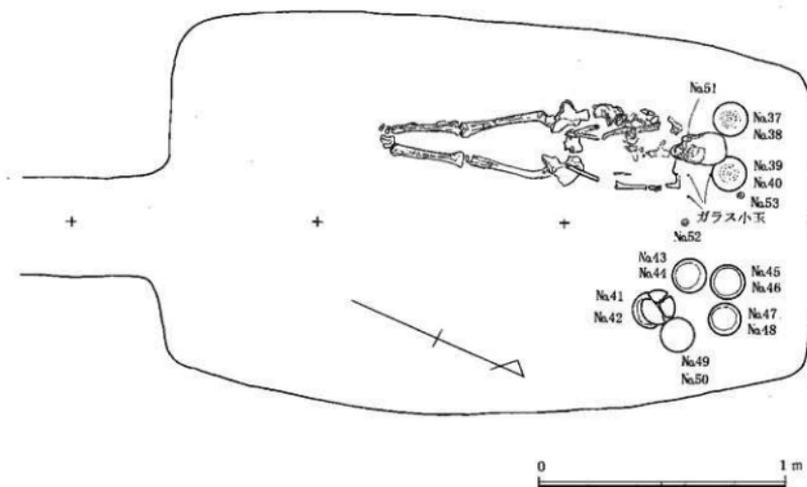


図 9. 3号穴 玄室内の状況

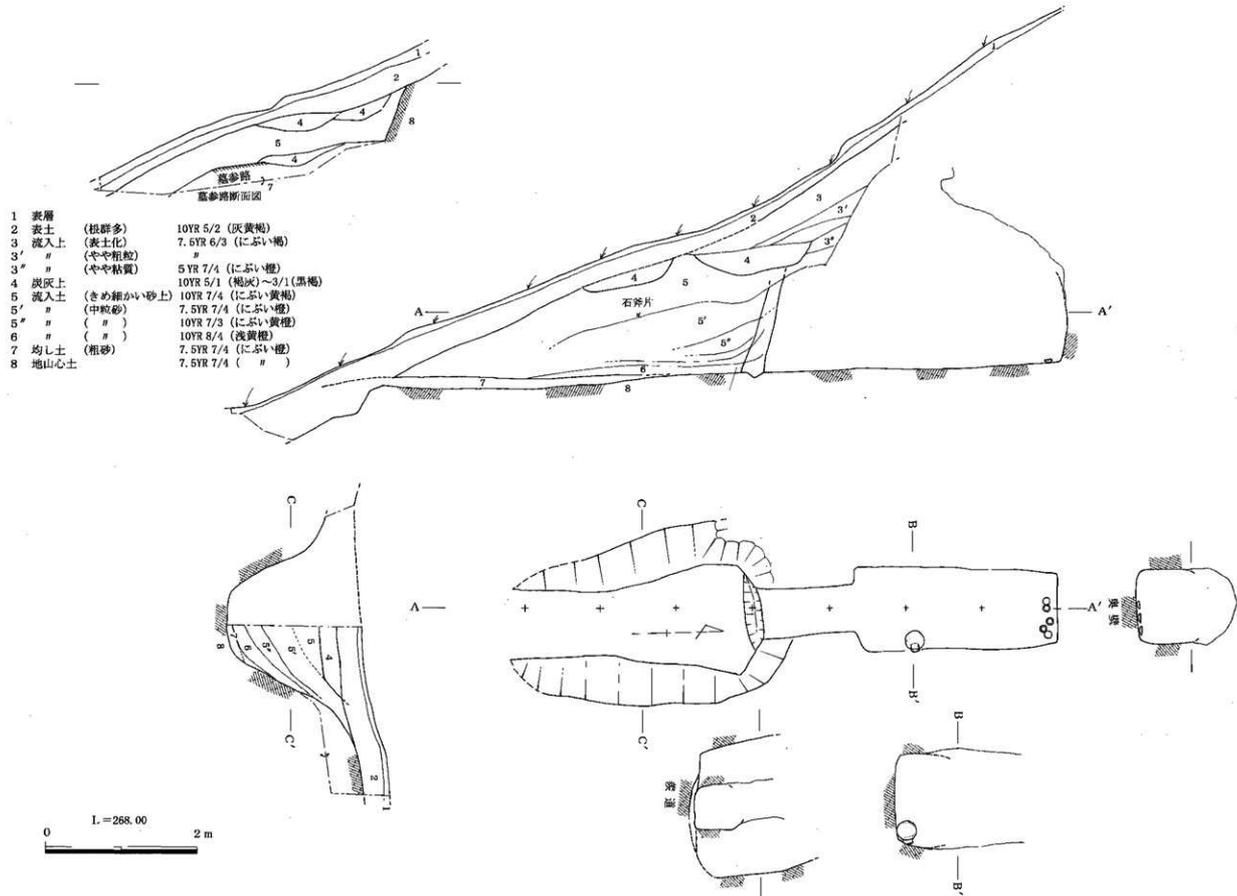


图10. 2号穴 実測图

- | | | |
|---|-----------|-----------------------|
| 1 | 表層 | 10YR 4/2 (赭灰) |
| 2 | 表土 | 10YR 6/3 (灰黃褐) |
| 3 | 炭灰土 (小炭塊) | 7.5YR 4/2~3/1 (灰褐~黑褐) |
| 4 | 流入土 (粗砂) | 7.5YR 6/6 (橙) |
| 5 | " (") | 7.5YR 7/6 (橙) |
| 6 | " (") | 5YR 6/3 (紅~紅黃) |
| 7 | 地山心土 | 10YR 8/3 (淺黃橙) |

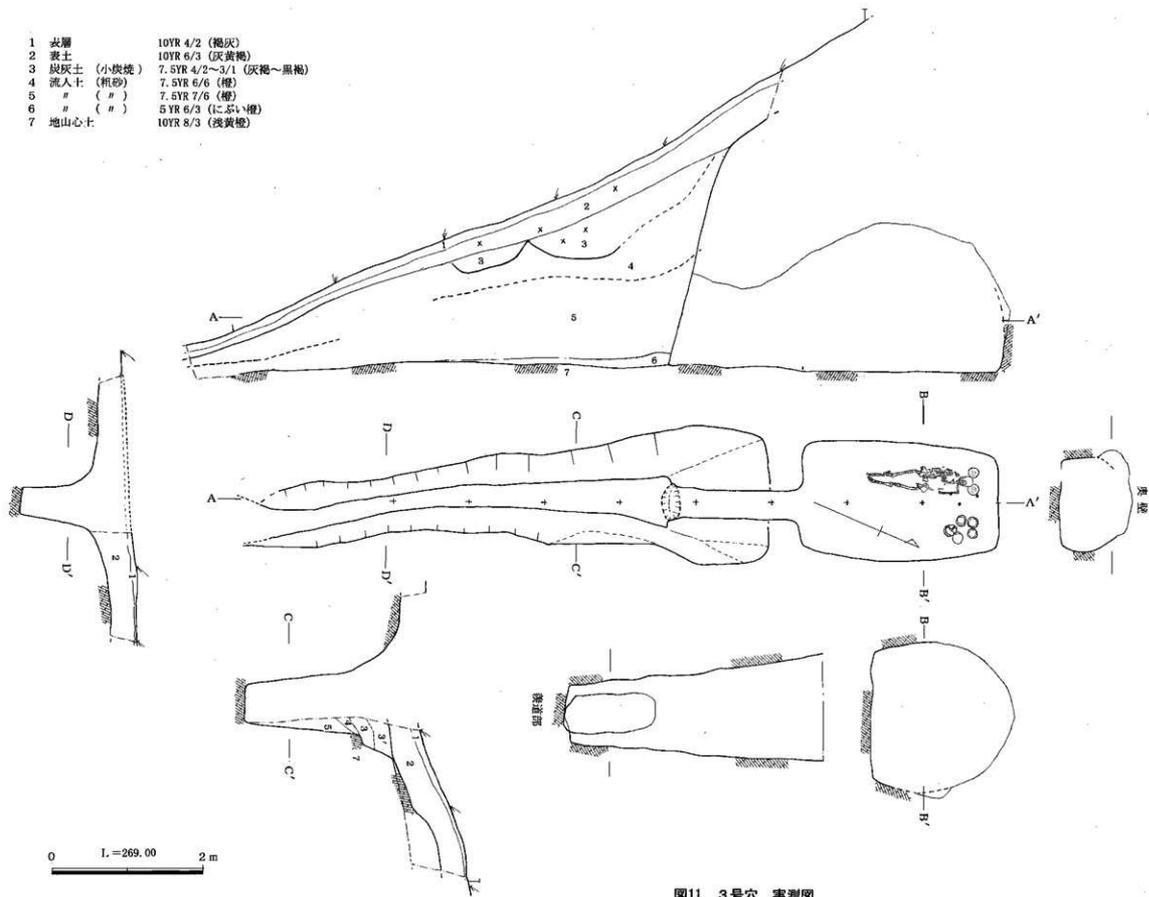


图11. 3号穴 实测图

前庭

現況では奥幅0.7m・前端幅0.5m・最狭部では0.24m・奥行き5.6mを測る。当該横穴墓群で最も狭長なものである。平面形態は奥端部で僅かに広く徐々に狭くなるが、また前端部でやや開く。床面は奥端と前端でやや低い。前述の横穴墓と比較すると明らかに幅が狭く、一人一人が通るのがやっとで前庭と言うより窄ろ墓道と言うべきであろう。

前庭部遺物出土状況

須恵器甕片2点、土師器坏片1点がいずれも流れ込みによる堆積土中から検出された。

羨道部

奥幅0.4m・前幅0.45m・奥行き1.6mを測る。羨道部も当該横穴墓群の横穴墓と比較すると狭長である。天井部は一部崩落している。推定復元高は0.9mくらいだろうか。閉塞部床面に深さ4cmほどの抉りが認められる。

玄室

現況では幅が奥壁側で1.25m・袖側で1.36m・最も張る胴部で1.60m、奥行き約2.6mを測る。当該横穴墓群の中では最も広い玄室である。天井部は剥落が著しい。平面形態は隅丸長方形胴張りのプランで、高さは比較的残りの良い奥壁から推定すると約1.6mであろう。床面は水平を意識して造られている。玄室は断面三角テント形妻入り両袖様式である。

埋葬状況

玄室内には1体の埋葬人骨があった。骨の残存状況はやや不良である。玄室内出土遺物は、須恵器14点・勾玉1点・耳環2点・ガラス小玉3点を検出した。被葬者は左隅奥に須恵蓋坏（No.37・38）（No.39・40）を転用枕として側壁に沿って仰臥伸展位で置かれていた。これらの須恵器は床面に1cmほどの敷砂をした上から検出した。勾玉は頭骨を取り上げた下から検出。被葬者左肩部周辺からはガラス小玉3点を検出。耳環は向かって右転用枕付近から1点、左肩部から30cm離れた玄室中央部から1点を検出している。勾玉はほぼ元位置と考えられるが、ガラス小玉・耳環は天井部崩落か何かの影響で移動したものであろうか。奥壁右隅には供献の蓋坏5組が置かれていた。いずれの組も上向きに重ねた状態であったが、正常に坏身が下で蓋を重ねたのが（No.41・42）（No.49・50）の2組、他の3組は蓋が下で坏身の上に重ねた（No.39・40）（No.43・44）（No.45・46）状態で検出した。これらの供献土器は床面に2～3cm敷砂を行った上に据えられていた。

6）4号横穴墓

3号横穴墓の東側5.5mのところの位置し、S23°20'E方向に開口する。床面の標高は約270.0mである。

前庭

現況では奥幅0.6m・前端幅0.8m・奥行き3.8mを測る。平面形態は奥端で僅かに広がるが、前端部までほとんど変化はない。床面は奥端から前端へ緩やかに傾斜する。

- 1 表層・表土:
- 2 流入土 (表土化) 7.5YR 6/4 (にぶい橙)
- 2' " (炭灰含) 7.5YR 5/1 (暗灰)~3/1 (黒)
- 3 炭灰上: 7.5YR 2/1 (黒)~7.5YR 5/1 (相灰)
- 4 流入土 10YR 7/4 (にぶい黄橙)
- 5 " (粗砂) 7.5YR 8/3 (浅黄橙)
- 6 " (") 5YR 7/4 (にぶい橙)
- 7 " (")
- 7.5YR 7/4 (にぶい橙)
- 8 " (粘質土)
- 7.5YR 7/3 (にぶい橙)
- 9 均し土 (粗砂) 7.5YR 8/3 (浅黄橙)
- 10 地山心土: 7.5YR 8/3 (浅黄橙)

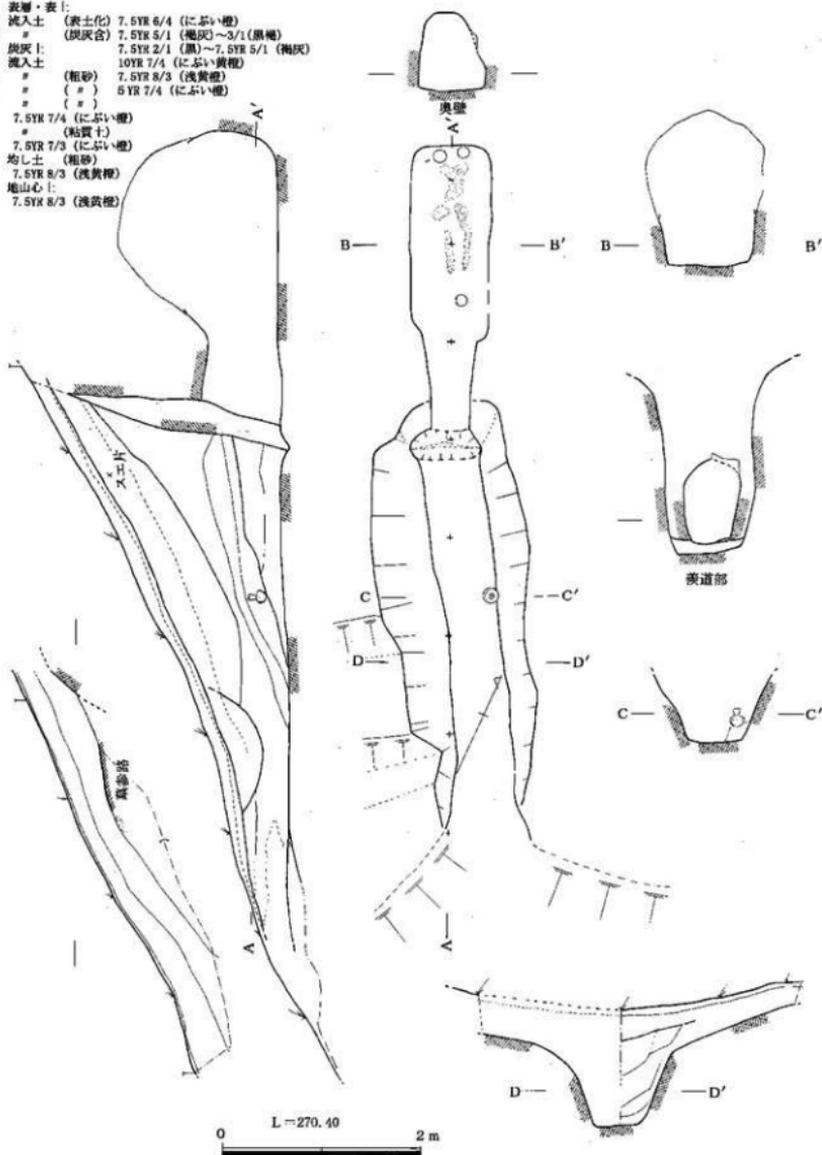


图12. 4号穴 实测图

前庭部遺物出土状況

須恵器2点・土師器1点・中世陶器1点を検出。須恵長頸壺は閉塞挟り部から前方約1.5mの前庭右壁沿いで、床面から18cm浮いた状態で据えられていた。須恵大甕片・赤焼須恵坏片・中世陶器片はいずれも流れ込みによる堆積土中からの検出であった。

羨道部

奥幅0.5m・前幅0.4m・奥行き0.9mを測る。入口から奥へ僅かに広がるプランで、天井部は一部剥落しているが、高さは約0.7mである。羨道前端的床面には深さ9cmほどの挟りが認められる。

玄室

規模は幅が奥壁側で0.8m・袖側で0.8m・奥行き約2.0mを測る。天井部は完全に剥落している。推定高は1m弱だろう。平面プランは長方形である。袖は左袖は僅かにアクセントを有する程度である。床面は奥壁から前方へ緩やかに傾斜する。玄室の形態は断面三角テント形妻入り両袖様式である。

玄室内遺物出土状況

玄室内からは須恵器を3点、鉄器を1点検出している。床面には2～3cmの敷砂をおこなっている。須恵坏身(61)(62)は転用枕として伏せた状態で検出。これらは元位置のままであろう。刀子(63)は奥壁左隅から検出、須恵坏蓋は被葬者の足元より前方25cmあたりに上向き状態で出土した。埋葬者は頭を奥にして伸展位で置かれていたものと考えられる。被葬者は陰影状にすすかに認められる。頭部付近の砂を篩にかけて歯牙17ヶを検出した。

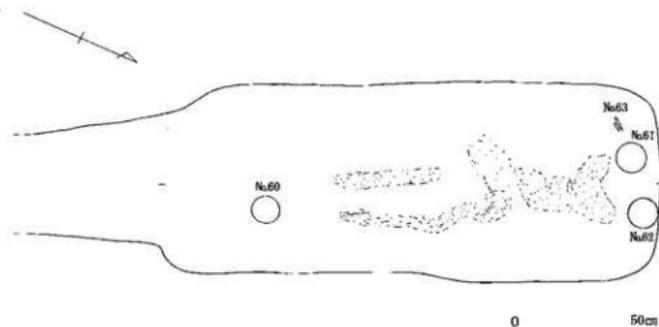


図13. 4号穴 玄室内の状況

7) 5号横穴墓

2号横穴墓の西側約6mのところを位置し、S 1°20' W方向に開口する。床面の標高は269.55 mである。

前庭部

奥幅0.55m・前幅0.30m・奥行き1.34mを測る。奥側が広く凹凸はあるが、前方が狭くなる平面プランである。庭面は奥端が最も低く、前端から60cm余りがほぼフラットな最も高い面となつ

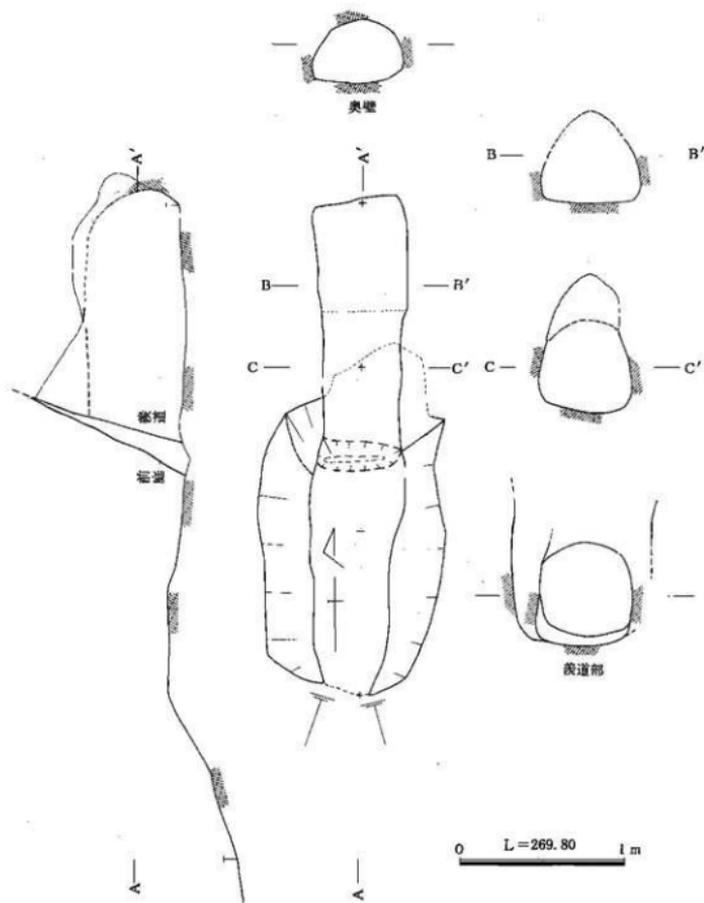


図14. 5号穴 実測図

ている。

羨道部

奥幅0.48m・前幅0.46m・奥行き約0.8mを測り、平面的にはほとんど幅に変化のないものである。天井部は崩落のため高さは不明である。羨道前端の床面には深さ5cmほどの抉りが認められる。

玄室

奥壁側で0.54m・手前側で0.52m・奥行き約0.7mを測る。平面形態は、羨道から玄室にかけてほとんど変化のないずんどうな印象をうける造りである。天井部はほとんど剥落しているが、一部残った壁面から考えると推定高は0.6mほどであろう。床面は奥端から前端にかけて緩やかに傾斜する。羨道部と玄室の境界は非常に不明瞭であった。

5. 出土遺物

1) 後背墳丘の土器

大壺片 (図15・16)

すべて破片で墳頂・前庭あわせて17片出土した。図示した(1)～(3)は肩部から胴部でいずれも胎土は密で、器壁は(1)(2)が薄手、(3)は厚手である。調整は内外面ともタタキである。

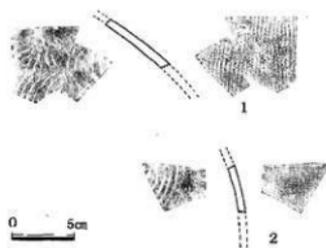


図15. 墳丘出土遺物

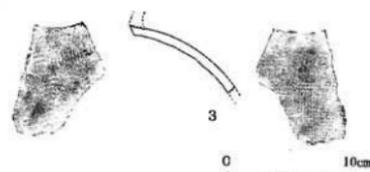


図16. 1号穴丘上出土遺物

2) 1号穴前庭出土遺物

須恵器 (図17-4～13)

蓋は口径11.2～14.8cm・器径13.6～16.8cmでいずれも内面のかえりを有するものである。

(7)(8)は、そのかえりが非常に短いタイプである。

(9)は高坏の坏部で器壁は薄く口縁部はやや膨らみをもたせておさめる。

高台付坏(10)は、口縁付近で器をやや屈曲させたちあがる。底径は7.6cmで高台はハの字状に付く。

(11) 平瓶の肩部には把手が形骸化した6mm程の突起を貼り付ける。

(12) (13) とも大甕片で内外面ともタタキ調整で外面は自然釉を被る。

以上(4)～(11)の須恵器は大谷編年5期(陶邑編年TK116～TK48)に併行する時期が考えられる。

川原石(図17-14～17)

(14)～(17)は川原石である。(14)は材質はやや軟質な砂岩で重さ83.55g、淡黄色(2.5Y8/3)である。(15)は材質は同じく砂岩で重さ76.45g、淡黄色(2.5Y8/3)である。

(16)は材質安山岩で重さ118g、灰白色(7.5YR8/2)である。(17)は石英質の岩質で重さは69g、浅黄橙色(10YR8/3)である。いずれの石も加工や打痕は認められない。用途はわからないがまとめて出土したことから何らかの呪具かとも思われる。

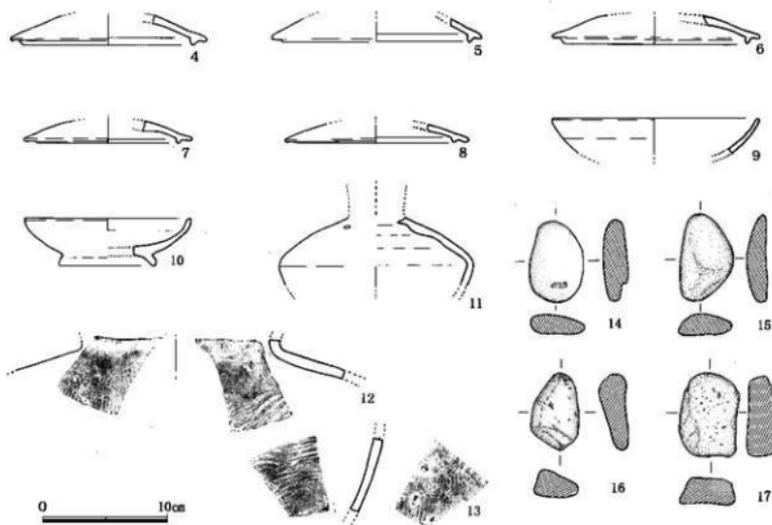


図17. 1号穴前庭流入土中出土遺物

3) 1-1号穴出土遺物

須恵器(図18-18～23・25・26)

蓋(18)は天井部に輪状つまみが付き、器壁は天井部で厚い。内面のかえりは内傾している。

(19)～(21)は高台付坏である。いずれも後付け高台である。(20)は器壁は薄く体部にやや膨らみをもたせ、高い高台を有する。(19)は器壁は厚く、体部は膨らみをもたせる。

高台は短く八の字状に開く。(18)と(19)はセット関係であろう。(21)の器壁は底部で最

も厚く9.5mm、体部は外傾しながら直線的に延びる。器の屈曲するところに高台が付く。

(22) は椀で口径10.1cm・器高13.7cm・胴径9.3cm・頸径3.3cmを測る。注IIの孔径は1.2×1.1cm、調整は内面は回転ナデで外面は口縁部から胴部までが回転ナデ、胴部から底部にかけてヘラケズリを施し、その後ナデている。底面には ㊄ のヘラ記号が刻まれている。口縁端は当初から一部欠損した器である。

(23) は台付長頸壺である。口径7.7cm・底径8.2cm・器高21.0cm・胴径14.4cmで、頸部から口縁部にかけて外傾していくが歪んでいる。口縁やや下方に浅い沈線2条を巡らせる。

大壺 (25) は口径18.8cm・胴径43.3cm・器高51.2cmを測る。器形は底部付近で凹入する部分があり肩部で最も張り、頸部短く、口縁は強く外反し、外折りにおさめる。調整は内外面ともタタキで、頸～口縁部はナデている。容量は40.9ℓであった。

壺 (26) は口径18.4cm・器高31.0cmを測る。器形は底部が凹入し胴部がやや上方で張る。

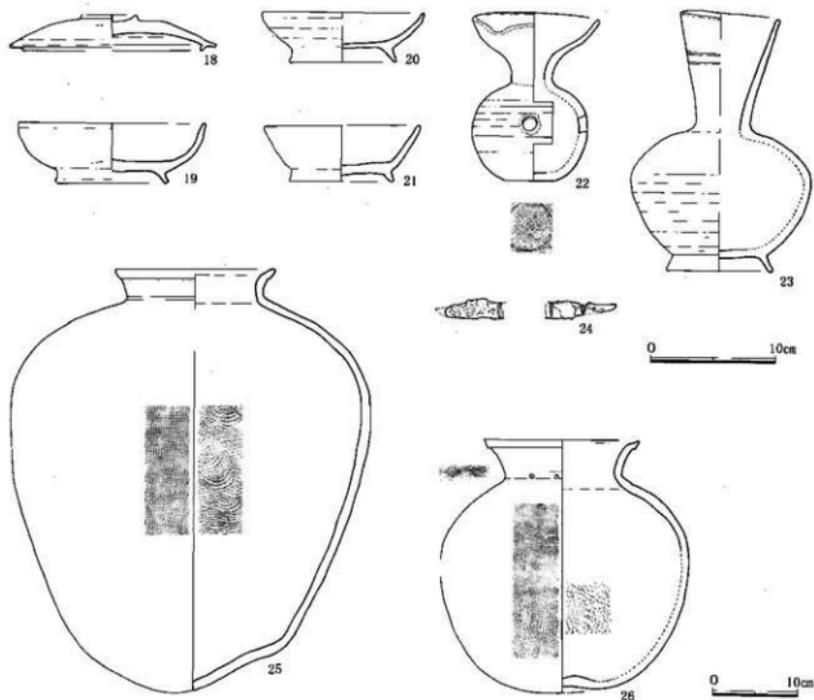


図18. 1-1号穴 出土遺物

口縁部はやや短く外傾して立ち上がり口縁はアクセントをもって上に尖る。頸部には直径4mmの円形竹管文が2ヶ所スタンプされている。調整は内外面ともタタキ、外面はのちカキメである。

以上の(18)～(26)は大谷5期、陶邑TK116～TK48併行期である。

刀子(図18-24)

玄室中央部から出土したものであるが落盤の際に移動したのではないかと思われる。中ほどが欠損し全長は不明である。平造りの平棟で棟の厚さは不明である。区は明瞭でなく刃幅は約1.3cm、茎の長さ3.4cmほどであろう。

4) 1-2号穴出土遺物

1-2号人骨

被葬者は1人である。保存状態は概ね良く、頭を入口に向け仰臥伸展位で埋葬されていた。供献土器・装身具等は何らもなかった。埋葬人骨については井上昇孝先生に鑑定を依頼し、別項のように報告された。(付編参照)

それによると、1-2号人骨は熟年(50代)男性・身長157～160cmであり、特に頭骨の頭頂面と右大腿骨内側上顆後面と右脛骨上端外側後面と右腓骨関節面に切創があり治癒することなく死亡し、右下肢部の創部は「添え木」(材質は杉)で固定されたものと指摘された。他には、右下肢骨全体に異常配列がみられるが、それは遺体の結合組織が弛緩した頃「添え木」に誘引され右下肢骨全体が反転し、大腿骨・脛骨・腓骨の後面が上面に位置していたことから、後日再び開口侵入して人為的に左下肢が右下肢上に移動された形跡があると指摘された。

5) 2号穴前庭出土遺物

石器(図19-27)

石斧の磨製刃部の破片があったのみである。材質は角閃ひん岩であろうか。色は明オリーブ灰色(5GY7/1)～オリーブ灰色(5GY5/1)を呈している。横穴墓以前のもので丘上からの転落流入である。

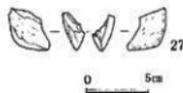


図19. 2号前庭トレンチ出土遺物

6) 2号穴出土遺物

須恵器(図20-28～33)

蓋(28)(29)は口径10.2cm・器高4.0cmほどで、器壁はいずれも天井部が最も厚く器端部でやや外反しておさめる。天井部まで回転ナデである。坏身(30)～(32)は口径8.8～9.8cm、器高はいずれの土器も3.6cmを測る。立ち上がりはいずれも薄く、短く内傾する。底面までナデている。以上の5点には外面中央に3.5mmの円形竹管文が認められた。これらは奥

壁中央から右隅に坏・蓋とも上向きにしていた。

直口壺 (33) は玄室を80cm入った右壁沿いから検出。器壁は底部と肩部で最も厚く1.4cmで、器形はほぼ胴中央が張り、頸部からほぼ垂直に50cm立ち上がり、口唇は薄く丸くおさめる。内外面ともタタキ調整で外面はのちカキメ調整である。

以上 (28) ~ (33) は大谷4期 (陶邑TK209) 併行期と考えられる。

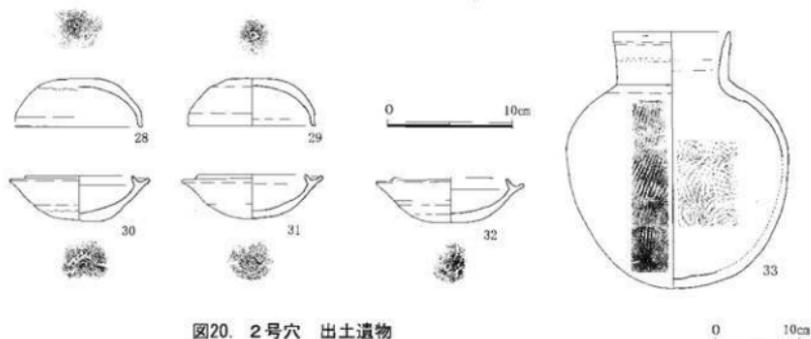


図20. 2号穴 出土遺物

7) 3号穴前庭出土遺物

須恵器 (図21-34・35・36)

(34) は壺の口径で口径20.4cmを測る。口縁部は外傾して立ち上がり折り返しておさめる。

(35) は大破片で器壁の厚さ、内外面のタタキ目文から前述の後背墳丘採取のそれ (図1-1・2) と同一個体と考えられる。墳丘上で破砕されたものか。

高坏 (36) は墳丘の破片と前庭流入土中の破片が接合したもので、器形は外面はゆるやかな曲線を呈し立ち上がる。口縁端脚部については不明である。いわゆる「酸化焰焼成の須恵器」の一群である。

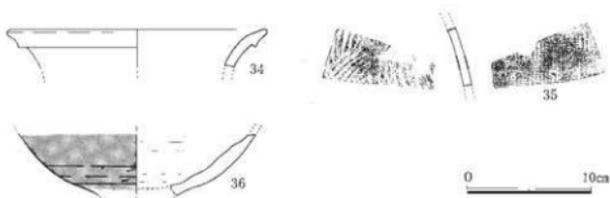


図21. 3号穴前庭流入土中出土遺物

8) 3号穴出土遺物

3号人骨

被葬者は1人のみである。保存状態は概ね良く、頭を奥壁に須恵蓋坏2セットを枕にして仰臥伸展位で埋葬されていた。この人骨の鑑定によると熟年(40代～50代前半)女性、身長140～143cmである。

須恵器(図22-37～50)

盖坏は転用枕2セット(37)～(40)と供献5セット(41)～(50)である。

盖について見ると、口径12.8～13.7cm・器高4.0～4.7cmを測り、いずれも天井部1/3～1/2はヘラケズリで口縁端内面の段は明瞭なもの(37・45・47)とやや不明瞭なもの(39・41・43・49)がある。天井部との界線はいずれの蓋にも認められる。坏身は器径13.2～14.2cm・器高3.8～4.4cmを測り、いずれも底部1/4～1/2をケズリ、立ち上がり部はやや内傾しながら薄くやや高い。

以上(37)～(50)の須恵器は大谷3期(陶邑MT84～MT230-II)に併行する6世紀後半の所産と考えられる。

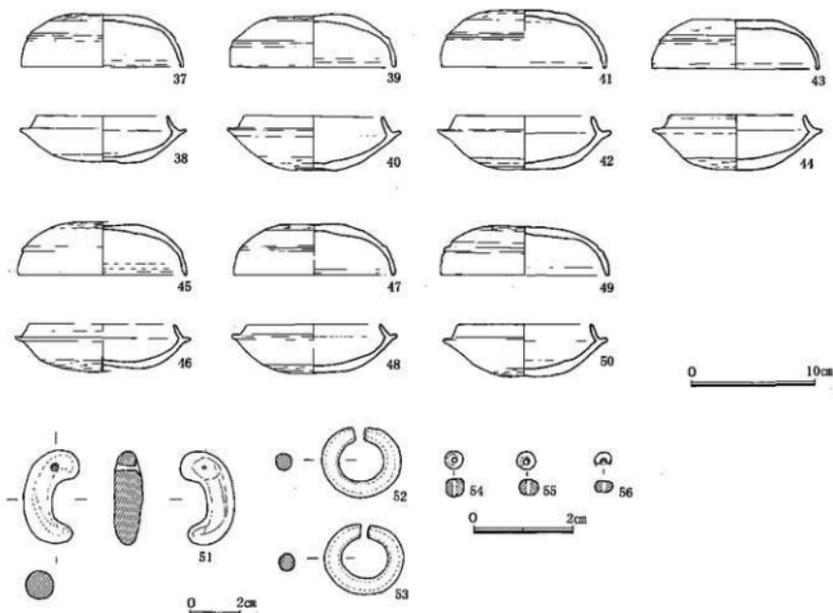


図22. 3号穴 出土遺物

五 類

勾玉1が頭蓋骨の下から、耳環(53)は人骨向かって右の枕用須恵器の上方から、(52)は頭蓋骨右35cmから、ガラス小玉3は頭蓋骨右付近から検出した。

①勾玉(図22-51)

(51)はメノウ製勾玉で、長さ3.8cm・厚さ1.0cm・重さ10.25gでやや大きめのものである。穿孔径は入口3.0mm・出口1.8mmで受け孔の深さは1.0mmである。研磨が粗略な為か表面には部分的に気泡状の小さなくぼみが認められる。

②耳環(図22-52・53)

崩落などで二次的な移動により原位置の検出でないため、左右は確定できない。直径7mm断面正円形の銅製の環で、表面全面が鍍化している。一部金が見られることから鍍金された品であったのだろう。内径1.8cm・外径3.2cm・隙間は2.5~4.0mmである。

③ガラス小玉(図22-54~56)

玉は3顆検出した。(54)は直径0.36mm・孔径0.75mm・重さ0.06gを測る。クロムグリーン(1.5G3.5/6)に発色していることから、鉄・マンガンを含むのであろうか。(55)は直径0.37mm・孔径1.00mm・重さ0.06gを測り、群青色(7.5PB3.5/11)で銅の発色かと思われる。(56)は破片である。推定直径0.35mm・孔径0.98mmほどであろう。ピーコックブルー(10BG 4/8.5)に発色しているのは銅を含むためであろうか。ガラス小玉は3点とも引き技法による製作である。

9) 4号穴前庭出土遺物

須恵器(図23-57・59)

長頸壺(57)は閉塞部から1.5mの墓道右壁沿い、床面から18cm浮いて掘えられていた。器形は脰上方で張る。胎土の砂の動きからろくろの回転方向は反時計回りである。肩部2か所に直径3mm・深さ0.5~0.8mmの円形竹管文が施されている。これは大谷4期(陶邑TK217併行期)と考えられる。



図23. 4号穴前庭トレンチ出土遺物

(59)は大甕の肩部片である。外面は自然釉を被りくすんだオリーブ色を呈す。内外面ともタタキ目調整である。

陶器 (図23-58)

中世陶器である。胎土はにぶい橙色で釉の被る部分はくすんだオリーブ色である。底部は糸切りで、削り出し高台状に浅い高台裏をつくる。口径に対し底径は非常に小さい。器壁は厚手で、口縁は厚く角のとれた面をつくる。

10) 4号穴出土遺物

4号人歯牙

玄室内ほぼ中央にぼんやりと暗色をなして細根が密集する面があり、被葬者の位置を示している。人骨は全く検出できなかった。頭部付近の砂を篩にかけ、歯牙17ヶを検出した。鑑定の結果は、検出歯牙はすべて永久歯で10代前半の男性であると推定された。

須恵器 (図24-60~62)

蓋 (60) は玄室40cm入ってのやや右よりで口縁部を上にした状態で検出した。器壁は天井部で最も厚く9mm、口縁部で3mmを測る。体部はゆるやかな曲線を描き口縁は丸くおさめる。坏身 (61) (62) は奥壁下、中央に伏せた状態で出土した。被葬者の枕として用いられている。(61) (62) ともに受け部はやや厚めで、立ち上がりは短く強く内傾し尖り気味におさめる。いずれも調整は内外とも回転ナデで、底部はへら起こしでケズリはみられない。(60) ~ (62) は大谷3~4期 (陶邑MT5-III~TK209併行期) と考えられる。

刀子 (図24-63)

残存長14.5cm、平造りで身幅1.1cm・棟の厚さ2.5mmで刃部の長さ7.4cmを測る。柄部には木質が残っているため、茎の様子はわからない。柄断面は1.4×1.2cmやや長円形で、木質剥落部分もある。刃部には細い砂粒や錆が固着している。刃先で僅かに凹入する部分があるが、研ぎ減りした部位であろう。

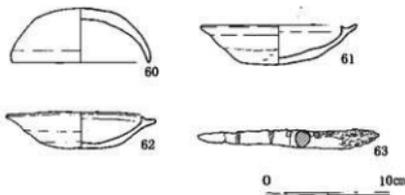


図24. 4号穴 出土遺物

表2 土器観察表

No	出土地点	器種	完部分	法		測		胎土	色	其他
				断面	断面	内	外			
1	墳頂部	須・大甕	胴片	タタキ	タタキ	タタキ	タタキ	灰	516/1 (灰)	器壁厚手 No.1と同一製作、器壁薄手
2	"	"	肩片	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	"	513/1 (オリーブ黒)	器壁厚手
3	"	"	底片	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	"	1016/1 (黒灰)	
4	1号前庭	須・甕	冠	15.8	16.8	16.5	16.5	2mm径以下の長石等を含む	2.514/1 (黒)	
5	"	"	冠	16.8	16.5	13.6	14.8	"	514/1 (黒)	
6	"	"	冠	16.5	13.6	14.8	14.8	"	516/1 (黒)	
7	"	"	冠	14.8	14.8	14.8	14.8	"	2.513/1 (黒)	
8	"	"	冠	16.3	16.3	3.9	3.9	1mm径以下の長石等を含む	N4/0 (黒)	
9	"	須・高坏	口縁片	13.0	13.0	3.9	3.9	"	516/1 (灰)	外部に自然釉あり
10	"	須・高坏	口縁片	13.0	13.0	3.9	3.9	"	516/1 (灰)	外部に自然釉あり
11	"	須・土甕	胴片	15.1	15.1	15.1	15.1	1mm径以下の砂粒を含む	517/1 (灰)	外部に自然釉あり
12	"	須・土甕	胴片	15.1	15.1	15.1	15.1	"	517/2 (灰)	輪つれみ
13	1号至盛	須・甕	冠	16.7	3.9	3.9	3.9	2mm径以下の砂粒を僅かに含む	517/1 (灰)	
14	"	須・高坏	冠	13.9	4.0	4.0	4.0	"	517/1 (灰)	
19	"	須・高坏	冠	13.0	4.0	4.0	4.0	"	517/0 (灰)	
21	"	須・高坏	冠	12.4	4.5	4.5	4.5	"	517/2 (灰)	底部へへら型引あり
22	"	須・高坏	冠	14.4	13.7	13.7	13.7	1mm径以下の長石等を含む	2.516/1 (黒灰)	
23	"	須・高坏	冠	14.4	21.0	21.0	21.0	"	516/1 (灰)	
25	"	須・大甕	冠	43.3	61.2	61.2	61.2	2mm径以下の長石等を含む	N5/0 (灰)	容量40.9ml
26	2号至盛	須・甕	冠	24.6	31.0	31.0	31.0	"	1016/1 (黒灰)	外部に竹管文あり
28	"	須・甕	冠	10.2	4.0	4.0	4.0	"	517/1 (灰)	外部に竹管文あり
29	"	須・高坏	冠	10.1	3.9	3.9	3.9	"	"	"
30	"	須・高坏	冠	11.4	3.5	3.5	3.5	"	"	"
31	"	須・高坏	冠	11.6	3.5	3.5	3.5	"	"	"
32	"	須・高坏	冠	12.0	3.5	3.5	3.5	"	"	"
33	"	須・甕	冠	26.5	31.5	31.5	31.5	"	"	"
34	3号前庭	須・高坏	胴片	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	"	517/2 (灰)	
35	"	須・高坏	胴片	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	"	517/0 (灰)	
36	"	須・高坏	胴片	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	"	515/1 (灰)	器壁やみ手
37	3号至盛	須・甕	冠	13.0	4.2	4.2	4.2	2mm径以下の長石・石英を含む	外-2.514/6 (茶色) 内-2.516/6 (黒)	酸化釉施成
38	"	須・甕	冠	13.4	3.5	3.5	3.5	"	N4/0 (灰)	
39	"	須・甕	冠	13.4	3.2	3.2	3.2	"	N4/0 (灰)	
40	"	須・甕	冠	13.1	4.1	4.1	4.1	"	7.516/0 (灰)	(37)(38)はセツト関係
41	"	須・甕	冠	13.1	4.1	4.1	4.1	"	N5/0 (灰)	(39)(40)はセツト関係
42	"	須・甕	冠	14.0	4.1	4.1	4.1	"	7.516/0 (灰)	(41)(42)はセツト関係
43	"	須・甕	冠	13.6	4.0	4.0	4.0	"	1016/1 (黒灰)	(43)(44)はセツト関係
44	"	須・甕	冠	13.8	4.4	4.4	4.4	"	N4/0 (灰)	(45)(46)はセツト関係
45	"	須・甕	冠	13.7	4.3	4.3	4.3	"	515/1 (青灰)	外部に自然釉あり
46	"	須・甕	冠	14.2	3.8	3.8	3.8	"	2.501/1 (オリーブ灰)	(47)(48)はセツト関係
47	"	須・甕	冠	12.8	4.1	4.1	4.1	"	N4/0 (灰)	(49)(50)はセツト関係
48	"	須・甕	冠	13.4	4.0	4.0	4.0	"	N5/0 (灰)	外部に自然釉あり
49	"	須・甕	冠	13.4	4.0	4.0	4.0	"	N4/0 (灰)	(47)(48)はセツト関係
50	"	須・甕	冠	13.2	4.1	4.1	4.1	"	N6/0 (灰)	(49)(50)はセツト関係
57	4号前庭	須・長甕	冠	14.1	16.7	16.7	16.7	"	N5/0 (灰)	若狭2ヶ所に竹管文あり
58	"	須・陶	冠	10.1	3.2	3.2	3.2	"	7.516/4 (黒)	内部に輪紋
59	"	須・大甕	肩部	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	"	515/1 (灰)	外部に自然釉あり
60	4号至盛	須・甕	冠	11.0	4.4	4.4	4.4	"	2.517/2 (灰)	
61	"	須・甕	冠	12.6	3.2	3.2	3.2	"	N5/0 (灰)	
62	"	須・甕	冠	12.1	2.9	2.9	2.9	"	1015/1 (灰)	
63	18号至盛	須・高坏	底片	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	"	1016/1 (黒)	

11) No.8 落ち込みトレ出土遺物 (図25-64)

遺構に伴わない遺物で弥生式土器の平底部である。底径7.2cmを測る。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整である。形状からして弥生末期までは下らない甕又は壺の部分であろう。

(野津)

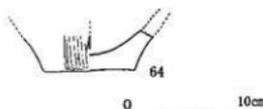


図25. No.8 落ち込み出土土器

参考文献

- 地学団体研究会編『自然を調べる地学シリーズ3 土と岩石』東海大学出版会、1982
中村 浩『考古学ライブラリー5 須恵器』ニュー・サイエンス社、昭和55年
大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11、1994
広井雄一『刀剣のみかた(技術と流派)』第一法規出版
島根県教育委員会『三田谷I遺跡』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX、2000
広瀬町教育委員会『足子谷横穴墓』中国第二中幹線鉄塔建設予定区域内遺跡発掘調査報告書、1997
島根県教育委員会「仁多・コフケ横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書 第XVII集』、1992

6. 若干の考察

§1 滲透水による地山水孔について

2号玄室の左右の奥端や羨道東壁やや高目の位置に奥行きは知れない直径60~30cmほどの曲がりくねった孔があり、半ばまで粒度の細かい砂が堆積していた。これは地山母材(風化花崗岩)の亀裂に始発した地表の雨水の滲透による浸蝕孔であった。上方の地形から推察すると、後背墳丘として整形した裏(北東)側の深い溝状(袖路に利用したところ)からしみ込んだものと思われる。既述のように、この溝状地形はほぼ尾根筋にそって尾根端まで断続的に連なるものかとみられて、母岩の大きな亀裂状の構造を想像したところである。

このように地下水孔によって2号穴内はことごとく洗い流され、羨道・玄門あたりは大きく崩壊していた。2号穴のほぼ直下にあたる1-1号穴も玄室から羨道へかけてほとんど全部の天井部がこの水流によって崩落してしまったものと判断した。そしてこの2つの玄室には残存骨などは全く見当たらず、供献土器のみが残ったのであろう。

§2 周溝内の焚火跡について

後背墳丘北側に掘った周溝内には既述のように2層の炭灰層が認められ、枝状の炭片を含んでいた。溝内の土層序は下底から順にみると、削りだした地山母材の肌と同じく特に大きい粗砂粒が主体の崩土で溝掘削後数日間に堆積したものとみられ厚さ約10cmである。この上に厚さ15cmほどの炭灰で真黒い砂土が断面U字形に入っていて、約1mの範囲はこれに枝状の炭片が多く混

ていた。これが第一次の焚火跡であり、葬送に関わる儀礼の一つとみられる。この第一次焚火の上にはややくすんだ砂土が厚さ10cmほど積もっていて、その上に厚さ20cmほどの炭灰土が幅広く断面U字形にある。この土中にはやや太目の枝などの炭片が混っていた。これが第二次の焚火跡である。ここまで堆積すると周溝の半ばまで埋まってしまったことになり、墳丘の削り出しからはかなりの時間が経過していると思われる。さらにその上方はやや粒子の細かい砂土が流入堆積して、ほぼ墳丘頂部と同高に達して現況となっている。

ここで、第二次焚火の炭片を供試して¹⁴C年代測定を依頼した。その結果報告は付編に収録したが、測定年代値は1378±41BPで較暦正年代ではAD643～670年とされた。この供試材は第二次焚火跡であることから、第一次焚火（初造営時か）はさらに年を遡ることになる。

§ 3 各号穴の相互関係

特に注目すべきは隣り合う各2号穴はその主軸方位が1°00'以内の誤差で全く同じに造られていて、3号と4号、2号と5号、1-1号と1-2号がそれぞれ明らかに規格性のあるセット関係にあり単位となっている。さらに各単位毎に玄室規模（特に長さ）が大と小の組合せて成っていて、主軸となるのは2.5m又はそれ以上の長さであり、従となるのは2.0m以下である。なお、2号穴と対をなす5号は著しく破損しているが格別小さく所謂小横穴であり、腹遣いでなければ入ることが出来ない程度のものである。この5号穴は玄室内外ともに何らの遺物もなく、埋葬墓であったのか疑わしい。

このような小横穴の事例は近くの地域には希であるが、横田町小池古墳群2-1号穴³¹では土器枕があったことから小児埋葬を想定している。また、米子市陰田横穴群A群³²では「作りかけ」とするものや小横穴が群をなすものもあり、20基を確認している。またこの他にも安来・松江地方に散見される。立地についても単独や前庭を共有するもののほか前庭壁面や玄室内壁などにつくるなどがあるが、多くの場合遺物等の検出はなく、調査者の解釈も供献物埋納・再改葬、火葬骨、小児埋葬など多様であるとのこと、陰田横穴群では、一応これらをふまえて小児用のものと想定している。

§ 4 前庭と墓参路について

前庭（墓道）についてみると、造営の始まりは3号であり次いで4号である。この2穴は同一主軸の第Ⅰ単位横穴で、前庭部は狭長で前庭というより墓道の意識で造られている。次段階の第Ⅱ単位（2号・5号）では小横穴の5号を例外とすれば前庭の幅がやや広く、長さはやや短くなり羨道閉塞に必要な程度を確保している。これが終段階の第Ⅲ単位（1-1号・1-2号）では極く幅広く短い前庭を共有し2穴が並んで造られている。

このように、所謂前庭部は狭長な墓道に始まり漸次幅が広がって³³ ついには共有する幅広い庭へと推移していることが明瞭である。また一段下方に位置する第Ⅲ単位を除いてみると、並列気

表3 瀬ヶ迫横穴墓群主要項目集

石穴	主軸方位 (磁針方位)	玄室サイズ (m)	羨道長 (m)	前庭幅・長 (m)	土器年代(編年) 陶色 山本 大谷	暦年代	人骨の性別・頭位	副葬品
1-1	S 8° 40' E	0.96 ~(1.30) × 2.45 1.16	1.3	1.1 × 2.6	TK 116 48 IV(中) V	7C中~後	? 入口側?	スエ 刀子 8 (1)
1-2	S 8° 00' E	0.73 ~ × 1.63	1.1	1.2 × 2.6	(1-1のあとか)		♂ 入口側	
2	S 2° 00' W	0.88 ~ × 2.66 1.12	1.2	1.4 ~ × 3.4 0.8	TK 209 IV占 IV	7C前	? 奥側?	
3	S 24° 00' E	1.25 ~(1.60) × 2.60 1.36	1.6	0.7 ~ × 5.6 0.24	MT 84・85 III新 III	6C後	♀ 奥側	スエ 耳環 勾玉 小玉 14 2 1 3
4	S 23° 20' E	0.8 × 2.0	0.9	0.6 ~ × 3.8 0.8 0.55 ~ × 1.34 0.3	MT 5-III Ⅲ末 Ⅲ~IV 陶器供養品 IV (不明・2のあと)	7C初 7C前~中	少年 ♂ 奥側	スエ 刀子 2 1
5	S 1° 20' W	0.54 ~ × 0.7 0.52	0.8				? 不明	なし

TK 217 赤桂高坪 Ⅳ~Ⅴ 周溝第2次焚火¹⁴C AD613~670年

単位	主軸方位	石穴	玄室長 (m)	前庭幅×長 (m)	被葬者	頭位	人数	土器枕	蓋坏	供 献	是そう	装身	前庭	土器年代 (大谷)	暦年代
I	S 24° 00' E	3号	2.60(張)	0.7 ~0.24 × 5.6	♀	奥	1	○ 2セット	5セット	はそう	刀子	勾玉1 小玉3		Ⅲ	6C後
	S 23° 20' E	4号	2.00	0.8 ~0.6 × 3.8	未成年 ♂	奥	1	○ 2 1 ○坏1 フタ1	フタ1 1 坏2			1	長頸壺1	Ⅲ~Ⅳ Ⅳ・Ⅴ	7C初 (7C中)
II	S 2° 00' W	2号	2.66	1.4 ~0.8 × 3.4	?	(奥)	(1)			1				Ⅳ	7C前
	S 1° 20' W	5号	0.7	0.55 ~0.3 × 1.34			(?非)								?
III	S 8° 40' E	1-1号	2.45(張)	1.1 × 2.6	?	(入口)	(1)		台坏4	2 台付1	1	(1)		Ⅴ	7C中~ (後)
	S 8° 00' E	1-2号	1.63	1.2 × 2.6	共 ♂若 ♂若	入口	1							?	?

味に並ぶ各横穴の前庭を相互に連絡する墓参路（仮称）が表土直下に部分的に遺存していた。これは各前庭の前端で、横穴造営の際の掘削土を掻き出し埋め立てた地面上のレベルに認められたものであり、これまであまり知られていない遺構として成果といえよう。

§ 5 埋葬方法と被葬者について

埋葬を確認したのは3号・4号・1-2号各1名で、このうち4号は骨格は消失してくすんだ陰影様に認められ、床土から歯牙を検出したものである。

また2号では土器配列のうち転用枕とみられるものから1体を推察した。これらの特に頭位についてみると、第I単位ではいずれも奥壁側を頭位とし、3号は熟年女性、4号は未成年男子である。第II単位では2号のみで装身具等もなく性別などは不明であるが頭位は奥壁側と推察した。低位置の第III単位においては1-2号は成人男子で入口側を頭位としており、1-1号穴では明確ではないが供献杯等から勘案すると入口側を頭位にして葬られたとみることができる。

このようにみると、当該横穴墓群では単位毎に頭位を統一したとみることができる。なお、近隣の事例⁴では複数葬の場合男女によって頭位を逆にすることが多く、必ずしも画一的ではないが男性が奥壁側を頭位とする場合が多い。しかし奥側を女性とする地域（古代二処郷を中心とする）もある。

埋葬はすべて仰臥伸展位である。依頼して鑑定検討していただいたが、特に1-2号穴の被葬者は熟年男性で下肢骨の割割と頭頂面の創痕が指摘された傷害者であり、これが死因とされた。そして脛部には手当した副木（添え木）も一部遺存した。しかし、脛部が表裏反転し、大腿骨は交叉しているなど、後日再び人為的に動かしたものと指摘もなされた。後日再び横穴内に人が入るのは改葬などの場合に限られるかと思っていたが、そのほかにも祭祀的な行為の場合もあったのかもしれない。類似例としては玉湯町岩屋古墳群5号墳⁵の1号石棺内2号人骨（最終次葬）の上半身が人為的に表裏逆転した可能性が高いと指摘された事例があるのみである。

また、この被葬者の頭頂と右大腿下端から脛骨腓骨上端へかけて斜め後背部からの切創痕は具体的にどのような事態であったのか想像も難しい。

これらの諸点についてはさらに事例をまわって検討する事項である。

7. むすび

この遺構は集落を南東方向に見る尾根の南東斜面上方に造営された6穴からなる横穴墓群である。立地する風化花崗岩が劣化して遺構や埋葬人骨の残存が必ずしも良好ではなかった。

尾根上に後背マウンドを造り、横穴墓はその規模が主と従的な2穴を単位とする第I～第III単位が二段に並ぶ。そして各単位毎に2穴の主軸方位が全く同一であり、プランの画一性が窺われる。最初に営まれた3号穴（第I単位）は後背マウンドに直入するプランで群中最も規模が大きく前庭（墓道）は最も狭長で占相とみえる。これに対し最終段階は幅広い前庭を共有する第III単

位の1-1号・1-2号穴で横穴墓造営の終末期にあたる。判明する各号穴とも単葬で追葬はなく、副葬された須恵器は出雲編年(大谷)Ⅲ期(3号穴)から同Ⅴ期(1-1号穴)の期間である。但し、この6穴のうち5号穴(第Ⅱ単位)は所謂小横穴で全面にわたって損壊して遺物等も全くなく、閉塞の抉り込みが床面にはあるが遺体が埋葬されていたのかは確認出来なかった。造墓したものの埋葬は行われなかったか、或いは幼小児の埋葬で副葬品は全くなかったのかのいずれかであると思われる。

被葬者は第Ⅰ・第Ⅱ単位では頭位を奥にし、第Ⅲ単位では頭位を入口にしていて、何らかの意図を想わせる。特に1-2号穴(第Ⅲ単位)の被葬者は頭部の創痕や右下肢の切創が指摘され、また脛部には副木(添え木)が当てられて手厚く手当をしたことが判った。この副木の事例は近隣において初例であろう。この人骨は下肢部に後日の人為的反転が指摘されたが、玄室内で追祭祀が行われたか否かはわからなかった。

後背墳丘上では、年代は特定出来なかったが須恵大甕の破砕が行われたようで流下土中から破片が多く検出された。また、酸化焰焼成によるとみられる須恵系高坏もあった。1-1号・1-2号共有の前庭には律令期に入ることの須恵坏の破片も多く、4号穴前庭には玄室内より後出する長頸甕が供献されていた。墳丘周溝内では二次にわたる焚火跡があり、後次の炭片試料による¹⁴C年代は643~670ADとされた。これらの状況から、総じて前庭や墳丘上でのちのちまで祭祀が行われていたことが判る。

このほか、先例は希れであるが各横穴の前庭を連絡する路(仮に墓参路と呼んだ)が表土下に踏圧路として断片的ながら確認出来た。

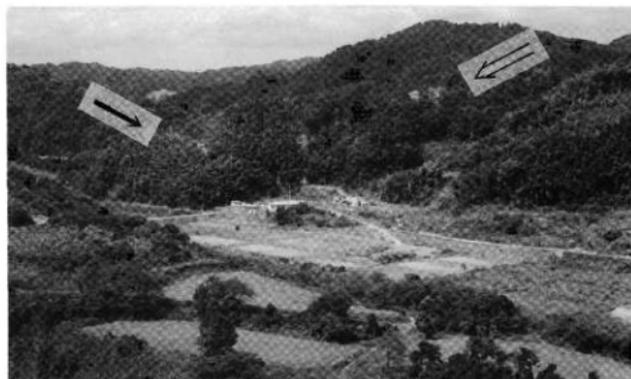
以上のように古墳時代後期後半から終末期に至る間の連続する横穴墓造営を検証し、諸点と課題を指摘することができた。(杉原)

註

- ※1 吾郷和宏：「小池古墳群発掘調査概報」横田町教育委員会 1991.2(稿本)
 ※2 東森市良氏の指示による。陰田横穴群に関しては報告書『陰田』1984によるとして詳細に示された。
 ※3 前庭部は元來墓道として始まり、やがて墓前儀礼の展開に従って拡張されて前庭へと発展したものと理解される。例えば(安来道路予定地内『洪山古墳群』島根県教育委員会1998)の場合などに明瞭にみとれる。
 ※4 男女の判別された複数葬の場合、性別による頭位を見ると次のようで、男性が頭位を奥にするのが通例である。しかしこのうち女性を奥にする例は仁多町亀嶺と広瀬町西比田に所在する。

町内	遺跡名	被葬者数	頭位		配設	文献等
			入口	奥		
横 仁 多	こぶけ横穴	男1女1	男1	女1	互位平行	報告書1992
	上分中山横穴墓群1号穴	男3	男3	—	平行	
	川子原横穴	男1女1	男1	女1	互位平行	
穴 横 田	宮ノ輪横穴	女2	女2	—	平行	報告書1994
	(龍ノ谷横穴 (小池・小池奥横穴墓群))14穴に多数あり	石棺内不明3一集骨 ?	不明2 ?	不明1 ?	重ね合せ 平行あり	
墓 二刀塚	東下谷6号穴	大人男2女2乳児1	女2	男2	五位重ね合せ2墓	報告書1984
	広 瀬	足子谷横穴	男3女1小児4	男3	女1	互位平行

- ※5 井上晃孝先生の指示によって所在を知り、調査者の林健亮氏の厚意により所見・資料を拝見した。これによると横穴墓ではなく1号石棺内で3次にわたる埋葬が行われていて、その最終被葬者である30才代の男性について埋葬後に再び覆いで上半身のみを反転したものとみられる。としている。



⇒印
殿ヶ迫横穴墓群

→印
西尾社遺跡

遠景



後背マウンド
調査前



現地説明会

遠景・他



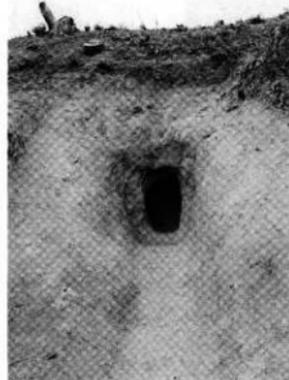
2～4号穴



後背マウンド



3号穴

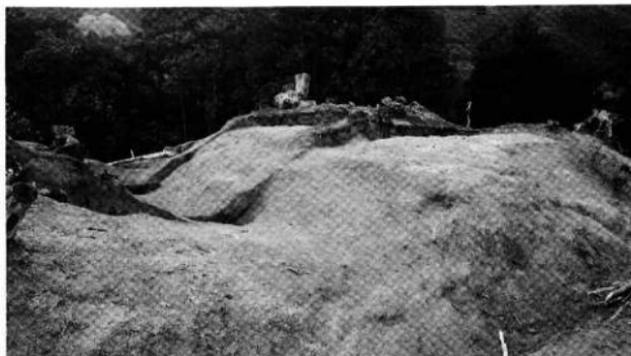


4号穴



5号穴

完掘状況



後背マウンド



周溝 焼土面
(炭散布面)



周溝部推積断面
(炭灰部分)

周溝と炭散布状況

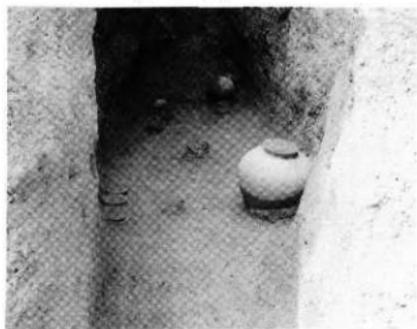
PL4



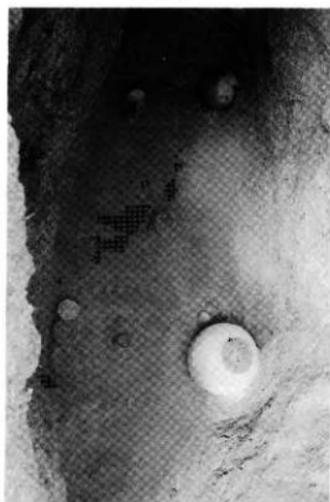
開 11 前



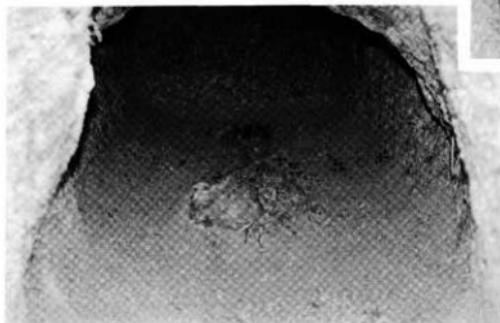
羨道部開口



1-1号 玄室内



供献土器

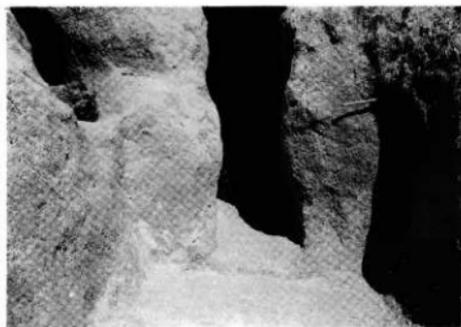


1-2号穴 玄室内



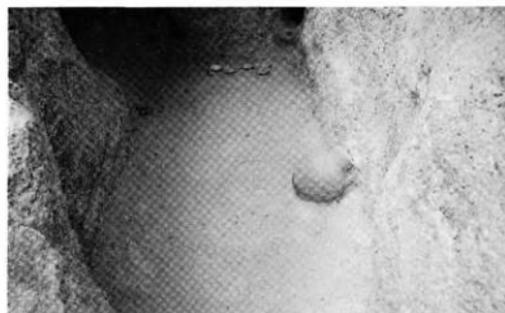
経骨と副木

1-1号穴・1-2号穴



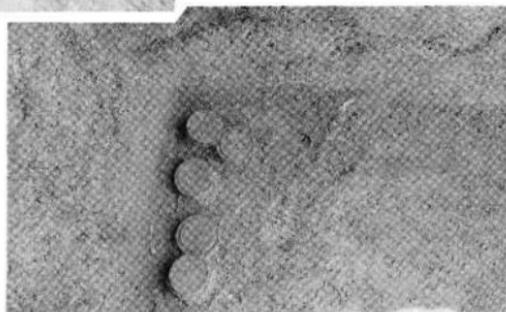
羨道部

玄室内より玄門部



玄室内の状況

奥側供献

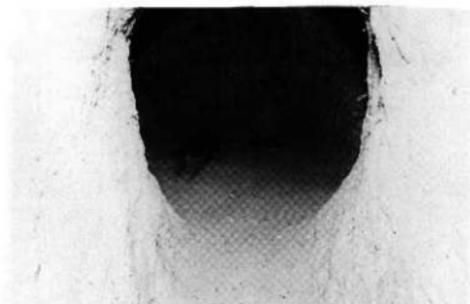


2号穴

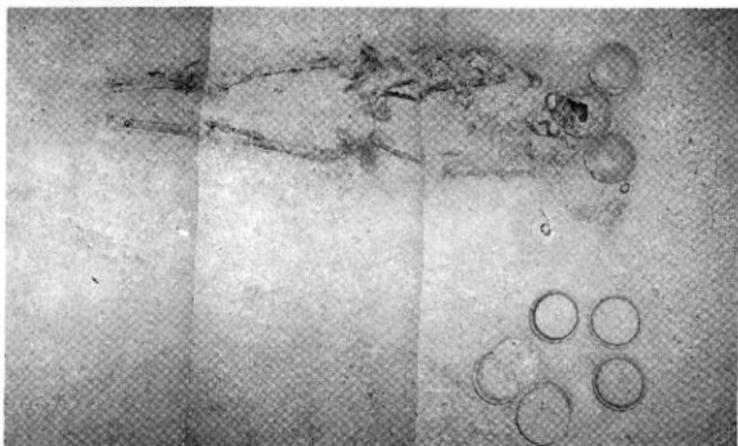
PL6



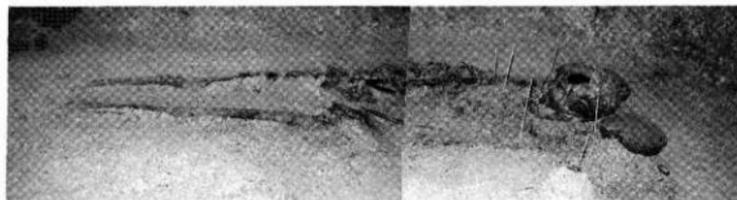
前庭部と推積土層



羨道より玄室



玄室内

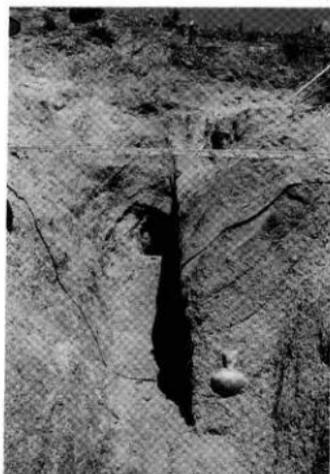


埋葬状況

3号穴



4号穴開口前と前庭供献土器



前庭横断と供献土器



4号穴玄室内



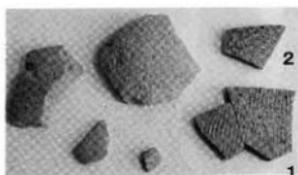
前庭縦断



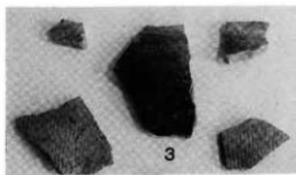
5号穴玄室内

4号穴・5号穴

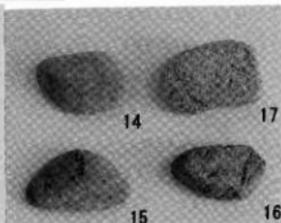
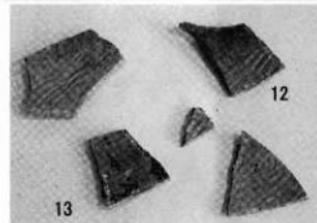
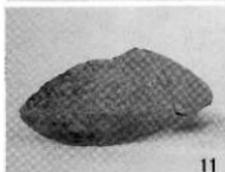
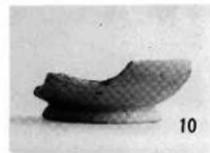
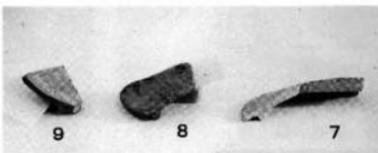
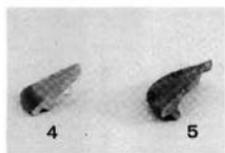
PL8



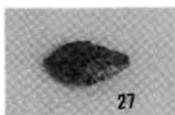
後背墳丘



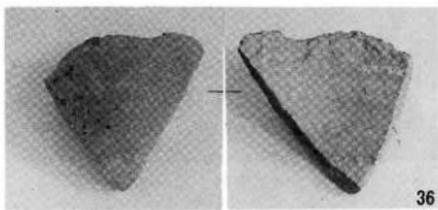
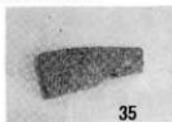
1号穴丘上



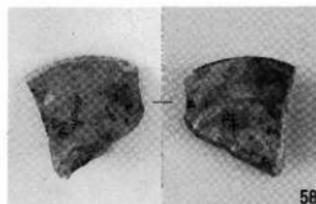
1号穴前庭流入土中



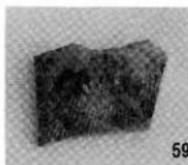
2号穴前庭流入土中



3号穴前庭流入土中

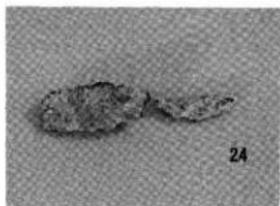
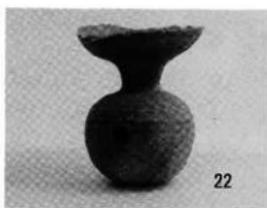
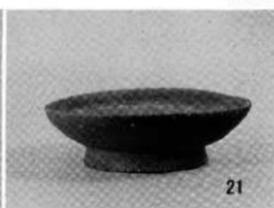
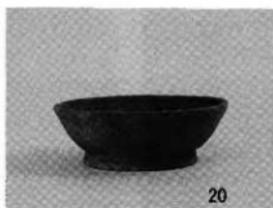
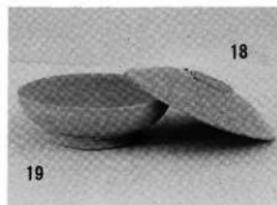


4号穴前庭流入土中

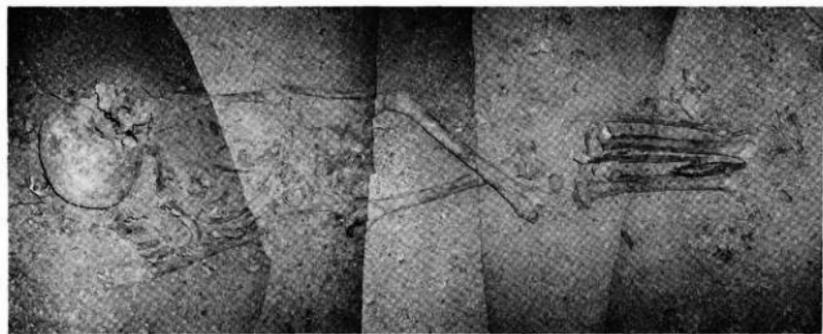


落込みNo. 8出土

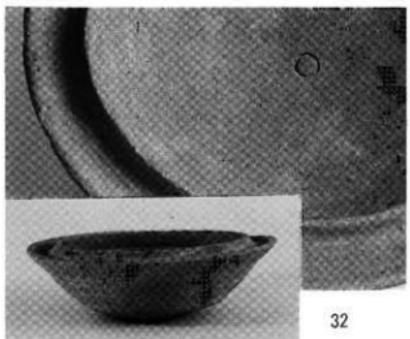
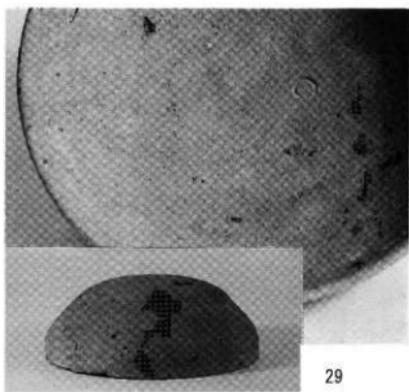
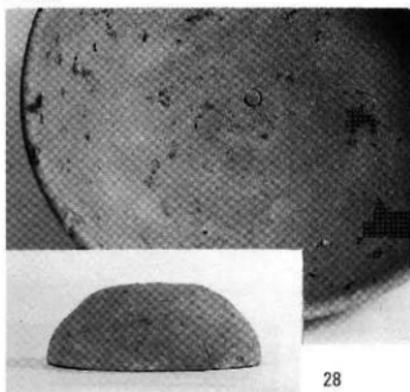
墳丘・前庭・他 出土遺物



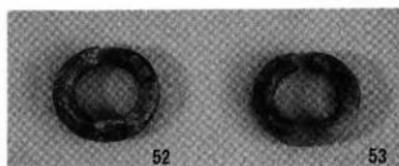
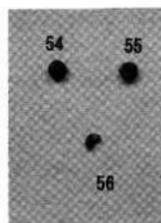
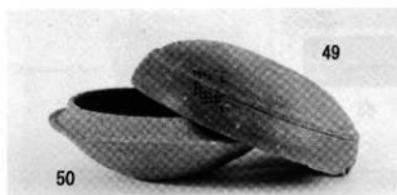
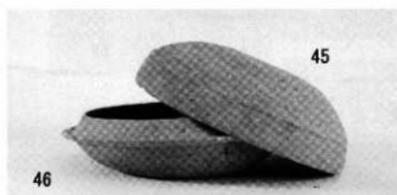
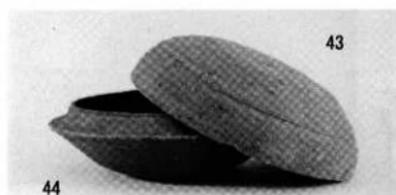
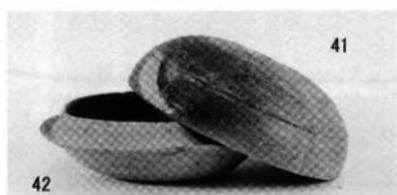
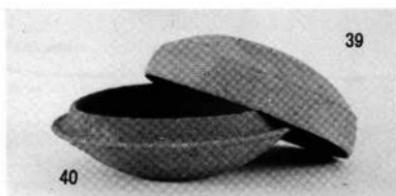
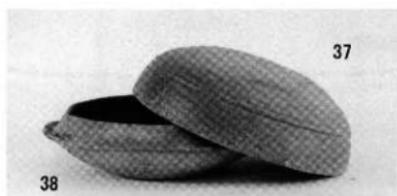
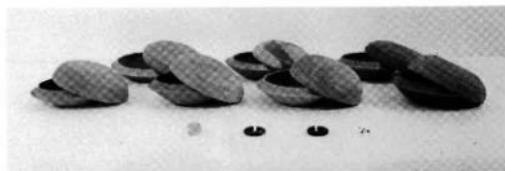
1-1号穴 出土遺物



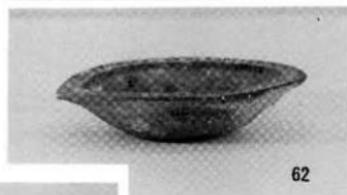
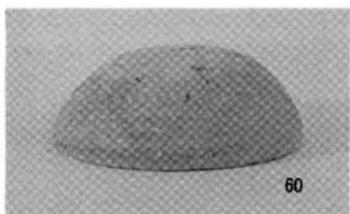
1-2号穴 埋葬状況



2号穴 出土遺物



3号穴 出土遺物



63



4号穴 出土遺物

西尾社遺跡

所在地	仁多町大字佐11287・1285・1284・964
調査面積	1030㎡（内 発掘331㎡）
調査指導	池淵俊一（島根県教育庁文化財課） 山根正明（島根県立松江南高等学校教諭） 蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員） 西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）
調査期間	平成12年9月28日～12月8日

1. はじめに

尾原ダム建設関連で計画された前布施地区作業道敷設予定地内の該地において、事前の指摘は27地点「散布地（鉄滓）」となっていた所で、平成11年度の分布調査においては遺物は何らも発

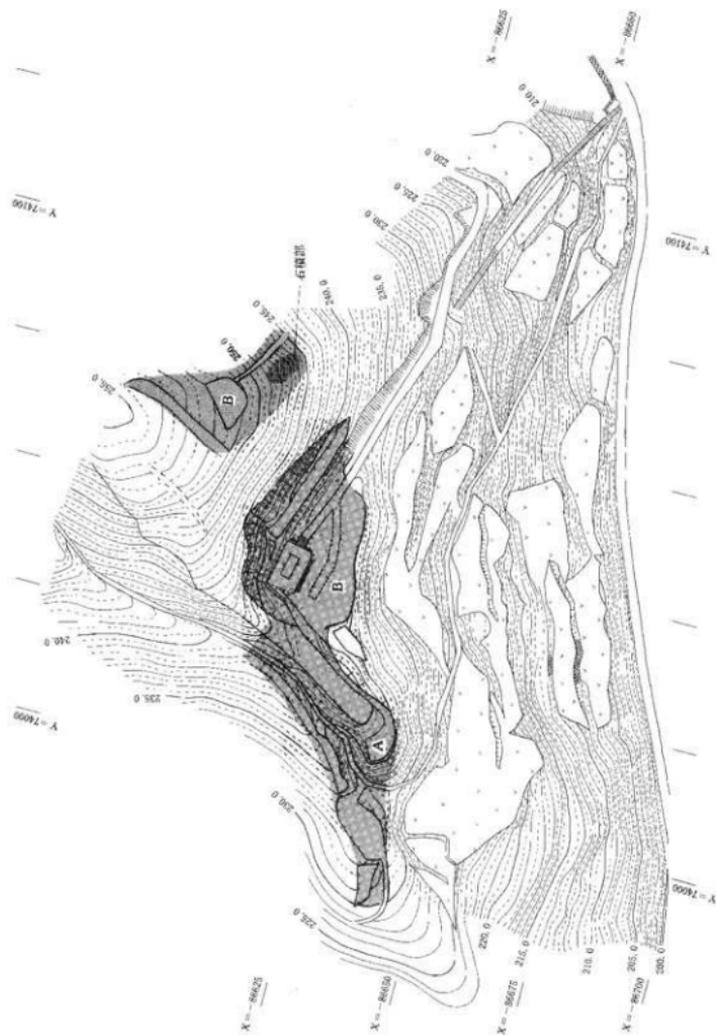


図1. 地形実測図

見えなかったが、この27地点には中世城郭の一端を思わせる構造（27-A地点）や、北へ上る尾根中程にある数カ所の落ち込みから横穴墓が予想され（27-B地点）、トレンチにより確認した。そして本年度、本発掘調査を行ったのである。遺跡名称は27-A地点を「西尾社遺跡」とし、27-B地点を「殿ヶ迫横穴墓群」とした。

西尾社遺跡は斐伊川に大きく張り出す丘陵の先端南側に位置し、この丘陵端には前布施地区の氏神である西尾社が祀られていたところがあり、また斐伊川河岸から上布施へ通ずる旧路の入口部にもあっているようだ。西尾社遺跡は中世城郭の虎口部と、神社後背の尾根上わずかに東へ下った地点に集石遺構と平坦面がある複合遺跡であった。

この両地点で、地形を勘案し約1030㎡を対象として地形測量を行いトレンチを設定し、土層序と内容を検討した。そして、範囲を限定して前者で150㎡、後者で60㎡を全面発掘した。

2. 地形と環境

前布施地区は藩制下においては一つの村であり、斐伊川本流が大きく屈折して西に流れて再び屈曲するあたりの川添いの北側で狭い地域である。集落の中心は川添い一段高くその中ほどにあり、隣接する高地の上布施地区との堺にあたる山陵には中世の「水ノ手城」跡がある。

この城跡から南西に延びる高い尾根が斐伊川の屈折点に達して、小字地名「西ノ尾」はこの位置関係を示すものであろう。字西ノ尾の先端部に西尾神社が祠られており、その後背部尾根沿いに水ノ手城跡或いは上布施集落へ連絡する掘割り路がつくられている。そして、その入口にあたる大掘切り口は中世城郭関連の虎口構造とみられた。この水ノ手城は中世出雲の雄と呼ばれた三沢氏に由来する出城の一つで、斐伊川沿いに対する構えの拠点であった。南麓にあたる前布施地内に「殿ヶ迫」「堂木」などの地名が遺っている。

西尾神社は集落中心から西の方角にあたり、前布施地区の氏神として祀られていたがその起源は必ずしも明確ではなく、江戸時代の記録にはほぼ同じ位置に三鉢妙見、或いは妙見社と見えるが西尾社の名は見当たらない。なお、この西尾社のさらに西の突端部は小字地名「トウタエカケ」「灯台掛ヶ」等の地名があり、江戸期川船運輸に関するものとみられる。また麓部には〇〇垣内等、耕地の集まりを示すと思われる地名が細かく分かれて存在する。

3. 調査方法

前年度踏査に併せ竹林のまま伐採を行わず、広く13000㎡余りにわたって地形測量を行い、14面に及ぶ削平地形と大きく掘り込んだ掘割り路を記録した。そのうち、麓に近い大半の面は傾斜面で畑地として拓かれたところであり、これを除いて旧西尾社の境内域とその西側山腹に北東へ登ってゆく掘割り路を主眼とすることとした。

さらに北側丘陵上において10mほどの平坦部と長さ25mほどの帯状のフラット面、さらにその南東斜面に集石状の様相を認めたので、これを加えて調査することとした。



図2. トレンチ配置図

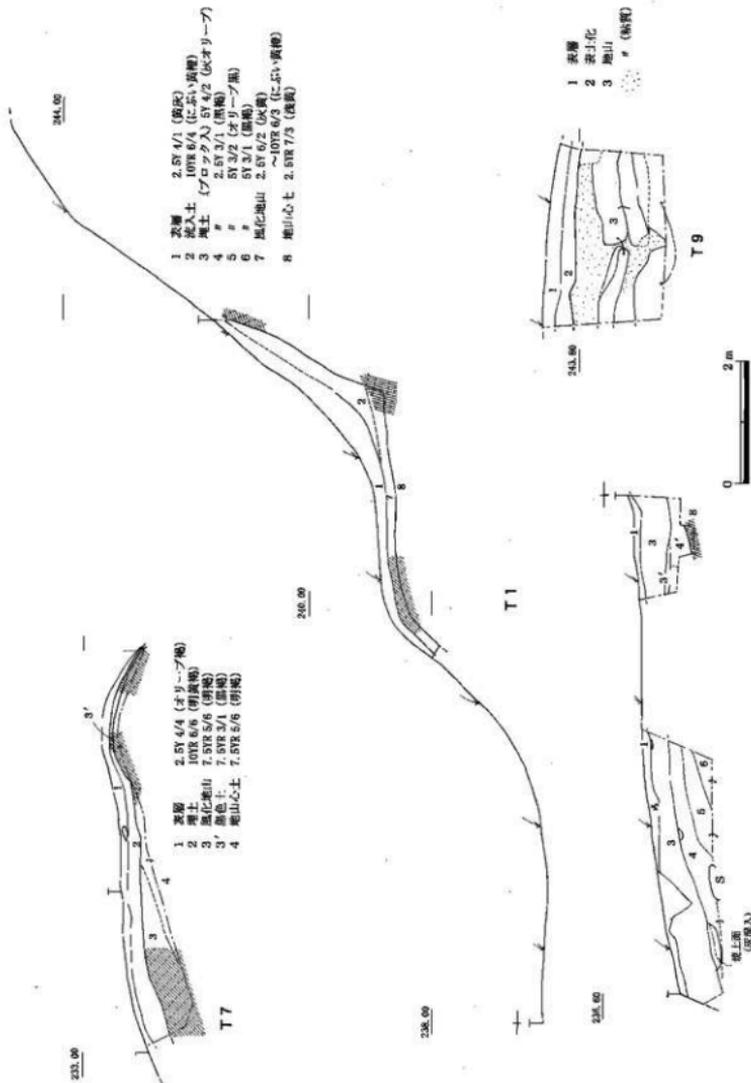


図3. 土層図

ここで仮に前者をA地点、後者をB地点と呼ぶことにする。

A虎口状構造部については横断トレンチで上塁状をなす掘り底路の工事を、そのうえで虎口部とみられる全面を発掘して構造と造作意図を知ろうとした。

B西尾社境内地付近については、社の基壇部を除いて境内地に5m間隔でトレンチを設けて境内地の成り立ちを検査し、A虎口状構造の両脇上面の小曲輪状構造との繋がりを検討した。

また、大きく削り下げて削平した西尾社地の北側、切り残された尾根上の小平坦面とそれに続く集石部分についても発掘を行った。

4. 遺構と遺物

A. 虎口状構造部分

1. 構造

字西ノ尾の尾根端は、かつて太古斐伊川によって削り取られたような大きな崖地形となっており、この斜面を西へ斜めに登る小路が尾根上に達するあたり強く屈曲して大きな掘切り底に至る。この大掘切りは上布施の方へと続くがその入口部が特に誇張され、登り土塁状に西側斜面上方を登るものである。

入口部に近いT1トレンチによってみると掘り底は平面でなくV字形に尖っていて荒い真砂土が厚さ60cm以上も積もっている。両側の削り出し斜面は40°を超す急勾配に造られている。もっとも、この路底を雨水が長年にわたって流れ下っていた為、底面はその流れによって路面が抉られ、結果として尖り底になったものとみられる。

両側上方は、特に向かって右（南東）側は約5×5mほどの削平面とした先端曲輪とみられる構造面である。また左（北西）側は川に面した急な山腹部であり、掘切り路との間には盛土は全くなく、荒い真砂土の心土が殆ど露呈していて、頂面をわずかに削って平坦部を造り大きな上塁状としている。

この結果をもとに奥行き約15mについて全面発掘を行ったところ、造られた路は入口から逆S字形に曲げてあり、行先方向を直視出来ない工夫とみられる。また入口すぐの約4m間は、当初底面は1mほどの幅であったようである。そして全発掘範囲の路長約15m間では路面の縦断勾配は平均13°でやや急な坂路である。

南東側の上には5×7mほどの削平面があり、北方へ小路となって続く。またその東先端部は一段下げた1×1mほどの小段を設けている。この小段のレベルは路をまたいだ北西側突端の小削平面と対応するように造られたものとみられ、また通路面との高差は約2.9mとなっている。

この2つの小削平面には柱穴等の何らも認められなかったが、これを足場に何らかの構築物があったとすると大きな門構えの虎口が想像され、斐伊川を挟んで対岸からは正面にあたることになる。

この虎口部構造から西へ一段低く延長する面は、ややフラットな緩斜面2段からやがて急に下

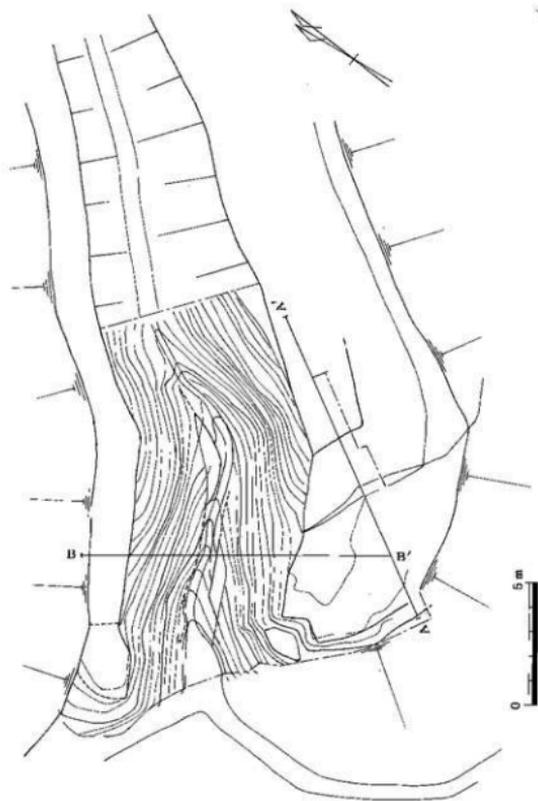
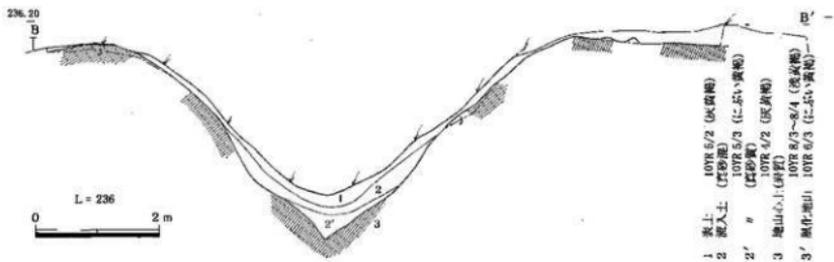


图 4. 旗上部分測図

降して麓の突出部に至る。このあたりを小字地名「トウダエカケ」等とされていることから、虎口部に続くフラットな面にグリッドG1～G3やトレンチを設けて検討した。土層は厚さ15～25cmの表土はすべて耕作土でその下は直ちに地山心土であった。この面の縁辺から麓に至る屈折した路があり、2段の面すべて近代において畑地となっていたところで、下段はクロボク土が厚かった。これらの地山面にも柱穴等は見当たらず、近世又はそれ以前の状況は消滅しているものと判断した。

2. 遺物の出土

路面中ほど近く、流入した荒真砂土中から明治期の一銭銅貨1枚を検出した。虎口部北西の切崖下で路面に接するあたりでは灯明皿2個体分の破片があり、そのうち1個体には油煤が強く付着していた。

また、虎口南東側上方の曲輪面はひととき畑地として耕されたものか、耕作土様の表土中で角孔の鉄銭（鋳銭）2枚が錆化して出土した。

B. 西尾社境内地とその付近について

調査は社殿基壇部分を除いて、地形に直交する5m間隔のトレンチによって境内地の成立を観ようとした。また北側は幅広く尾根から切り下ろしてあり、中間に幅の狭い2段の削平面が残っていてこの性格をも併せて考えた。

現況の境内は西が約18m・北が25mの略三角形で、その北西隅角部に6×9m・高さ約60cmで長方形の一部石垣とした基壇上に社殿がある。(図2・3)。現境内面から40～90cmほどの下層にあたるほぼ水平面に踏圧され焚火跡などのみられる面があり、その南側前端は現況より5～8mほど引いた位置にある。またこの面や前端付近の埋土からは木炭片の多い部分や、釘や陶磁片が検出された。また一段高い社殿基壇面は掘り残した真砂質地山であり、地山はここから急傾斜で下降する。これらの状況から埋没平面は現境内の前段階にあたる境内面と考えられる。約2m掘り下げたトレンチにおいてはさらに下層も埋土のみで地山には達し得なかった。

また、基壇の縁辺延長ラインから北の切り崖の上まで横断面はすべて真砂質地山の削り出しであり、崖切りした中間の現境内面より約2.2m高い面に、幅3.5m・長さ約30mの帯状をなす削り出し平面を残し、さらに切り下げて境内面を造成していることが判る。因みに現境内面までの切崖の高さは8m以上となっている。

これらの状況を勘案すると、本来基壇部相当の幅をもつ一段高い狭長な平面（曲輪）があったところを削り下げて社地としての整備を行ったものと推察された。そして、南へは一段低く路状に延びて前項に記した虎口部上面の小曲輪に連絡するものとみられる。これらの南東側は大きく崖となって麓に下る地形が推定される。そしてここに西尾社を造営したのは、すくなくとも中世の曲輪構造が不要となった近世に入ってからのことと思われる。



图5. 参道断面图

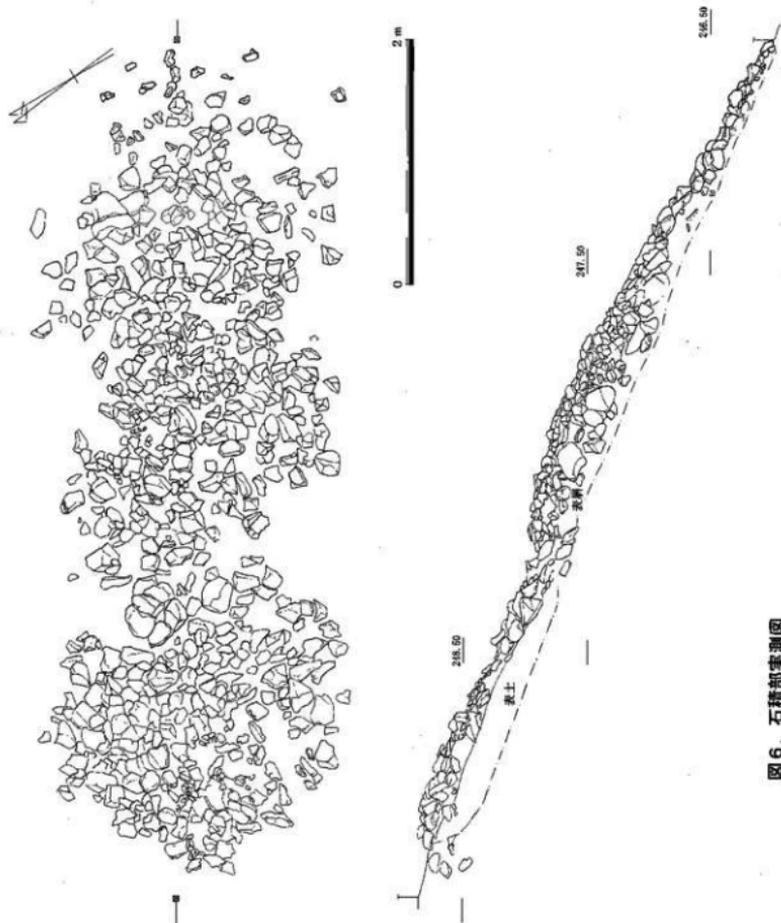


图6. 石積部実測図

西尾社北の崖上にあたる自然尾根端部に小平坦地と続く東斜面の石積みについてみる。小平坦地へと東の麓から登ってゆく直線の踏圧路が地表にわずかな凹みとして認められる。石礫積みは小平坦地から約5m下がったこの路沿いに幅1m・長さ約6mの間に2群積まれている。一見、石積塚様にもみられるが、石を取り除くと地山面ではなく表土上面の上に積まれたものであって基底面には掘込みや整地等は行われてなく、塚のような性格ではなかった。積み上げた石礫は拳大から人頭大までの付近に見られる山石で、縦に裁ち割り半分で1328個を数えた。全体でほぼ3000個に達する数となる。

登路の行きつくところの平坦面は、トレンチによってL字形に削り出した削平面とそこに置かれた石材を検出したので、これを手がかりに発掘面を拡張した。削平面はほぼ幅8m・奥行5mで先端は地山を最も大きいところで70cmほど切り下ろし、その下端には深さ3～5cmほどの小溝を添えて造り雨水の排水としていた。削平面のほぼ中央に一面が平坦な一辺30cmほどの山石が2個転がっていた。そのほとりに、地山面に深さ15cmほどの小ピットがあって、この石材が丁度嵌り込んだ。また石材2片を重ねたものとピットのみのがあって、これらを復元すると、一辺1.30mの正方形に配置されていたことになる。形状や配置から簡易な礎石と判断された。さらに麓からの踏圧路はほとんど直線であり、その延長線がこの礎石配置のほぼ正面中心に至ることも判った。そして、この礎石配置真後背にあたる削り下げ斜面に幅80cm・奥行35cmの小段を削り出し、そこでは数度に及ぶ焚火の跡があった。これらの遺構は山腹を北西36°直路を登りつめた削平面に4×4尺の祠をつくり、その後背で火を焚く祀りが行われていたものと判断した。この遺構面からは粉炭のほか土師坏片と、石礫積みの表面近くで石に挟まれて陶質胎土で内外及び高台裏まで施釉した18世紀ころの唐津系茶碗の破片が出土した。

このほか、削平面の続きの地面に長さ25m以上で西尾社側崖端で切られるまで帯状のフラットな地形があり、これについては横ストレンチで観察した。表土～表層土はクロボク土で1mほどもあるが下へ漸次暗色が薄くなり、地山は黄色系粘質土であった。この粘質土面に幅15cmほど開いてやや段差のある亀裂が走っていた。この亀裂にそって地表面が帯状フラット面となっていたのである。

この亀裂の性格をみるため、さらに西尾社北側崖の上端面で亀裂の到達する部分の断面を観察した。ここでは深さ約0.5mの暗色表土の下は風化した粘質土の下に固い粘質母材土、細粒に風化したやや砂質土、そして風化花崗岩の真砂母岩と重なっており、亀裂の延長到達部はそのいずれの土層も破砕断絶し破片化していた。これは貫入状の異質岩によるのか、物理的亀裂であるのかは判断し兼ねた。

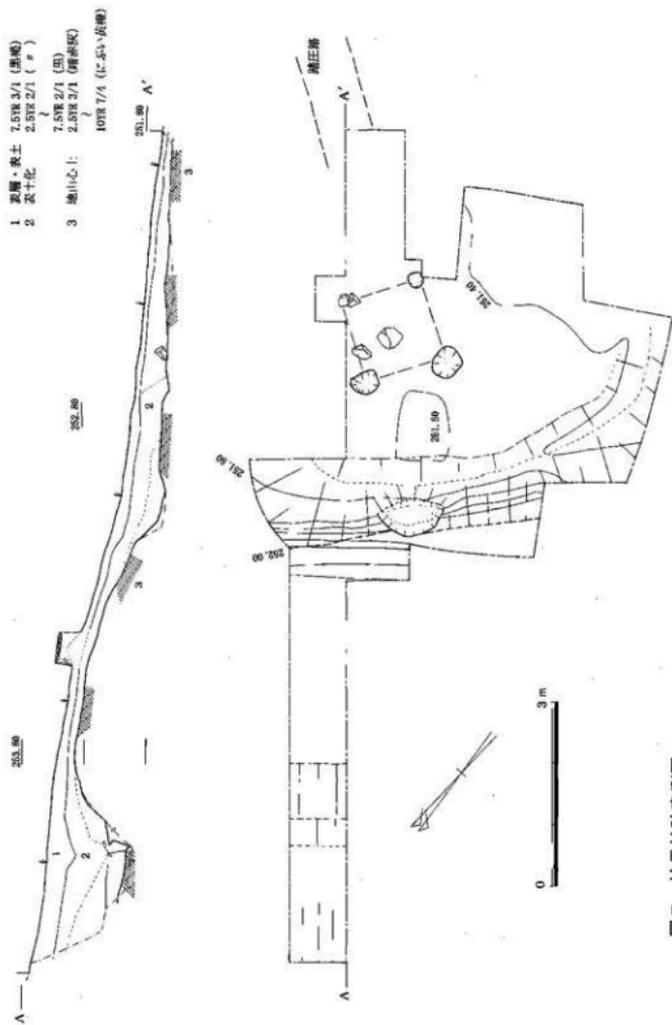


図7. 妙見社跡家測図

C. 出土遺物

(1) (2) (6) (13) はA地点出土、(3) ~ (5) (7) ~ (12) (14) (15) はB地点から出土した。

灯明皿(1)は口径8.4cm・底径4.2cm・器高1.7cmを測る、小ぶりなつくりで体部は丸みもち内湾気味に立ち上がる。底は回転糸切り後粗ナデ、内面は回転ナデで中心に僅かな「ヘソ」が出来るものようだ。口縁周辺には油煙が付着している。にぶい橙色(5YR6/4)を呈し焼成は良い。灯明皿(2)は口径10.6cm・底径7.0cm・器高2.1cmを測る、浅い大ぶりな皿で胎土は2mm径以下の長石等砂粒を少量含む。焼成は弱く橙色(7.5YR7/6)を呈す。内底面は僅かに盛り上がり、口唇は逆ハの字状に外反して立ち上がり、底部は静止糸切りである。この2点の灯明皿はいずれも江戸時代後半に通有の品かと思われる。

皿形杯(3)は集石遺構上方の平坦面から検出したもので口径14.4cm、胎土は1mm以下の砂粒を少量含む焼成は良好でにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈す。器形は口縁に向かって逆ハの字に広がりながら直線的に延びて端部でややアクセントをつけ丸くおさめる。

碗(4)は底径4.0cm・高台高5.5cmを測る。器壁は高台を境に底部は薄手で、中央で僅かにふくらみ、高台外側で最も肥厚する。胎土は緻密であるが僅かに気泡が認められる。施釉面は淡黄色で、断面は灰褐色を呈す。唐津系の陶胎染付で18世紀後半の所産⁸¹であろう。

土師器(5)は高杯或いは器台の脚端で底径13.8cm、ハの字に開きややくびれてさらに外方向に開き丸くおさめる。胎土は密で焼成は良好、にぶい黄橙色(10YR7/4)を呈す。

皿(6)は口径10.1cm・底径7.9cm・器高2.3cmを測る。底面が広く底部から外傾しながら直線的に立ち上がる。胎土は密で焼成は良く浅黄橙色(7.5YR8/6)を呈す。煤等の付着は認められない。

(7)は煙管の雁首と羅宇部分である。残存長5.5cmで全面錆が付着している。端部には羅宇竹が認められた。現在の雁首部分から推察すると、火皿は皿形とコップ形の中間のタイプで、雁首は長く緩やかな曲線を有するタイプではなく、ほぼ直線的の延びて強く屈曲するタイプである。18世紀の所産と考えられる。

染付(8)は伊万里系⁸²で法量不明であるが、丸い体部から外反して立ち上がる口縁を有する。口縁外面には1条、内面には2条の直線文が廻り、外面体部には草花文(梅であろうか?)が施される。猪口であろうか。

碗(9)は口径10.0cmを測る。(4)同様唐津系の陶胎染付である。残存する口縁は内傾するタイプのものである。弓谷たたら出土の碗⁸³と同じ範疇と考えられ、18世紀の所産であろう。

皿(10)は口径8.2cm・底径3.0cm・器高1.9cmを測る陶器で、内面～外面口縁部にかけては鉄釉を施す。底部は平底で回転糸切りである。灯明皿かと考えられる。産地は瀬戸系のものであろうか⁸⁴。

(11)は器種不明の白磁片である。内外面とも布目疔痕で、のち内面にのみ施釉する。

染付の徳利(12)は、外側には透明な釉薬を施し、内側は素地のままでろくろ回転の跡が判る。産地は不明だが釉薬が滲んでいる美品である⁸⁵。

(13)は路面の流入土中から出土した一銭銅貨でごく近い位置の西尾社の関連とみることが出

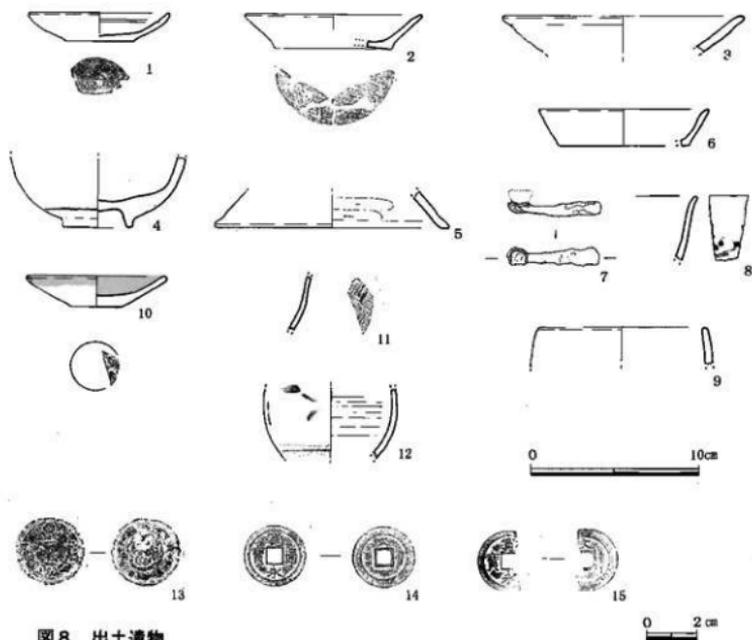


図8. 出土遺物

来よう。因みに、この銅貨は明治7年銘の竜一銭銅貨である。

(14) (15)は銅素材の一文銭で刻文の形状から新寛永銭である。

この他には鉄素材の一文銭であるが錆化腐蝕が著しく刻文は判読出来なかった。鉄製一文銭は18世紀に始まるとされ、幕末まで鋳造・使用されていたものであり曲輪面から出土したものであるが、後世の畑地耕作時に紛れ込んだものと考えられる。

(野津)

註

※1 島根県埋蔵文化財調査センター 西尾克己氏のご教示による

※2・4・5 横田町小馬木 内田寛一氏のご教示による

※3 頓原町教育委員会「弓谷たたら」『志津見ダム関連埋蔵文化財発掘調査報告書』2000、P36第31図No.18

参考文献

島根県教育委員会「三田谷J遺跡vol. 3」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX』2000

木次町教育委員会「妙見山遺跡」『木次町文化財調査報告書第3集』1995

日本貨幣商協同組合『日本貨幣カタログ2000』平成11年

小松大秀・岩崎均史：『喫煙具』日本の美術No.412 至文堂2000.9

5. 若干の考察とまとめ

A. 虎口状構造に関して^{※1}

斐伊川を眼下に西ノ尾丘陵の先端に設けた深い掘割り路の入口部を大きな櫛式構造とした虎口とみられ、肩部の小曲輪から現西尾社の位置に想定される小郭部と連絡していたと考えられる。

また、この郭部（現西尾社）から西へ山腹を迂回しながら下ると、麓の字堂本を経て谷間の奥まるあたり字殿ヶ迫へ至る。因みに、この殿ヶ迫の北東上方の山頂は水ノ手城跡であり、此所は中世三沢の臣布施氏が拠ったところとされている^{※2}。斐伊川の対岸から特に口立つこの虎口から、尾根伝いに近く北東上方の上布施集落（水ノ手城跡も）へと土塁状の掘り底路が登る。この虎口は特に大げさであるが連絡する郭部は狭小であることから対岸に対する誇示の意味を多分に含むものと考えられる。これらから、中世後期末に造られた水ノ手城の縄張りの一端と考えられる。

また、虎口構造から南西へ下るやや緩やかな尾根は江戸中期以降、斐伊川通船の藩施策に関連して通船の目印としての「灯台」が設けられたことが小字地名から読みとれるが、畑地開拓のため遺構は検出出来なかった。

なお、上布施への掘割り路は近代に至るまで里道として使用され管理されていたとのことで、流入土中からの銭貨などもそれによると思われる。

B. 西尾社地とその付近について

現西尾社は西ノ尾の尾根端を大きく削り下ろした位置にあり、境内内トレンチによって旧次の境内面を検出した。現在の境内は従前より埋め上げと拡張により広がっていた。この拡張に伴う陶磁片から凡そ18世紀半ば以降かと思われる。旧境内地面はやや狭く社殿跡は削り下げによって消滅していると思われ、このため明確さを欠く結果であったが、地山の削り下ろしは現社殿のある基壇部の縁辺から急勾配で下降していることと、崖の中ばに削り残した削平面があることから、ほぼ現基壇ほどの幅で削平面（曲輪）が存在していたとみられる。そしてその北西端から掘り残しの尾根に沿って西端の虎口部の小曲輪へと連なっていたと考えられる。

また、社地北～北東の崖上のフラットな丘陵上には小削平面と石積みがあり、4×4尺の祠の跡と推定した。石積み部分はその整地に関わる廃石の集積であろうか。その下の地面は表土であり掘込み等はなかった。しかし、その脇を下方麓へ直線に下る踏圧路の軸線と祠のそれが一致していることから、古文獻や方位からも検討を加えてみたい。

文献上に該当又はそれかと思われる事項が2点ある。ひとつは江戸後期ごろの村絵図^{※3}で、当該位置に「三鉢妙見」と記している。次に雲陽誌^{※4}は前布施村の項に「妙見社…祠官の伝記に七星を祭^{※5}といふ、勧請年曆しれず、本社六尺に七尺、拝殿二間梁三間、祭日九月十三日」とある。また近くの八代村の妙見社についてみると、天文年中三沢氏造立の棟札を記録している。ここで七星は北斗星であり祭日は当然旧暦であるから仲秋の名月にあたる。また社殿はいずれも大きいことからこれらの記述は現西尾社の前身を表現していると考えられる。そして八代村の事例からす

ると中世末にその起源を想像することもできよう。丘上の小祠は最初の社地であり、その後近世に入るとかつて郭であった現在の地へ同じ方位を守って社殿と参道に移したものと考えられる。

	社 殿 規 模	社 殿 極 方 位	参道長・極方位	資 料
丘上の推定 妙見社	社殿 4×4 尺	302°	65m以上・303°	発掘調査
三昧妙見社	本殿 6×7 尺 拝殿 2×3 間	303°	} 共通110m 302°	雲陽誌 (1717)
現 西 尾 社	基壇 6×9 m	296°		

この主軸方位についてみると、北極星（真北）から 58°西偏していることから、特定日時に七星（北斗七星）を拝したと考えられる。例祭日は九月十三日（旧曆）で仲秋の名月（八月十五夜）から約ひと月遅れる“後の名月”（十三夜の月）にあたり、古来収穫を祝った日であり、“豆名月”とか“粟名月”ともよばれる日でもある。

この日の北斗七星と月の位置をみると、太陽の没した暮れ六つどき（午後6時ごろ）西北西から北西にかけて、山際近く七星が横たわりやがて落ちていく。また東の山際から出た月令13の月は東南東の天空かなり高くまで登って来ていることになる。

つまり社殿に向って拝むのは没していく北斗七星であり、振り返って参道方向には中天高く登りゆく名月を見ることになる。そして併せて収穫感謝の日でもあったのである。

中世後半に始まると思われる妙見社は、星・月を祭り、村の氏神として丘頂から直下の磐郭の跡に移って方位をまもり、その後も存続した。そして明治40年の神社統合により妙見社を廃したが、その跡地に「元宮」を祀って改称し西尾神社としたものである。

(杉原)

註

※1 山根正明氏の現地指導をふまえて

※2 『皇国地誌』

※3 『仁多郡誌』仁多郡役所 大正8年刊

※4 『雲陽誌』日本地誌人系復刻本 雄山閣

※5 妙見信仰について『広辞苑 第五版』岩波書店は次のように解説している。

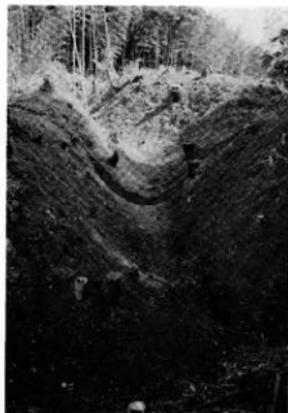
「【妙見菩薩】北極星あるいは北斗七星を神格化した菩薩。国土を擁護し災害を滅除し、人の福寿を増すという。特に眼病平癒を祈る妙見法の本尊。主として日蓮宗で尊崇。尊星王。北辰菩薩。」

※6 『理科年表2001』丸善、『天文年鑑2001』誠文堂新光社、『日本史事典』角川書店などの資料によった。

※7 『皇国地誌 佐白村』（明治8年）島根県立図書館蔵本

※8 ※3に同じ

高根県教育委員会編『尾原の民俗』—尾原ダム民俗文化財調査報告書—1996には明治23年とあるが誤りである。



虎口部調査前



完掘状況



小テラス部



作業風景



T 1



G 1

A地点 発掘状況



石積部（発掘前の状況）



妙見社跡（後背溝と焚火跡）



石積部（断面）



妙見社跡（全景）

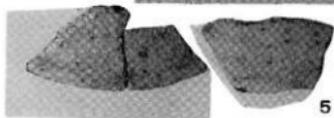
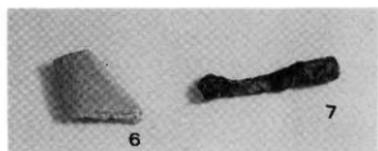
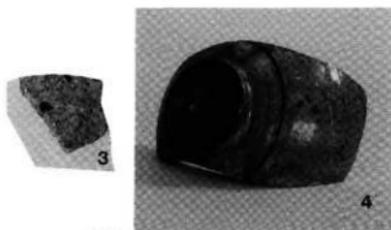


石積部（全景）

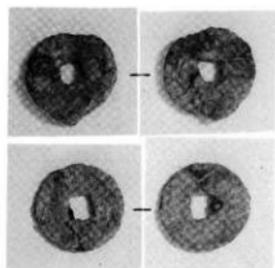
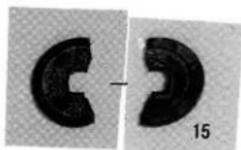
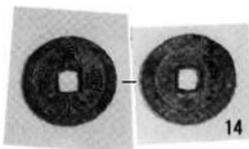
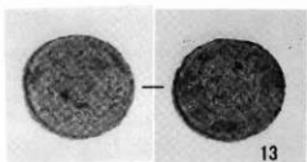
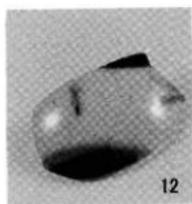
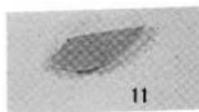
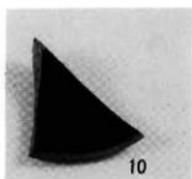


妙見社祠跡

B地点発掘状況



B地点出土



鉄銭



鉄釘

A地点出土

かめがたに 亀ヶ谷遺跡

所在地 仁多町大字佐白1202 (山林)

調査面積 910m² (内 発掘390m²)

調査期間 平成12年6月15日～7月26日

鉄滓等分析検討 村川義行 (和鋼博物館)

¹⁴C年代測定 川野瑛子 (大阪府立大学先端科学研究所)

1. はじめに

尾原ダム建設関連で計画された前布施地区残土処理場予定地内の該地において、平成11年秋、鉄滓片若干が表面採取され遺跡存在の可能性が指摘された。これを分布地区No.99地点として本年度確認調査し、続いて本発掘調査を行ったのである。そして遺跡名称を小字地名により「亀ヶ谷遺跡」とした。

調査地点は上布施地区から南に派生する長い丘陵の東斜面のわずかに湾入する下方にあたり、わずかな扇状地形の緩斜部分を中心である。その下方は谷地田となっている。

この地点で地形を勘案し約910㎡を対象として刈払い後、地形測量を行いトレンチ及びグリッドをほぼ5m間隔で23ヶ所設定して土層序と内容を検討した。そして範囲を限定して350㎡について全面発掘を行った。

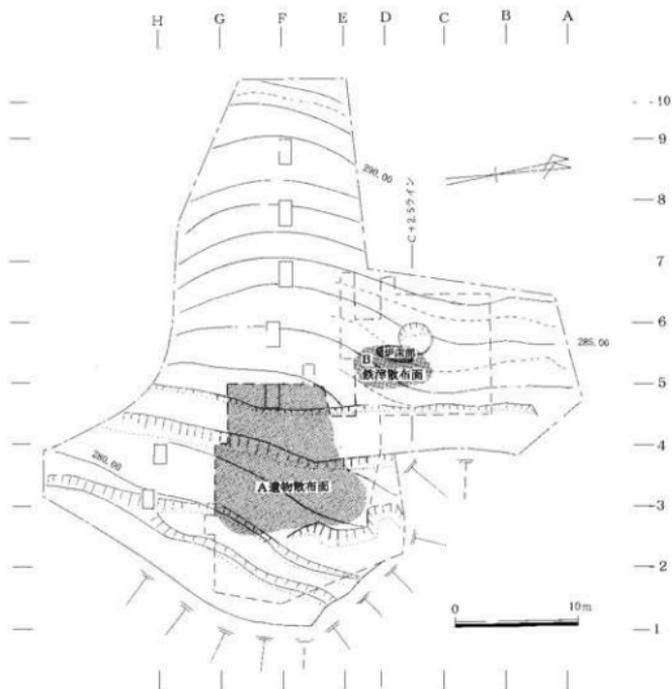


図1-1. 地形図

2. 試掘調査の概況

東に面して、地勢に直交し湧入する傾斜地形部分について5m間隔グリッドによって上層序をみると概ね次のようである。

- ① 暗赤褐色で根群がよく発達している表層土
- ② 暗赤灰色でやや根群が多い表土
- ③ 黒褐色で粉状の土でやや表土化のみられるクロボク土
この中にはまれに土器細片が混入している
- ④ 黒色でキメ細かいクロボク土
- ⑤⑥ ほぼ④に準ずるクロボク土で層界は不明瞭
- ⑦ 黄褐色の強粘質土で火山性浮石風化土、地山心土である

このように表土下の暗色土中にはまれに土師系の土器細片が認められた。また下方のグリッドにおいては鉄滓の小塊の混入も認められた。しかし、これらはいずれも土層堆積の途中で希れに混入したものとみられ、層界等には相当しなかった。下方の緩斜部分のはかつて畑地とされていたところで地山に石礫が点在し、その間には上部の小鉄滓の混入するクロボク土が堆積している。そしてその土層中間位にやや締まった面があって、土器片がやや密に包含する部分が認められた(以下A区と呼ぶ)。

これから北へ約10m寄ったわずかに瘤状に突出する地形の部分では炭灰の密な小平坦面があり、その下に続く斜面には表土直下に鉄滓が濃密に散布する部分があった。この範囲に製鉄址が想定された(以下B区と呼ぶ)。

これによって、鉄滓の散布する部分(B区)と下方の土器片の包含する部位(A区)の2ヶ所を中心に約350m²について遺跡として全面発掘を行うこととした。

A. 土器片包含散布区域(A区)について

1. 土器包含層の状況

A地点として全面発掘の対象としたところの地表面は、林道部分とそれに続く下方の緩斜面で、付近に比べて最もフラットな範囲で10mで約2.5mの落差であり、横方向は概ね等高線に沿っている。なお、林道から下方はかつて畑地に拓かれたところで、幅6～2mの帯状をなす傾斜畑が3段となっているが、数10年来荒廃しているところである。

対象範囲は地形を勘案し概ね13×13m方形に近い区画とした。ここで直交する縦横のトレンチによって土層序をみた。

土層の重なりは表土(根群密で暗褐色)、但し林道部分は攪乱踏圧土が15～20cmで、その下は黒色～黒褐色のきめ細かいクロボク土が0.8～0.4mも堆積している。さらにその下は、下方では礫まじり粗砂質土、谷上方では黄色系粘質土である。

このうちクロボク土の半ばには土器片を包含する部位が広くあるが、これを層区分することは黒色土層でしかもその硬度でも識別不能であった。

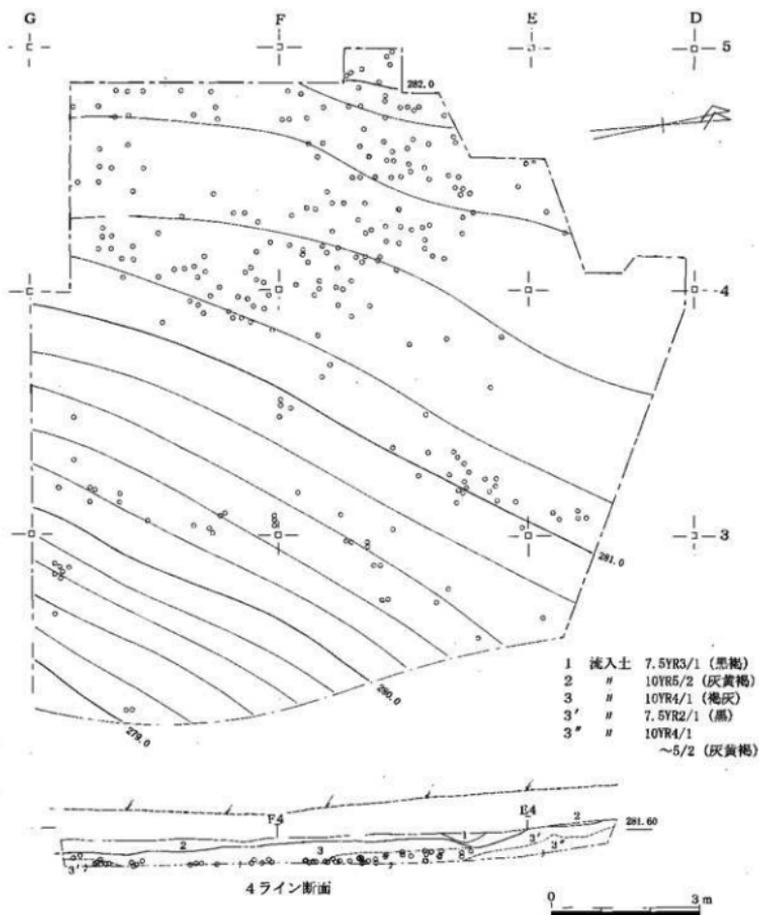


図2. A区 遺物分布状況

2. 土器片を主とする遺物検出状況

包含層は地形の最もフラットな約3×5m範囲で厚さ20cm、分布勾配は-6°ほどであるが、その前方やや傾斜の急になるあたりでは厚さ5cm、勾配は-11°程度で、しかも包含する密度が急に低くなる。

そして土器片等の包含分布する約10×12m範囲において検出採取した遺物は約700点で、その殆どは土器片であり叫石などの礫器が若干認められる。そして土器片は土師器が主であるが粗製縄文や須恵器片もみられて年代の幅は広いものである。

このように、遺物は出土したがその部位や付近において遺構は全く検出出来なかった。

3. 出土遺物

1) A区出土遺物

ここから検出した遺物は表のとおりである。そのうち実測し得たのは次のものである。

龜ヶ谷遺跡遺物集計

出土区	縄文	弥生	古式ハジ	土師質土器	須恵器	不明	その他	石礫器	計
排土中					1				1
C5								1	1
D2				2					2
D3				25	1	4		1	31
D4		1	7	1					9
D5				4		5			9
E2				11		6		3	20
E3	3	2	1	88	1	7	陶2	2	106
E4		3	14	134	14	110		2	277
F1						1			1
F2	1			4		10			16
F3		4		26	7	29		4	70
F4		15	1	87	2	32		1	138
F5				3					3
F7				1					1
G2	4		2	2		8			16
H3						4			4
計	8	25	26	308	26	216		14	705

縄文土器 (図3-1)

E3区から検出した(1)は胴部の器表に貼付凸帯を巡らせるもの。胎土は1mm以下の砂粒を少量含む。良く焼き締まり器壁は堅い。色調は外面が黒色(5YR2/1)、内面がにぶい黄褐色(10YR7/3)を呈している。外面は横～斜め方向にへら条工具で磨研し、内面はナデて

いる。黒土BⅡまででらないだろうが後期末～晩期にかけての、黒色磨研突帯文土器である。

E3区から検出した(2)は半精製土器で浅鉢の口縁部であろう。内面は横方向にミガキ、外面は粗くナデている。焼成は良くにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈す。口縁端は外傾してきて垂直方向に屈曲し、丸くおさめる。時期的には、後期末宮滝式併行期であろうか。

E3区から検出した(3)は粗製土器で胎土は3mm径以下の長石等砂粒を多く含み、灰黄褐色(10YR4/2)である。内面はナデ、外面は二枚貝条痕である。G2区から出上の(4)(5)も粗製土器で、内面は二枚貝条痕であるが表は粗くナデ、(4)は焼きがあまく(5)は堅く焼き締まる。ともに、にぶい黄色(2.5Y6/3)である。(3)(4)(5)は後晩期の所産であろう。

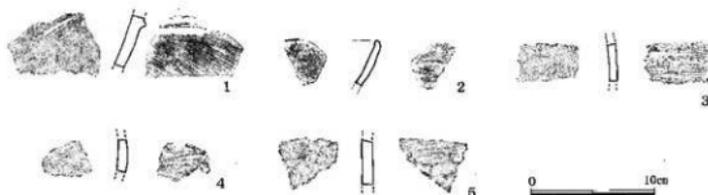


図3-1. A区 出土遺物(1)

弥生土器(図3-2)

F4区から検出した(6)は張り出した壺の胴部で3条の凹線文をもち、外面はハケメ調整後、櫛描きの直線を左下なりに施し、内面はナデである。胎土は1mm径以下の砂粒を微量に含むが密で、良く焼き締まり、にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈す。外面には煤の付着が認められた。

E4区表土下面から検出した(7)は壺の底部で、底径12.7cm、胎土は2mm径以下の長石・石英等砂粒を少量含み、焼成は良く色調は外面が灰黄色(2.5YR7/2)、内面がにぶい黄褐色(10YR7/3)である。内面は荒ケズリ、外面は丁寧ナデている。

F4区から検出した(8)は壺頸部、1mm径以下の砂粒を含むが密で良く焼き締まり、にぶい黄橙色(10YR7/2~7/3)を呈している。外面には3条の断面三角形の凹線文、烈点文、その下に薄く沈線を巡らせへら状工具による右下がりの直線文を施している。内面はハケメ後ナデ、指頭圧痕も認められる。(9)も(8)同様、F4区から出上した、壺頸部で1mm径以下の砂粒を少量含むが焼成は良くにぶい黄褐色(10YR7/3)を呈す。外面は6条の凹線文を巡らせその下方はハケメ調整、内面は荒くナデ、指頭圧痕が認められる。いずれの土器も中期後葉～後期前葉のものであろう。

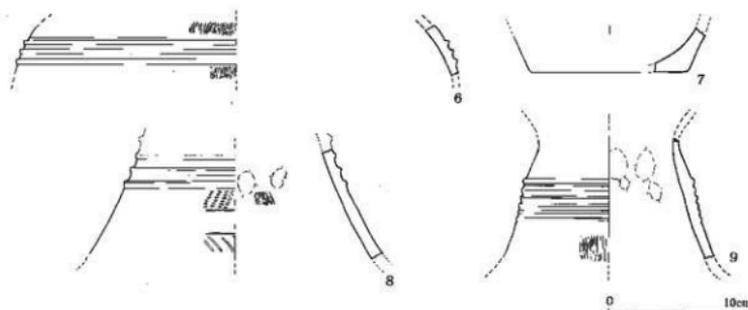


図3-2. A区 出土遺物(2)

土師器(図3-3)

(10)～(14), (16)～(18), (20)は甕である。

(10)はE4区表土下から出土した甕の口縁部で、内面頸部はケズリ、その他はナデている。3mm径以下の砂粒を少量含むが良く焼き締まり、にぶい黄橙色(10YR7/4)を呈す。

(11)はE4区からの出土で口径15.4cm、外面はヨコナデ、内面は口縁～頸部まで荒ナデ、肩部からはケズリで全体的に荒い作りである。器壁は頸部で薄く外傾しながら立ち上がり、口縁周辺で最も肥厚し丸くおさめる。胎土に酸化鉄を含む為明赤褐色(2.5YR5/6)を呈す。

E3区から出土した(12)は口径16.6cmを測る。肩部は厚く頸部から薄くなり短く外傾して立ち上がる。外面はナデ、内面はケズリ後ナデである。

(13)はE4区検出で口径17.2cmを測る。胎土は2mm径以下の砂粒を少量含むが密である。焼成はあまり良くなく脆い。明黄褐色(10YR7/6)を呈す。外面頸部～肩部にかけて縦方向にハケメ調整、内面頸部は横方向にハケメ調整、体部はケズリである。

E4区出土の(14)は口径15.4cm、胎土は1mm径以下の砂粒を少量含む。焼成は良好で色調は明赤褐色(2.5YR5/6)を呈す。外面は荒いハケメ調整である。

E3区出土の(16)は口径13.8cmを測る。焼成は良好で橙色(7.5YR7/6)を呈す。器壁は体部～頸部にかけて厚く、口縁部で外傾して薄くおさめる。内面はケズリである。かなり風化している。

F3区から検出の(17)は口径18.8cmを測り、2mm径以下の長石・石英等砂粒を含み、褐色(2.5YR6/6)に焼成している。外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメである。

E4区から検出した(18)は口径21.8cmを測る。焼成は良好でにぶい黄褐色(10YR7/4)を呈す。体部には煮炊きによる煤の付着が認められる。

E4区出土の(20)は口径17.0cm・推定器高20.3cm、胎土は密で良く焼き締まり、灰黄褐色(10YR6/2)を呈す。外面はハケメ調整、内面頸部から下方は横方向にケズる。

F4区検出の(15)は小形の甕である。口径7.4cm、胎土は密で焼成は良くにぶい黄褐色

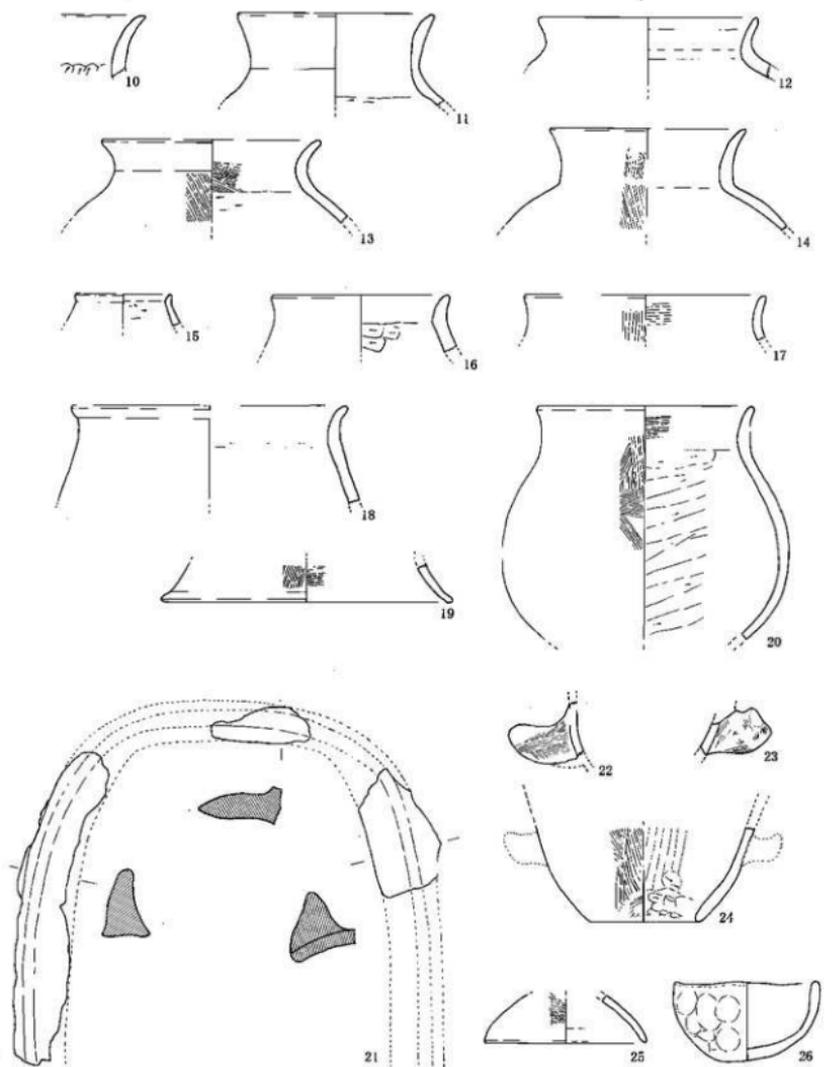


图3-3 A区出土遗物(3)

0 10cm

(10YR7/4)を呈す。口縁部は「く」の字に短く外傾しおさめる。外面はナデ、内面は横方向にケズリである。

F 4区検出の(19)は高杯脚端部であろう。底径22.8cmを測る。内面はケズリ、外面はハケメ調整である。胎土は密で焼成も良い。八の字に開く脚で端部はさらにアクセントをつけて外に開く。古式土師器の内に入るものであろう。

(21)は1片がF 2区、2片がE 3区から検出した。甕の焚口部である。胎土は密で焼成は良く丁寧に作られている。底部分に相当する箇所には煤が付着している。

(22)(23)は甕の把手である。(22)は橙色(2.5Y6/8)、(23)は黄灰色(2.5Y6/1)を呈す。いずれも外面はハケメで内面はケズリ、外面には煤が付着している。(22)はE 4区から、(23)はF 4区からの出土である。

(24)はE 4区から検出した甕である。底径9.0cmを測り、胎土はやや粗で橙色(5YR6/6)を呈す。外表には把手の剥落痕があり縦方向にハケメ調整、内面はケズリで、のちナデ調整である。

F 4区から検出した(25)は器種不明の脚端である。外面は端部周辺は横方向にハケメ、内部はケズリ放しである。底径12.8cmを測る。蓋であるかもしれない。弥生末期に遡る可能性もある。

E 3区出土の(26)は手捏ねの碗で口径11.1cmを測る。胎土はやや粗で橙色(5YR7/6)を呈す。内外面ともに指頭汗痕が認められる。表面は凹凸している。これらは概ね7～8世紀のものと考えられる。

須臾器(図3-4)

(27)～(31)は坏蓋である。E 4区から検出した。

(27)は肩部～口縁部にかけて残存し肩部に2条の沈線を施す。内外面とも回転ナデである。口径は11.5cmを測る。胎土は密で1mm径以下の砂粒を含む。口縁端部の段は僅かに認められる程度で、やや肩の張った形状を成す。

F 3区検出の(28)は口径12.2cmを測る。肩部に界線を有し、口縁部は僅かな段をもち厚くおさめる。内外面とも回転ナデである。

E 4区検出の(29)は口径12.2cmを測る。器壁は非常に薄いつくりであるが良く焼き締まっている。口縁内部やや高い位置に浅い沈線を有する。形状は沈線にあたるあたりからさらに外反する。肩部には2条の沈線を巡らせる。

E 4区検出の(30)は口径12.5cmを測り、胎土は密で焼成は良好である。内外とも回転ナデ調整で、口縁部やや細くなり尖り気味に内湾しおさめる。口縁内面やや高い位置に僅かな窪みがある。

E 4区出土の(31)は口径13.0cm・推定器高4.4cmを測り、胎土は密だが焼成はあまい。

黄灰色(2.5Y6/1)を呈す。器壁は厚手のつくりである。天井部は粗雑なヘラケズリで肩部に沈線を1条施す。

杯身(32)はE4区からの出土で、口径10.8cmを測り胎土は密である。焼成はやや不良で脆い。灰色(5Y6/1)を呈す。内外面とも回転ナデ調整である。口縁立ち上がりは内傾し直線的に延びる。

E4区検出の(33)は口径11.4cmを測る。胎土は密で良く焼き締まる。内外面とも回転ナデ調整である。体部外面は自然釉を被る。立ち上がりは内傾し直線的に延び先細り気味におさめる。

以上は概ね大谷編年4期、陶邑編年TK209の範囲と考えられる。但し(30)は口縁が内湾傾向にあることから大谷編年5期に降る可能性もある。

F3区から出土した(34)は壺型土器で口径12.8cm、胎土は密で焼成は良く灰褐色(7.5YR5/2)を呈す。内外面とも回転ナデで、体部は丸みをもちながら口縁部で「く」の字に外反しておさめる。8世紀の所産であろうか。

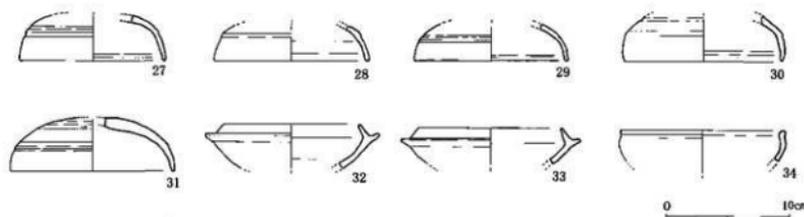


図3-4. A区出土遺物(4)

石器(図3-5)

E2区検出の(35)は11.2×8.2cmを測る磨石で、側面には磨痕や敲打痕がある。平面中央の凹部も敲打痕である。

(36)はE2区から出土したもので、8.0×6.7cmを測り偏平な2面をもつ。側面には磨痕と敲打痕が、平面中央には敲打痕が認められる。

(37)はD3区から検出した小円礫で3.3×2.6cmを測る。加工痕は認められず性格不明である。

(38)はE2区から出土し材質は凝灰岩製、やや軟質であり8.5×6.7cmを測る。頂面には敲打痕が観察できた。

E4区検出の(39)は、材質安山岩製の磨石で全面磨痕が認められ、一部欠損している部分がある。偏平面中央と側面には敲打痕が認められる。

(40)はF3杭付近トレンチから検出したもので、25.2×19.8cmを測り一面は使用された

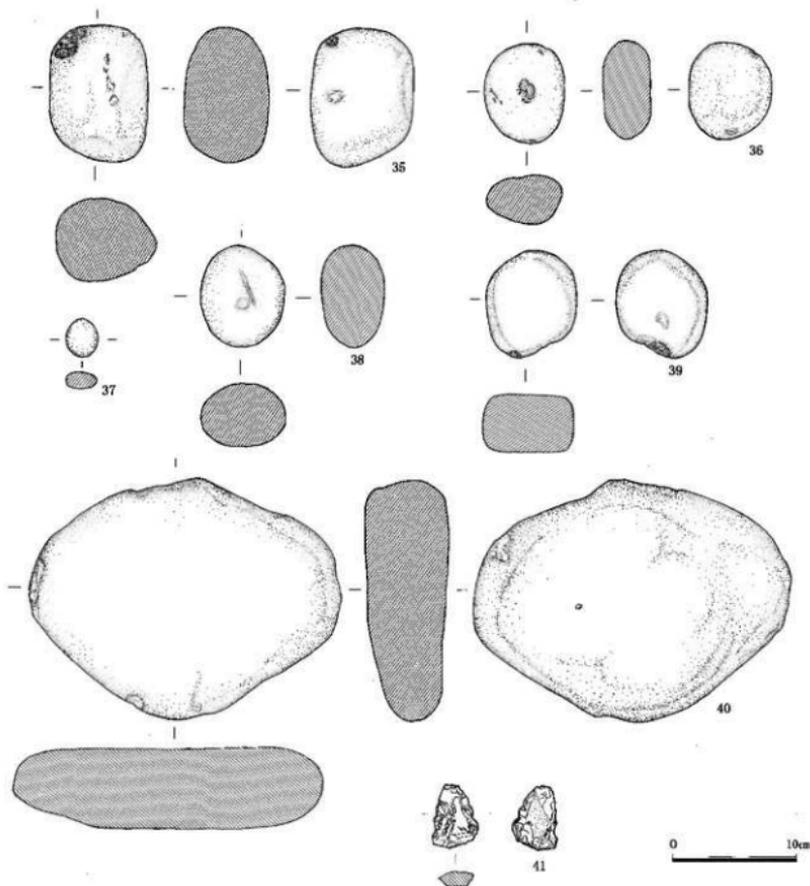


図3-5. A区 出土遺物(5)

偏平面で磨痕が観察でき、そのほかは凹凸した自然面で側面には一部欠損している部分がある。右皿様の使用が推察される。花崗岩質の偏平な川原石を用いたものである。

F3区から出土した(41)は、黒曜石製で鎌というよりもむしろ小形の槍先ともみられるもので5.0×3.8cmを測る。長三角に近いつくりで長辺2辺に鋭く刃を造っており先端は欠損しているようだ。一面中央部は自然面である。

4. 小 結

A区域においてはクロボク土層中に遺物が厚さ20cm以下の層状をなして包含していた。しかし、その付近を含む範囲において遺構は全く検出されなかった。出土土器は、縄文土器は少数ではあるが粗面で二枚貝による調整もみられるもののほか、黒褐色半磨研で貼付凸帯の付く破片もあるなど概ね後期後半～晩期ごろのものとみられた。弥生土器は極く少数であるが、甍又は甍形土器の底部や肩部に施文帯のあるもの、凹線文のものなどが認められ概ね中期後葉であろう。

もっとも多いのは土師器で古式土師器もわずかにあるが単純口縁の甍形土器及び煤の付くその削片であり、甗やかまど片も混じていた。概ね古墳時代後末期ごろであろう。またこの時期の須恵器の蓋坏も認められる。このほか叩石などの礫器や、1点ではあるが尖頭縁の槍先かと思われる黒曜石製品もあった。

これら遺物の出土状況は、すべて混在していて同時に集積したものとみられることから、古代のある時期に雨などによりクロボク土と共に流下し、地形の湾入する勾配の緩やかな地点に集積したものかと思われる。

(野津)

参考文献

- 仁多町教育委員会『下鴨倉遺跡緊急発掘調査報告』。昭和56年
仁多町教育委員会『下鴨倉遺跡』第2次発掘調査報告。1990
大川清・鈴木公雄・工業普通 編『日本土器辞典』雄山閣。1996
島根県教育委員会『板屋Ⅲ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5。1998
正岡睦夫・松本岩雄『弥生土器の様式と編年～山陽・山陰編』。1992
島根県教育委員会『三田谷1遺跡vol. 3』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX。2000
島根県教育委員会『仁多・川子原横穴』島根県埋蔵文化財調査報告書第XVII集。1991
仁多町教育委員会『須板遺跡・他』中国第二中幹線ルート送電鉄塔建設予定地内遺跡調査報告書。1997
地学団体研究会編『自然をしらべる地学シリーズ 3。土と岩石』東海大学出版会。1982
瀬見 浩『図解 技術の考古学』有斐閣選書。1988

B. 製鉄址（B区）について

1. 遺構の検出

わずかに張り出す地形のややフラットな上面とその前方斜面6×7mほどの範囲である。地表面のこの間の高差は約2.5mで、上方に2.5×1.5m長円形の平坦面がつくられている。林木（杉）伐木のあと地でありこれを通る縦断トレンチによってみると、根群の多い厚さ15cmほどの表層土を取り除くと下方半分域は鉄滓の集積であり、上方の平坦部分は流下したクロボク土が25～30cm堆積しているが、その下はやや固みとなるように削り出した小平坦面でそのクロボク地面が焼けており、表面には薄く炭灰層があった。ここには鉄滓は含まれていない。

このクロボク土の下は黄色粘質土の地山心上であり、クロボク土層は概ね30cmほどの厚さで下方へ続き、所々に大～中の山石が混入・点在している。

また削平焼土面は、下方の鉄滓散布面の上端近くを一部埋めてつくられた面であり、鉄滓の散布が先行していることから2種の時期差のある遺構と判明した。

1) 小炭焼址

上方に近い削平焼土面は1.8×0.9m、横に広い長円形のやや内窪みで炭灰層が被っている。またその炭片は細片で焼けたクロボク土と混合していることからして、枝条を積んで焼き覆上消火する手法の小炭焼きを行った所とみられる。この年代は不明であるが後述の製鉄遺構より後出するものである。

2) 鉄滓散布部

鉄滓の散布は下半分区域の斜面で約4×4mの範囲であり、その上端位置に等高線に沿って幅0.8m、長さ2m弱の炉床底部部分が鉄滓層に埋もれて残っていた。

2. 製鉄遺構について

1) 鉄滓の散布面

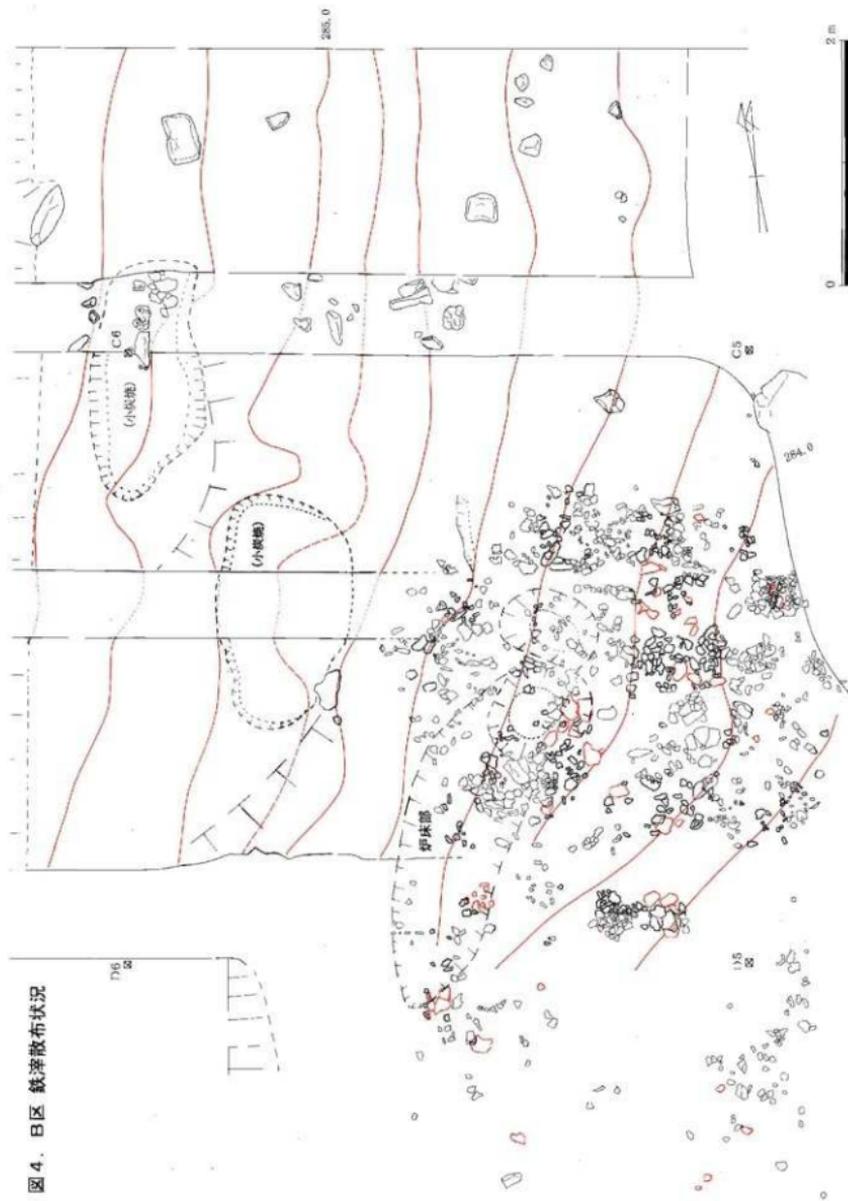
表土下に鉄滓が濃密に散布する部分を中心に6×6mほどの範囲についてみると、この間約1.5mの高差のある斜面である。これについて1×1mの方眼区を設けて鉄滓等の悉皆計測を行って標本試料を抽出・取り上げることとした。なおが壁材片も若干混入していたが、鉄滓と共に投棄した破片は埋没土圧と経年風化で崩壊していて取り上げ不能であったので、計測からは除いた。

測定は各個の重量のみとしたが、結果として区分毎の流出滓の感覚的な大きさは次のようであった。

2～10g (log10=1) …小指の指頭大 50～250g (log250≒2.4) …掌中に納まるほど
10～50g (log50≒1.7) …指2本分ほど 250～(1250g) (log1250≒3.1) …拳大程度

また代表値としての平均値及び標準偏差値の計算は、各分布を正規分布に近づけるため常用対数を用いて算出した。

图 4. B区 鉄滓散布状況



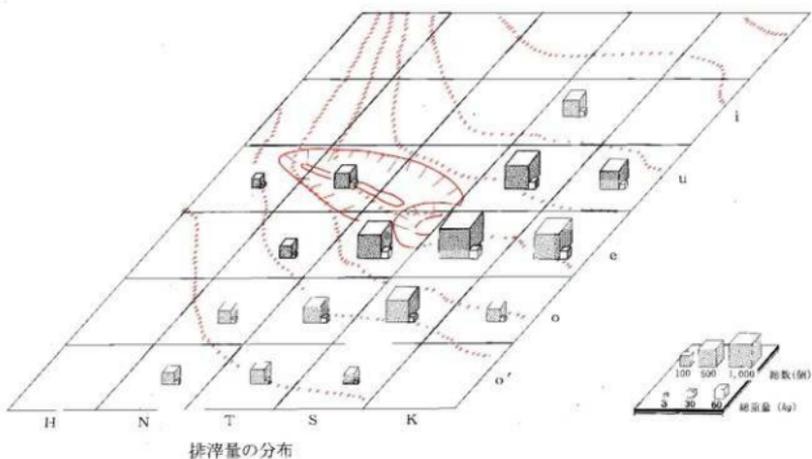
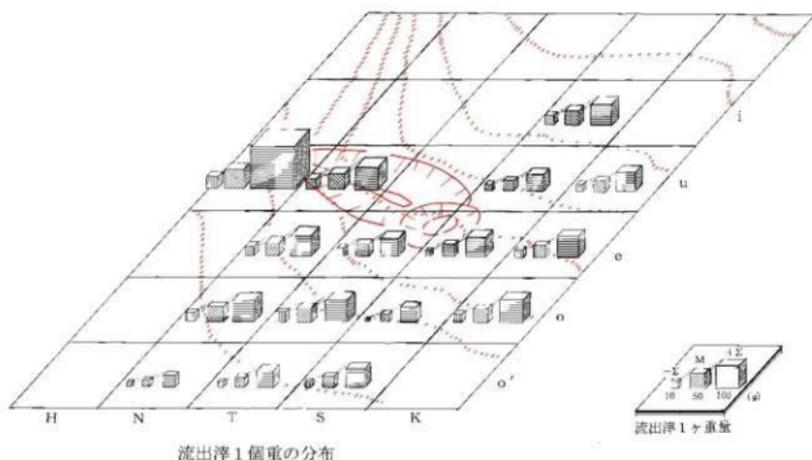


図5. 排滓の分布

調査した鉄滓の総数は約10,000個、総重量約300kgであり1個重量は2g～1.3kgの間である。そして約7割が流動性のよい流出滓であり、各区ともそれを代表として扱っても大差がないことから、各区を代表する平均値等はこれについて掲げた。

この結果から数・総重量ともに大きい区はSu, Se, Te区であるが、1個重はこれらが最も小さい。逆に数・総重量ともに小さい区はHu区で1個重は抜群に大きかった。

これらについて、鉄滓取り上げ後に検出した炉床～溜り部遺構や等高線をド敷きにしたグラフに表示すると前頁ようである。

このグラフから次の諸点が読みとれる。

1. Se, Te区にかかる湯溜り部（直径約80cmの囲み）から約1m範囲においては排滓総重量・個数ともに最も多いが、1個重量は逆に最も小さい。

2. 1個重量の最も大きいのは最も遠位のHu区であるが数・総重量ともに少なく、この傾向は概ね標高284.2mライン（湯溜り部より20cm低い）より下方において共通している。

これらのほかにSi区においてもその下方に寄って鉄滓があったが、これはのちに小炭焼の小削平部をつくるとき、その前端部に埋め立て用として移動したものとみられる。

このようにして鉄滓を取り上げたところ、Su, Tu, Nu区に炉壁の大破片が5片伏せた状態で検出された。これには多くの木呂孔が認められたので、現場で固定して取り上げた。

2) 炉床部の検出

そして、これら炉壁片を取り上げた下には長さ約50cmの炉底～湯路口部滓があり、ほぼ原位置のまま残存しているとみられて炉床相当部の輪郭がほぼ推察し得るに至った。これによって推定部を横断するサブトレンチで掘り方等を検討した。

断面では緩やかに傾斜するクロボク土の地山に幅1.00m、深さは中央部で約15cmの浅いU字形の掘込みに、細かな炭片や焼土とみられる細土が少し混入するクロボク土様の土が詰められていて、その上面に上記の炉底滓が乗ったかたちで在った。平面でこの掘り方を追ってゆくとも高線沿いに長さ約2.8m、最大幅1.0mで、南（下手）は尖り気味に閉じ、北端（上手）は直径80cmほどの楕円形の囲みとなっている。

この凹入部は排滓が流れ出て貯留する「湯溜り」であるが、窪みの底面には磁着物や微細な流



図6. B区 炉床部と炉壁破片の落込み

出洋片等の何らも見当らなく、単に細炭片を含むクロボク土の面であった。また被熱の程度は基盤土が熱変色を呈していない、熱が弱かったのか或はその後において掬い取ってしまったものかは判断出来なかった。

また炉床部あたりも長辺両側とも20cm以上も大きく削り取られているものと思われた。築炉されていた直接の炉床部の規模については縁辺部の被熱の程度も判別し難く、またこれほど削られた状況では推測の域を出ないが、幅約50cm、長さ70~80cm程度であろう。

以上の状況から炉床の造成は緩斜面に浅い溝を引きその中に燻り土を充填したのみの簡易なもので、湯溜りは北側の一方向のみ造ったものである。

3. 採取鉄滓等

流出滓

1) No.1は幅10cmほどの緩やかな湯路溝に幾重にも流出集合し固化した大塊で、幅35cm・厚さ20cmほどであり図示下方へ向かう細流が重なっている。1本1本の“のろ”の流れは細かく、その幅は0.8~1.2cmほどの部分が多い。これは炉の湯路口の大きさを示唆するものであり、ひいては炉自体の規模をも暗示しているといえよう。

鉄滓の表面は胎状で暗青灰色、破断面ではやや多孔質、やや比重感があり流動性はやや良く、表面・断面とも光沢がある。底面には砂粒の圧痕がある。重量6.8kgである。鋳は認め

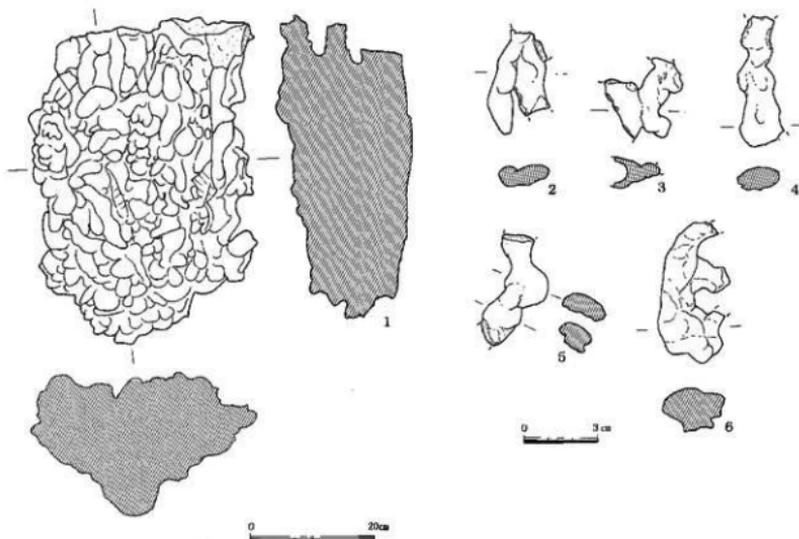


図7. B区 流出滓

られない。このような大塊となったものは極く少なく、次の供試品とで2片のみであった。これにほとんど同じ流出集合状の鉄滓（図版流出滓No.1）を分析試料No.2として供試した。

2) 図示したのは5片（No.2～6）であるが、この類が当該遺跡では全体の約1/3で最も多かったものである。このうち重量が9.7～10.8gまでのもの4片、26.4gが1片である。流れの幅は0.8～1.2cm、厚さ0.5～1.0cmで長さは3～5cmほどで折れている。いずれも図示下方への流れで樹枝状であったものである。表面鉛状でやや流動性は良く暗青灰色、底面に砂痕のあるものもあり、上面・底面ともに光沢気味で錆はない。

また破断面に大気孔のあるものもある（図版流出滓5）。

同様のものを分析に供した（試料No.4）。

3) 図示していないが、この流出滓は流動性が特に良く粘性の低い状態を示すもので、幅10cmほどの湯路溝に貯留し固化したものである。幅10～12cm・長さ約40cm・厚さ約5cm、表面は一樣にフラットで部分的に細かい壁状の部分がある。暗青灰色で表裏面とも光沢あり、破断面は緻密で希に大気泡孔がある。比重感には特に重い。操業中最も盛んな炉況のときのものであろう。このような形態の鉄滓はこの他にはなかった。分析に供試した（試料No.3）。

炉底滓

No.3は炉床部に在ったもので、図右半分はバン屑を圧縮したような薄皮状を呈し、左端は

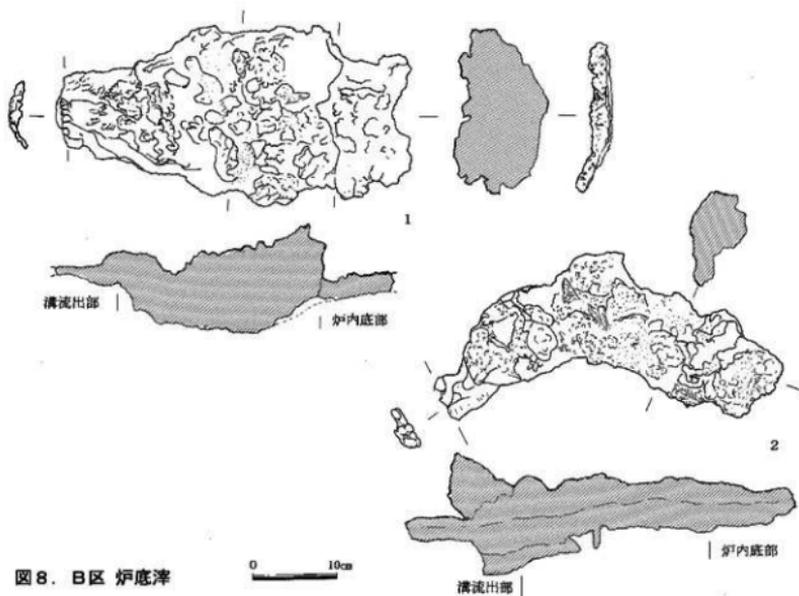


図8. B区 炉底滓

湯路への流動を示す鉛状で光沢のある部分が残っているもので、中ほどは錆の発生もある不定塊状多孔質の粗粒な厚い部分である。長さ44cm・幅22cm・最も厚いところは10cmであり、重さは5.5kgを測る。形状と出土位置からして炉内端部から炉外流出溝へと続く湯路口部を中心とする部分の炉底残存部分であろう。

なおこの図の右方に同様のパン屑状の滓片が続いていて試料として採取し、分析に供した(分析試料No.1)。

No.2も同様で、形状は「く」の字状にまがる重さ6.8kgの炉底滓である。

炉壁片

- No.1：炉床内に倒れていたもので接合して幅44cm・高さ25cm、木呂孔2孔の残る大破片である。外面の壁材土は剥落して厚さは正しくないが直線状の部分である。木呂孔は外面で16.6cm、内面では16.5cmの間隔で穿たれて背面に対し 81° 及び 85° であり、約 7° の伏角である。内壁面での孔径は2.3cmと3.1cmを測る。なお、一部に炉床基底面とみられる下底面が残っているため、それから木呂孔までの高さは7～8cmほどである。破断面でみると木呂孔の直下と直上部が大きく侵蝕されて凹入し、内面はすべて溶融してガラス質となり外面寄りにはぶい橙色の土色を呈し脆い。そしてこれらの土中には他の炉壁片もともにワラと思われるサがやや粗に混入している。
- No.2：幅38cm・高さ35cm、大きく湾曲する壁部で、下底面はすべて溶融して基底面とみられるものである。この壁材には木呂孔は一つもなく、下方ほど侵蝕が弱く厚さ7cmほどある。湾曲する形状から炉体のコーナーにあたる部位かと思われる。なお、立ち上がりもやや内湾している。
- No.3：幅47cm・高さ28cm、木呂孔3孔を残してすぐ下で折れたもの。平面形は緩く内湾し、内面右端ではやや強くなる形となる。木呂孔の水平方向挿入角は外面で左からそれぞれ 103° ・ 96° ・ 95° でその間隔は外面で15cm・14cm、内面では12.0cm・12.5cmである。なお挿入上下角と基底からの高さは明確にし難い。
- No.4：15×15cmほどの破片で、これは上部No.3に続くものであるが直接の接合は出来なかった。内面上半はやや粗面に対して、下半は鉛状の磨面である。外面は剥離している。
- No.5：木呂孔から上へ34cmの破片で、木呂孔は外面からほぼ 90° で挿入されている。また伏角は明確ではないが 5° ～ 10° 程度と推察される。内面は木呂孔の上部は強く侵蝕凹入しているが、概して溶融は弱く粗面でわずかに点状に錆の発生がみられる。外壁面の色は下から明黄橙・橙・にぶい褐・にぶい橙と漸移して熱による変色がやや弱かったとみられる。
- No.6：一部に基底面が残る高さ38cm・幅約40cm、基底から6.5cm上って木呂孔が1つみられる。木呂孔の挿入角は水平で 70° 、伏角は約 7° とみられる。外壁面は剥落しているが木呂孔上までの10cm、その後各10cm毎に上方へ色調は黄褐・にぶい橙・黄橙・暗褐と変化しており被熱の程度はやや弱い、下から約30cmまでが熱変色とみられる。内面は鉛状に溶融した部分

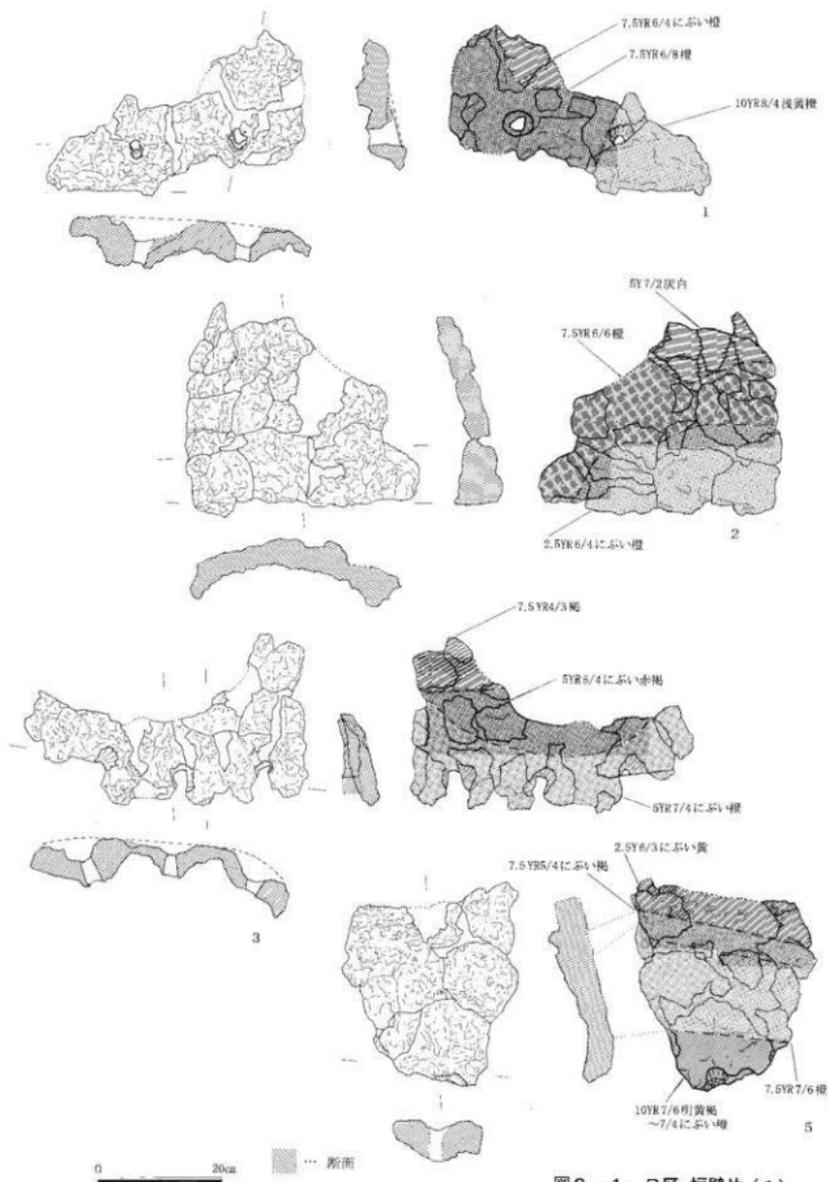


图9-1. B区 炉壁片(1)

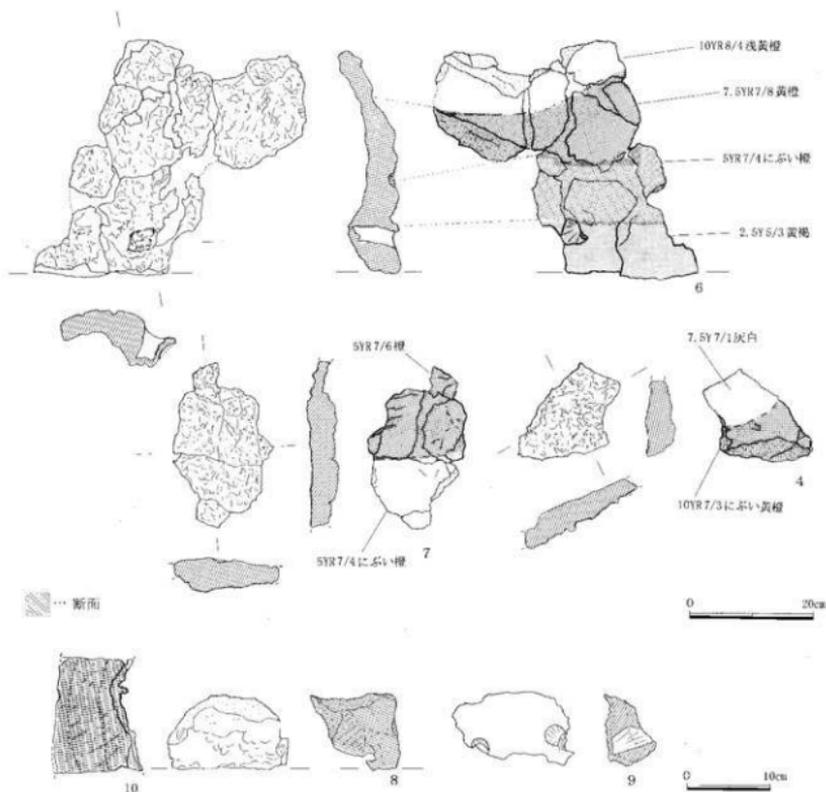


図9-2. B区 炉壁片(2)

は殆どなく、粗面であるが錆の発生はみられない。

№7：部位は木呂孔より若干高い位置の破片とみられ、内面は船状に溶融して赤褐色がありところどころに白色小礫が突出している。外面は剥離しているが半ばより下方はにぶい橙、上半は橙色を呈している。

№8：排滓中に混っていたもので、幅14cm・高さ9cm、基底面はしっかり残っており、左右両端に木呂孔があってそこから折損している。木呂孔は基底から5cmと3cmの高さにあり外面で約13cm、内面では約11cmの間隔と推定される。伏角については推定不能であった。内面木呂孔下のあたりは強く侵蝕され挟り込んだようになっていて融面はやや赤褐色気味である。破断面をみると内側から青灰・白・黄と変色して被熱が強く、しかも炉内の還元が強かったことがうかがわれる。

No.9: 幅15cm・高さ8cmほどの破片で排滓中から採取したものである。上記と同様に左右端に木呂孔があり、その間隔は外面では11cm、内面では10cmである。壁体の立ち上がり角がはっきりし難いことから挿入伏角は推定出来なかった。上記と同じく壁体断面は淡青灰色まで熱変色している。

No.10: この排滓部から採取した高さ14cmほどの破片であり、炉体の部位は特定出来ないが、壁体外面の残存している唯一の資料である。外面は板状のもので粗く横ナデしたもののみられ、厚さは10~7cmである。破断面についてみると外面から2.0~2.5cmは橙色で本来の炉材粘土の色であり、次いで芯にあたる3.5~4.0cmは弱い熱を受けて浅黄橙色となり、内側寄りの1.5~2cmほどはにがい赤色となり、内面は厚さ0.5~1.0cmほど熔融してガラス化している。なお、下方寄りにはにがい赤色の内側に還元をやや強く受けた灰白色帯がみられる。これらの状況は炉体下方の木呂孔付近とは異なるが内面の融面などから炉体上部でもなく、概ねその中間位置の部分かと思われる。特に炉内反応の還元域にかかるあたりかと思われ、またこれからすると炉壁体の厚さは中釜以上の部分で少なくとも10cmを超えていたことが判る。

4. 炉体復元の試み

炉床中心部に倒れ込んで放置された大炉破片 (No.1~No.6) をほぼその位置にあったものと仮定して配置してみると、図示したように外長径約1m・外側幅65cmとなり内面は強く侵蝕されているが、仮に壁の厚さ15cmとすると内法で幅30cm余・長さ70cmの長円形となり、排滓は北側の一方のみとなる。

木呂孔についてみると、北側排滓部(湯路1)側を除く3方向から中心に向かって吹き込むようになるが、1基の送風装置から複数本の木呂を出しているものとは考えられず、1孔毎に別々の送風装置であったと考えるのが妥当と思われる。

5. 理化学的検討

木炭片による¹⁴C年代の測定及び鉄滓等について冶金学的検討は、それぞれ依頼してこれを行った。そしてこの報告の全文は付編として収録した。

¹⁴C年代の測定によればこの製鉄跡はy. BP967±32BP年、較正暦年代はAD1022~1042又はAD1093~1118年とされた。いずれにしてもAD1100年の前後を示していて各地に荘園が広く展開するころにあたる。

また鉄滓の分析等からは多くの点が指摘されたが、化学成分のうち特にTiO₂はやや低く始発原料が真砂砂鉄系かとされ、その他成分のMgO, CaO, FeO, Fe₂O₃など近隣の中世とされたたたら⁸⁾のそれに概ね近い値となっている。

なお炉底滓はFe₂O₃が多いのは瀧ノ谷大軟たたらの場合に近く、還元不良と低温状態のためかと指摘された。炉壁材粘土は比較的Al₂O₃が高く耐火性にはすぐれているが、反面SiO₂が低いため

スラグ生成には不利であったと指摘された。

これらの所見から操業効率はあまりよいとはいえず、還元良好な経時的範囲は狭かったかと思われる。

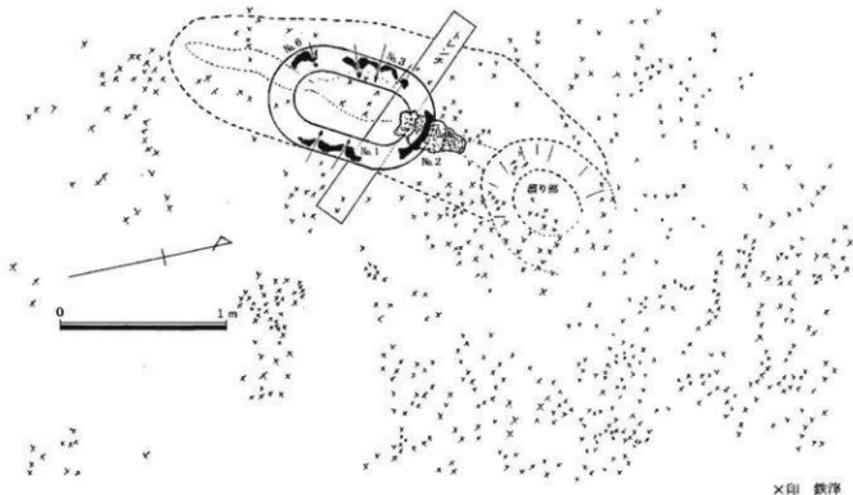


図10. 炉の推定復元

6. 小 結

検出した製鉄址は小規模なもので、山腹中ほどのやや張り出す緩斜面に位置した。排滓は極めて細い流出を示し、炉壁材にはスサが混入していた。流出した鉄滓^{SP2}の分析結果も近世のそれではなく、当地の中世又はそれ以前の場合に近似し、¹⁴C年代もAD1100年前後の値となった。

炉床はクロボク質の厚い土層をベースに長さ2.8m・幅1.0mほどの浅い溝をつくって炭灰混り上を充填したただけの簡易なものであるが、遺構表面は既に失われて操業時でのプランは正確でない。

湯溜りの窪みは通例両端に造られて亜鈴状をなすのに対し本例は北側の一方にのみ造られていて、炉心あたりに炉底滓がほぼ原位置と思われる状態で残存した。

排滓は湯溜り部を中心に同心半円状に、特に流出滓はその大きさを異にする分布で4～5mに分布した。合計約300kgのこれら排滓や炉床部も含めて着磁性の遺物は殆どなく、意図的に選別

された形跡が窺われる。

炉壁材用土には粗砂～細礫が目立って多く脆いが、ワラとみられるスサが混入されていて耐火性は良いがスラグ生成には不利との分析指摘もなされた。このような状況は奥出雲の中世たたら跡の成果に類似している。また炉床部にそのまま倒壊したとみられる炉壁の大破片から炉体の推定復元を試みたところ、炉体は外寸で1.0×0.6m長円形で、高さは70～80cmほどが予想された。そして送風は炉床中心部へ向けた木呂孔1つ1つが独立したものであって、北側小川へのみ滓を流出させたとみられる。勿論送風装置の置かれたと思われる構造等も削り失われていて想像の域を出ないが、例えば皮鞆³を並べた情景が浮かぶ。

(杉原)

註

- ※1 a 清水欣吾・佐藤 豊：「製鉄址出土鉄滓及び炉壁材等の調査」『下人仙了遺跡』横田町教育委員会 1985
- b 清水欣吾・佐藤 豊：「出土鉄滓等の調査結果」『鐘免大池跡』横田町教育委員会 1993
- c 佐藤 豊：「出土鉄滓等の調査」『日ヤケたたら跡・芝原遺跡』仁多町教育委員会 1994
- d 村川義行：「上垣内たたら跡および茶屋の廻遺跡出土鉄滓等の分析報告書」『上垣内たたら跡（他2遺跡）』木次町教育委員会 1999
- e 和鋼博物館（村川義行）：「枯木ヶ谷跡遺跡出土遺物の科学分析調査報告書」『枯木ヶ谷跡遺跡』木次町教育委員会 2000
- ※2 スサ入りの炉壁片は、かつて『かなやご銅跡調査報告書』横田町教育委員会1983で指摘して以来、中世及びそれ以前にのみ限定され、近世たたらの場合には全く検出されていない。またスサ入りの場合の炉材粘土は概してAl₂O₃比の高い上が用いられている点については佐藤 豊氏が指摘されている。
- ※3 杉原清：『日ヤケたたら跡・芝原遺跡』仁多町教育委員会1994の芝原鍛冶遺構についての項（P37…2）

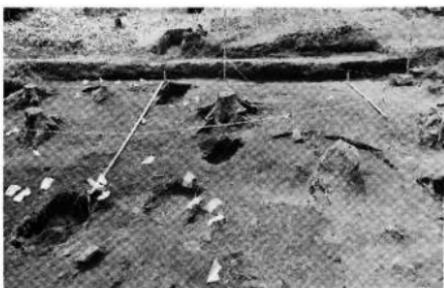
調査区遠景



トレンチ調査

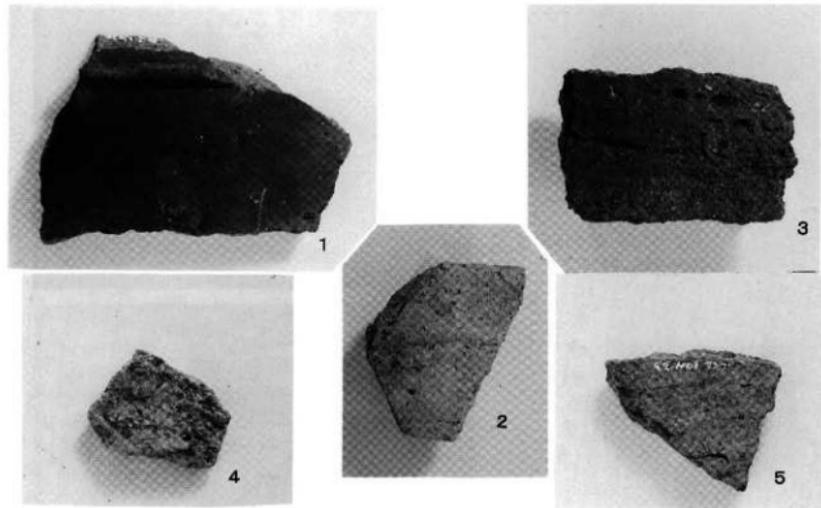


A区 遺物出土状況

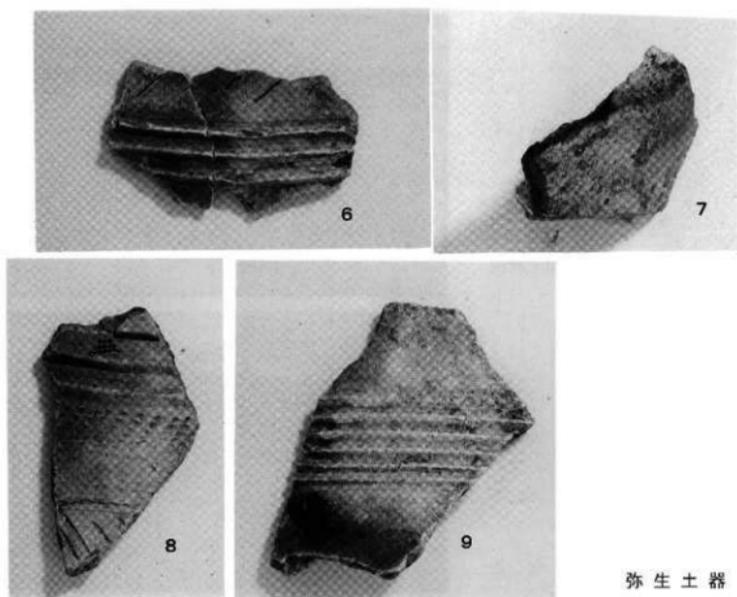


A区 全 景

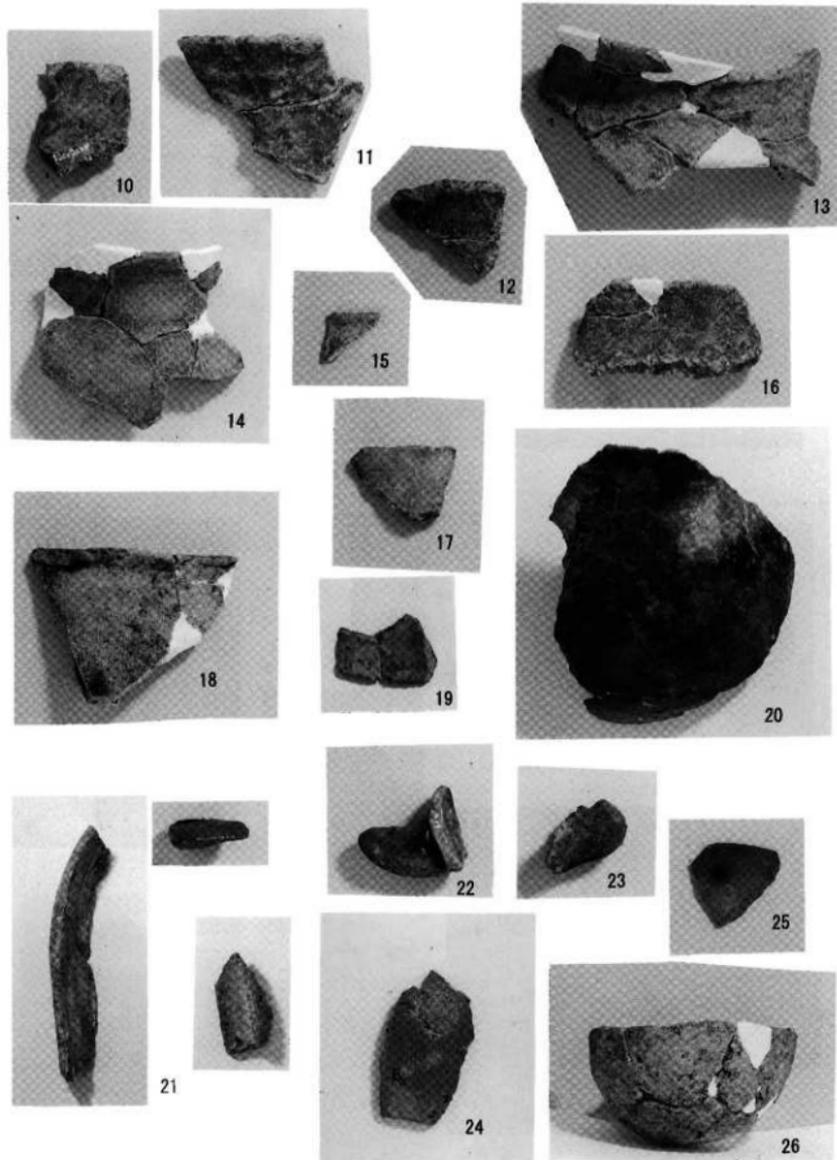




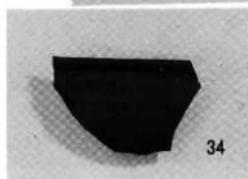
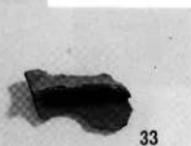
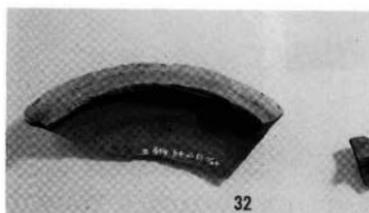
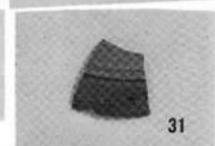
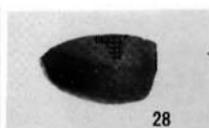
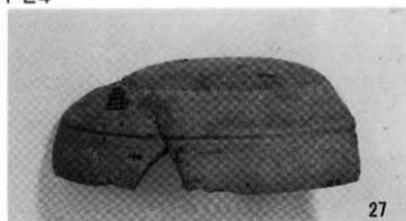
縄文土器



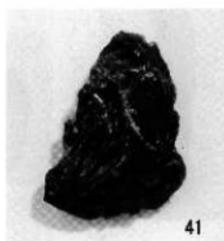
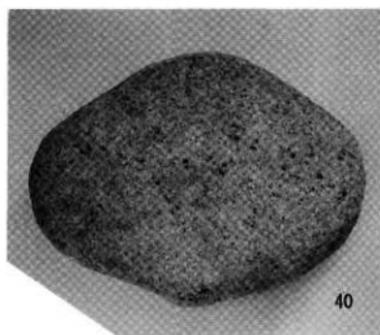
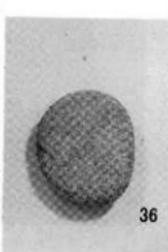
弥生土器



土師器



須惠器



石礫器



表土除去



鉄滓散布面検出



大型炉壁片の倒れ込み



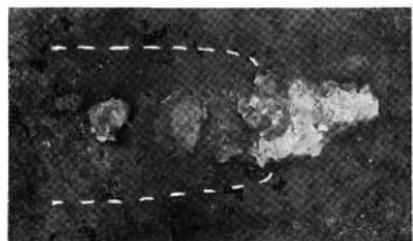
炉壁片 No. 4



炉壁片 No. 5



炉壁片左から No. 3. No. 2. No. 1

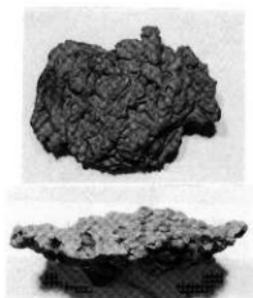


炉床部と炉底滓



炉床部と横断面

B区 発掘状況



分析試料 No.2



図7-1



図7 (分析試料 No.4)



分析試料 No.3



分析試料 No.1

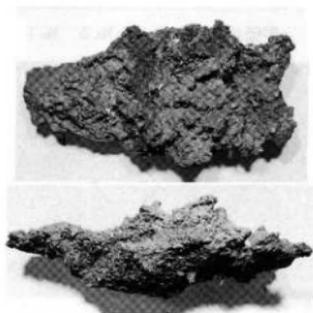
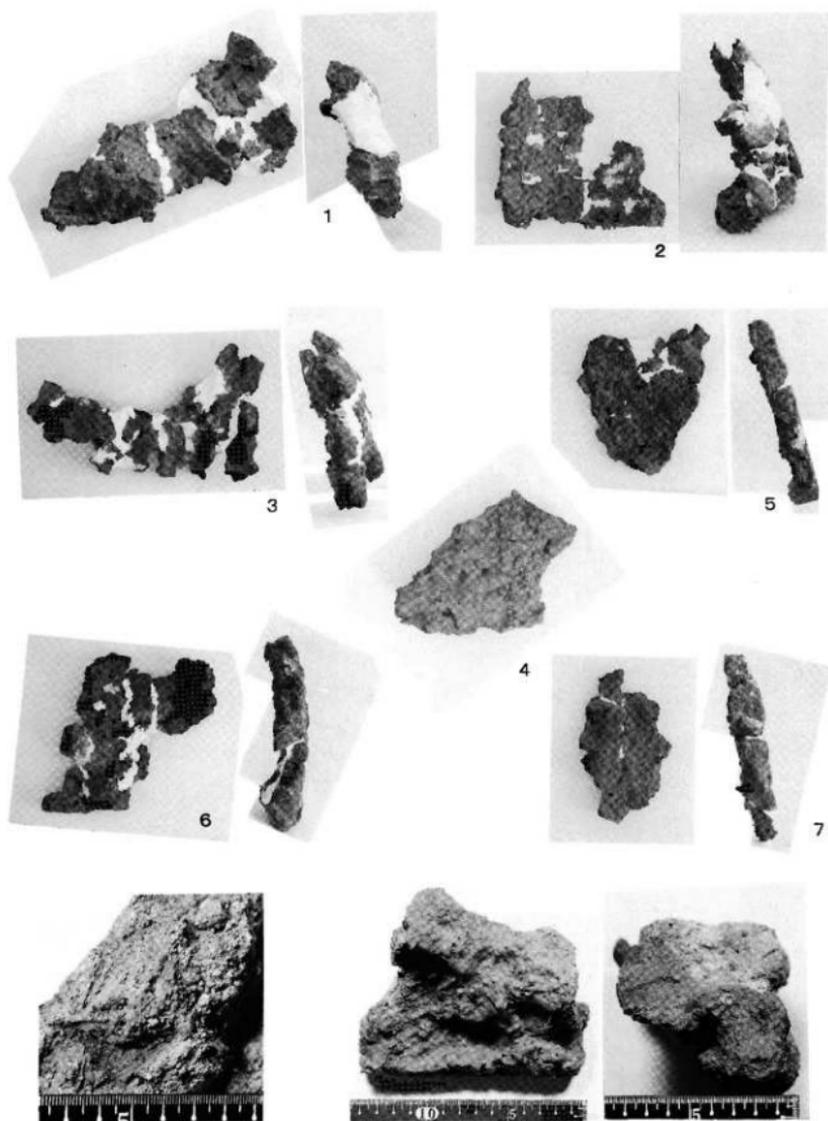


図8-1



図8-2

出土遺物 (流出滓・炉底滓)



スサ入り

分析試料5

出土遺物（炉壁片 図9）

シベ石遺跡

所在地 仁多町大字佐白1183・1184・1186・1187 (山林)
調査面積 250㎡ (内 発掘226㎡)
調査期間 平成12年5月19日～6月14日

とき ほとけ 時 仏 遺 跡

所在地 仁多町大字佐白1182・1187・1188 (山林)
調査面積 621㎡ (内 発掘275㎡)
調査期間 平成12年5月19日～6月14日

1. はじめに

尾原ダム建設関連で計画された町道八代三沢線付け替え予定域にあたり、事前に指摘された72地点「平坦面、古墳状の高まり」となっている地点である。この地点は斐伊川がヘアピン状に強く折れ曲がって流れる瀬先きにあたる丘陵端部に位置し、川に面した南西斜面は岩質の崖地形である。

平成11年度の分布調査に際し、地形測量とトレンチにより性格を把握した。その結果、削平段のある丘端部地点を「シベ石遺跡」、尾根基部に近いマウンド部地点を「時仏遺跡」とした。

引き続き本年度に本発掘調査を実施した。

2. 調査の概要

斐伊川の流れが突き当たって強く屈曲する位置に突出する低丘陵で、丘端から約120mの陵上を中心に調査を行った。

前年の分布調査に際し地形測量を行いトレンチによって丘端の小削平段とそれに続く尾根上の小路があり、さらに尾根基部に近くやや広くなった位置にある小さいマウンドを確認していた。

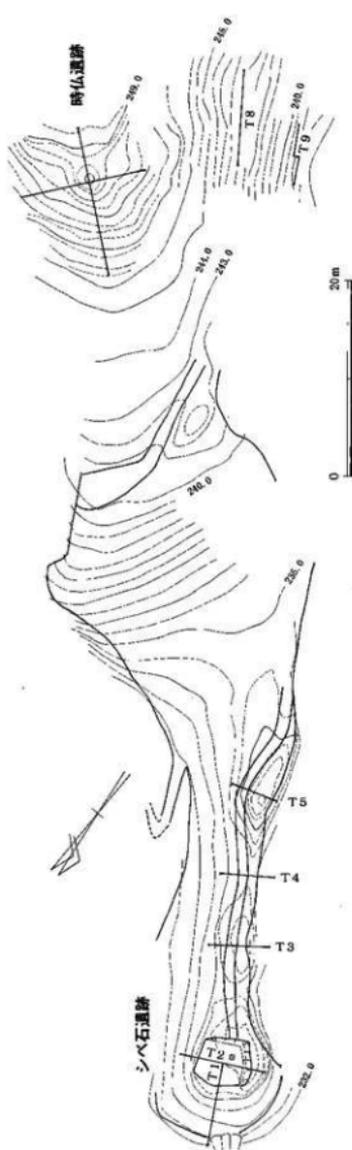
これによって、丘端部削平段の約190㎡部分と尾根基部のマウンド部約220㎡については全面発掘を行い、尾根沿いの小路についてはトレンチによって確認するに止めた。またマウンド部については、その南西急斜面についても試掘を行って横穴墓の存否を検討した。

A. シベ石遺跡

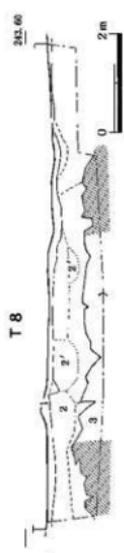
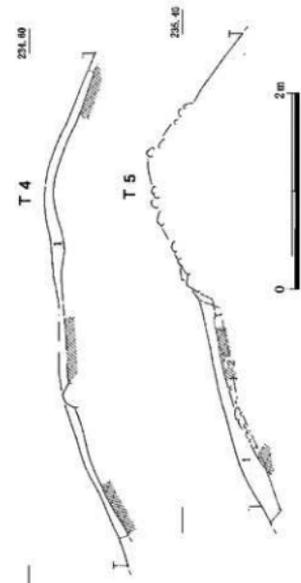
1) 遺構

斐伊川からの比高約40mの張り出し尾根自体が花崗斑岩様の岩質で、表面に近くやや風化して脆くなっているところである。北の丘端のわずかに高まる所を削り出して平面とした遺構で略方形をなしている。この削平面の西側は地山から約20cm切り下げた法面が破砕礫を積んだように直線状をなし、南側は尾根路から一段下るように切り出している。北側は緩やかな自然斜面へ続く。この下方には削平面等は存在しなかった。北東隅は石礫を止せめとしてわずかに埋め上げて平面を確保している。削平面の大きさは南北4.4m、東西4.8mを測る。この平面の中央から南西寄りに75×90cmの方形で高さ約10cmの台状地形を削り残して、その岩質の亀裂から敷石基壇と見まがう状態としている。これは近隣の通例から小祠の置かれていた基壇と判断され、当初川に面した物見曲輪かとしたが誤りであることが判った。なおこれに接して工事用基準点がコンクリートで造標されているが、この基壇遺構はかろうじて外れていた。なお遺物等は何らも検出し得なかった。

またこの遺構から狭い尾根上を南へ小路がわずかに削り出して造られており、この路は約30m先方から等高線にそって南西斜面へ向かう。これはさらに谷間に下降し、南西約400mの麓川添いの集落へ続くものとみられる。



- 1 表層 (黒砂多)
- 2 深入り 崖山土・ブロッケン入路帯 ± 10Y6/2 オリソープ灰
~5Y6/2 灰オリーブ
- 3* H (礫砂) 5Y5/1 (灰)
- 3 崖山心上 (風化凝結花崗岩) 10YR5/2 (に白い黄砂)
~10Y6/1 (灰)



- 1 表層・表土 10YR4/1 (純灰)
- 2 崖山心上 岩盤質 10YR5/2 (灰黄砂)

図 1. シベ石遺跡・時仏遺跡実測図

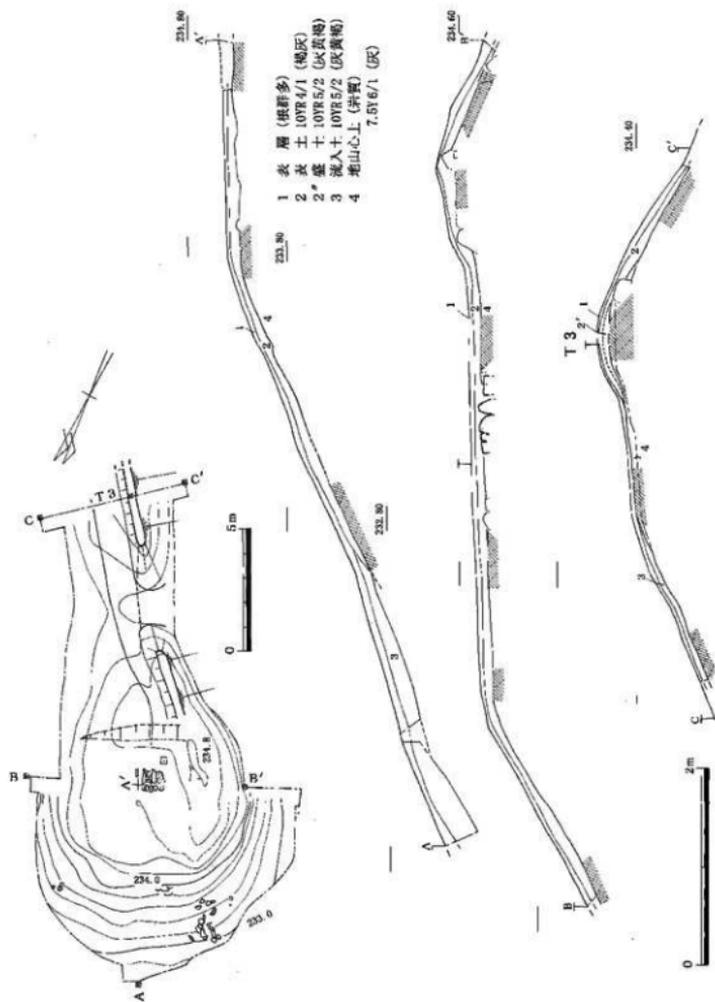


図2. シベ石遺跡 調査前地形図・土層図

2) まとめ—文献の探索から—

該地の小字地名は「シベ石」であり、明治22年編成の字切地図に記載されている。「シベ石」は「滑り石」の転訛であろう。とすると当地方でのナメラ（滑ら）即ち岩盤質と同じ意味に理解され、立地の地盤を示している。

小祠の基壇とするならば、これに対応する社祠等を示すものはないかと探索した。『仁多町誌』⁸⁾

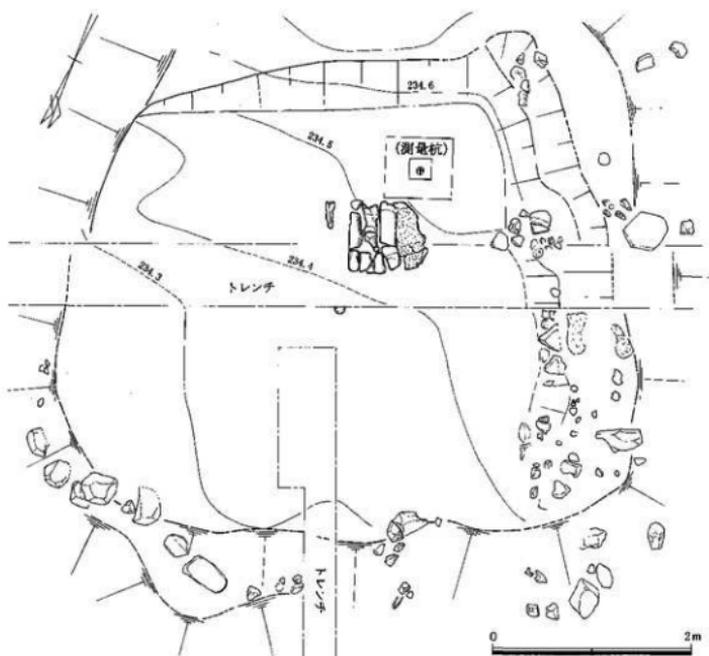


図3. シベ石遺跡・主部平面図

には記載がないが、『仁多郡誌』²⁹⁾に収録されている旧村別古絵図によると該当地に「大山権現」と明記し、『雲陽誌』³⁰⁾にも記載があった。この村別絵図の原本は藩制下のもので、明治期に仁多郡役所に引き継がれた文書の一部と思われるが、その後昭和20年三成大火によって消失しており現存しない。従って絵図製作年代は特定不能である。『雲陽誌』は「大山権現。大山祇命なり、鎮座年代詳ならず、社三尺四方、祭日四月廿四日なり」と記録している。

ともあれ、これによって江戸時代中ばには前布施村で記っていた大山社の跡と判明した。上手・下手に集落を一望するこの社祠は北に面し、大きさは90cm(3尺)四方の記述のとおりであることが判った。

B. 時伝遺跡

1) 調査方法

フラットな尾根上のマウンド部を中心に約20×20mとそれに続く南西の急斜面15×15mほどの範囲を対象として伐採ののち地形測量を行い、マウンド部はトレンチののち全面を、斜面はマウンド頂部から約6mと約10m下方にトレンチを設定して発掘した。この斜面の試掘トレンチは横

穴墓の存否を確認するためである。

2) 遺構

マウンドは、尾根下方方向は約3.5mあたりまで地山を整形して自然斜面に摺り付け、尾根上方方向へは2.5mに地山心上に達する周溝を掘って整形し、マウンド頂部には表層下厚さ20cmほどの盛土がなされている。マウンドの形は6×7mのやや歪な円形をなす。高さは後背部周溝底から60cm、前方からは約1.1mである。マウンド頂面は直径1.5mほどの円形の平坦面であるが、掘込みや配石等の何らの遺構もなかった。周溝部分についても流入土のみで土器片や焚火の痕跡等も全くない。

以上のように、このマウンドが小規模な古墳でもなく、また盛土上における祭祀の痕跡も見当たらないことから、これを後背マウンドとして営まれた横穴墓の存在する可能性があるとする、

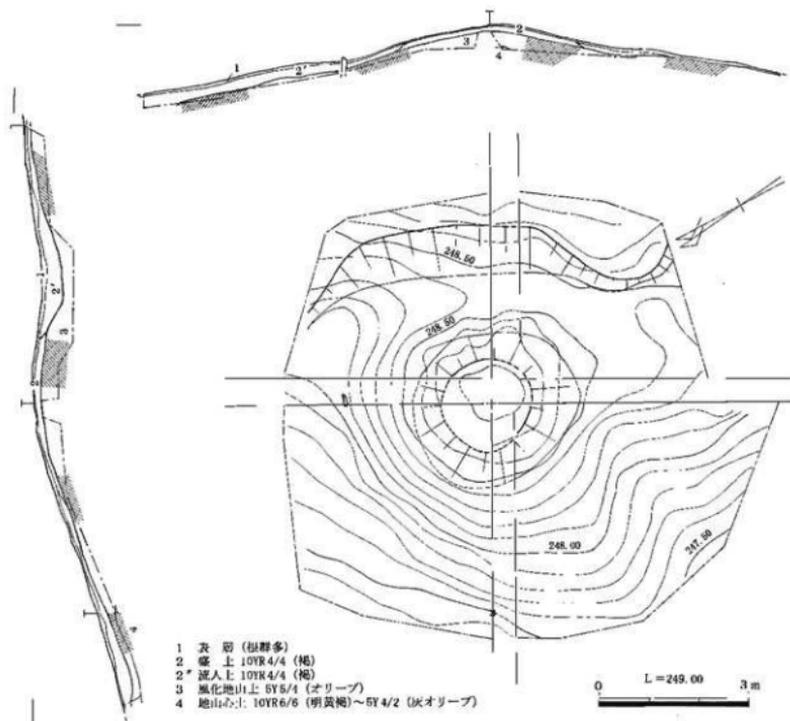


図4. 時仏遺跡・実測図

地形や方位からして南西の急斜面についての精査が必要となった。

この斜面は35°以上の急勾配地で、ここに等高線に沿った2本のトレンチによって掘削土の掻き出し或いは前庭部の掘込み等の所見はないか検討した。しかし、脆い地質の崖状をなす自然地形のままであり風化地山心土にはやや斜行する大亀裂部や岩屑の曹崩れ部が認められるのみであった。

3) まとめ

以上の結果からは当該マウンドの性格は把握出来なかった。この間において施工詳細計画図が示され、該地はその工事施工範囲からすくなくとも35m以上離れた区域外にあたることが判った。これによって当該マウンドについての発掘調査は今回性格不明のまま終え、今後の機会に委ねることとした。

3. 結 び

二つの遺跡が少し離れて存在したこの地点は、前布施地区を上流部と下流部に二分する中間点にあたる岩脈質の出尾根上にあたる。

シベ石遺跡はその突端上につくられた小社地で、岩質地山を削り出した祠の基壇であった。遺物はなかったが古文書との一致から、近世に集落の祀る大山社の跡と判断した。

また、尾根基部に近い位置の小マウンドは半ば周溝を掘り巡らせて若干の盛土を行ったものである。しかしマウンド上や周辺には何らの遺構もなく、また直近の急な南西斜面についても横穴墓の存否を検討するため試掘したが、何らも検出し得なかった。したがって、このマウンドが横穴墓の後背墳丘として造られたものとの見方も薄れた。また、後世の祭祀のための小塚であるのかも知れないが決め手がない。今のところ後考にまつほかはない。なお、現地は施工計画範囲から外れて残存する部位にあたることから消滅は免れるものと思われる。

(杉原)

註

- ※1 『仁多町誌』仁多町 平成8年3月29日発行
- ※2 『仁多郡誌』仁多郡役所 大正8年刊
- ※3 『雲陽誌』日本地誌大系復刻本 雄山閣



調査前



遺構検出



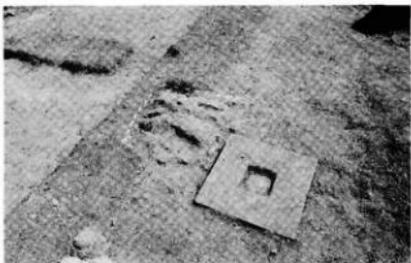
T4と尾根路



先端部



T4



地山削出し基壇

シベ石遺跡

PL2



マウンド部 調査前



マウンド部 完掘



頂部トレンチ



T 8
(西下方斜面トレンチ)

時 仏 遺 跡

とき ぼとけ やま
時仏山横穴墓

所在地	仁多町大字佐白1179 (山林)
調査面積	対象409㎡ (内 発掘40㎡)
調査指導	西尾克己 (島根県埋蔵文化財調査センター)
人骨鑑定	井上晃孝
調査期間	平成12年10月3日～10月11日
調査協力	まるなか建設 (株)

1. 発見と経緯

この遺跡は、尾原ダム関連町道八代三沢線付け替え工事の法面掘削の作業中に発見された横穴墓である。この地点は斐伊川を眼下にする丘陵の頂部からわずかに下った比高80mほどの丘腹に位置する。小字地名からこの遺跡名称を「時仏山横穴墓」とした。

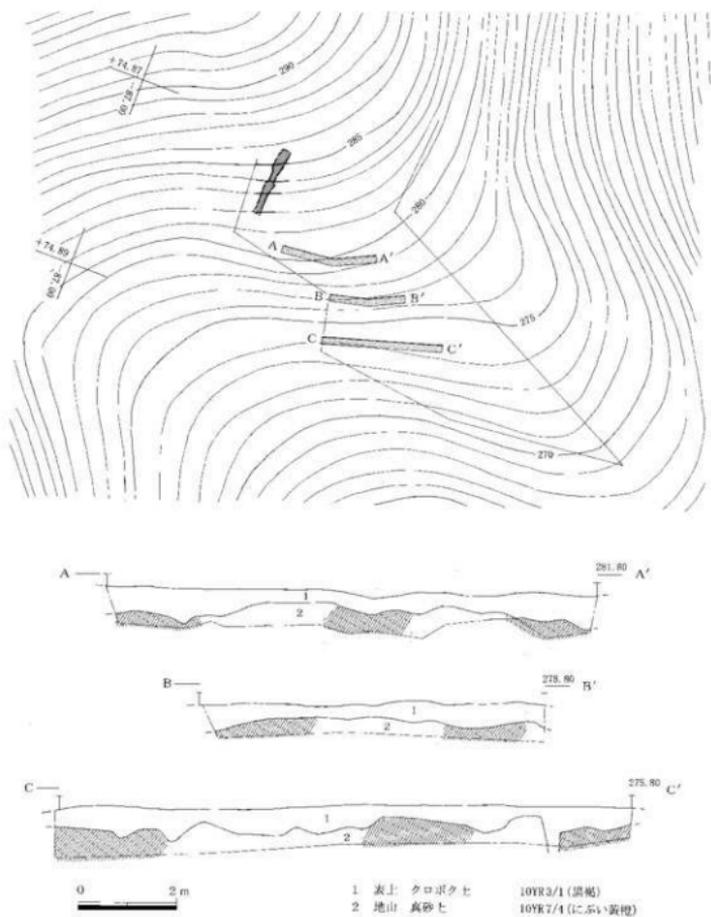


図1. 地形図・トレンチ図

調査に至る経過は次のようである。

平成12年9月27日	午後、掘削作業中、地面に穴が開いて発見 即時届出 即日県教委西尾・町教委杉原が現地で横穴墓と確認
28日～	工事者において当該地付近の対応を行う
10月2日	建設省・県教委・町教委で対応を協議 緊急発掘調査と付近の未施工範囲の分布調査を仁多町教委が行なう こととする
3日	10月末日までを目途に現地調査を開始
11日	該当は1穴のみであることを確認し、埋葬人骨の取り上げを行って 調査を終了する

発見時の状況は工事中に玄室奥部の天井部分が落盤開口したもので、玄室内には崩落した土が約50cm積もっており、その隙間に脊椎骨片が若干みられて埋葬人骨の残存も判った。そして前庭部はかろうじて施工ラインから外れて残存していることも判った。この横穴は風化花崗岩（貞砂山）の地山に掘り込んで造られている。

2. 遺 構

この横穴墓の主軸は真東に開口するもので、全長約8mの遺構である。

1) 玄室・羨道部

玄室は幅1.0m・長さ2.2m・隅角は丸味で、奥壁は上端で15cmほど内傾する。高さは奥壁で1.1m、中央部では崩落のため棟は明確でないが約1.2mで断面形はふくらみのある三角テント形をなす。また、玄門部は剥落のため不明である。壁面軒線は認められない。

羨道部は玄室の北壁沿いに延長してつくられる片袖様式で、長さ1.2m・幅は玄門部で0.75m・羨門部では0.52mの奥に広い形をなす。高さは大部分剥落のため明確ではないが、0.7m又はそれより若干高い。

床面は横断面で浅いU字形をなし、中央部が若干深くなっている。さらに縦断面では玄室から羨道へかけて緩く一様な勾配で前へ下るもので、ほぼ3.5%の勾配となっていて排水を思わせるが、その削り出し面はやや粗雑である。玄室の床面には2～4cm厚さの貞砂土を敷き均して埋葬が行われていた。また羨門部には床面にのみ閉塞の溝がつくられている。

2) 前庭部

前庭は幅が狭く、墓道と呼ぶのがふさわしいような造りで、横断面はU字形に凹むものである。前庭長は地山面で3.7mを測るがその先端は表土層中に達している。羨道前方1.7mまでは緩く下降し、羨門部近くでは幅0.7m強で漸次狭くなり0.4mとなるが、その先方はやや急勾配に下り、

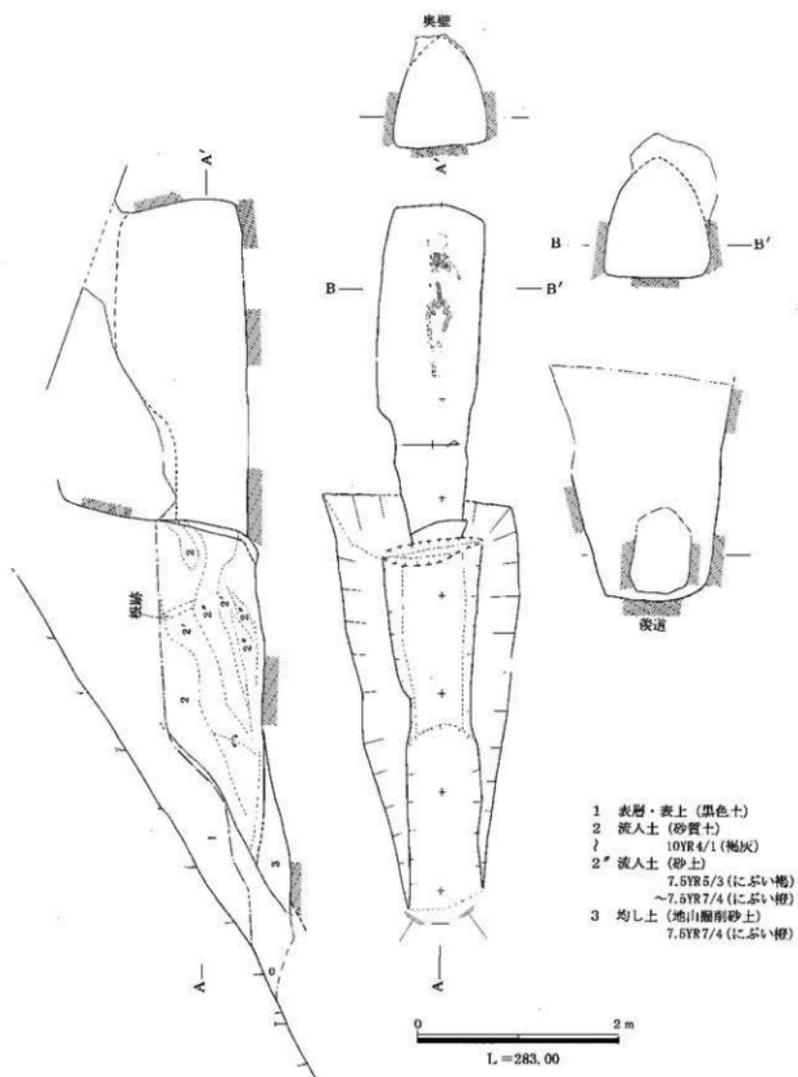


図2. 遺構図

幅は約0.7mである。この前方急斜部分は掘削土で均らされていて、埋葬時にはほぼ水平な面として使用されていたとみられる。

羨門部は、高さ2.1m・上幅1.8mの壁面を削り出してその下端中央に開口している。このとき前庭奥端は羨道端の床の高さから閉塞溝部で6.5cmの落差で段落ちとなっている。

3) 埋葬状況と遺物の検出

玄室内には1体の埋葬人骨があったが残存状況はあまり良くなかった。埋葬は頭位を奥にして玄室ほぼ中央に伏臥伸展位で置かれている。頭部は奥壁から約35cmのあたりを中心に直径約20cm円形に黒褐色腐朽土状となっており、奥から1mの腐朽化した寛骨あたりまで椎骨列が推定された。しかし、同じく70cmあたりは発見時に攪乱されて乱れていた。下肢の長管骨は両端部が腐朽し骨体部のみが明らかであった。奥壁から1.8m以遠の足端部は消失している。

土器等の供献は玄室内や羨道部等にも全く見当たらなかった。

埋葬人骨の頭部を中心に玉類が散乱していた。

勾玉	6ヶ	メノウ製
切子玉	4ヶ	水晶製
小玉	46ヶ	ガラス製

である。これらの玉類は骨体とほぼ同じレベルで上面にあるものと、頸椎骨等を取り上げた下にあるものがあったが、無秩序な散乱であり連をなす部分は見当たらなかった。また、小玉の一部や破片は床土を篩にかけて検出した。

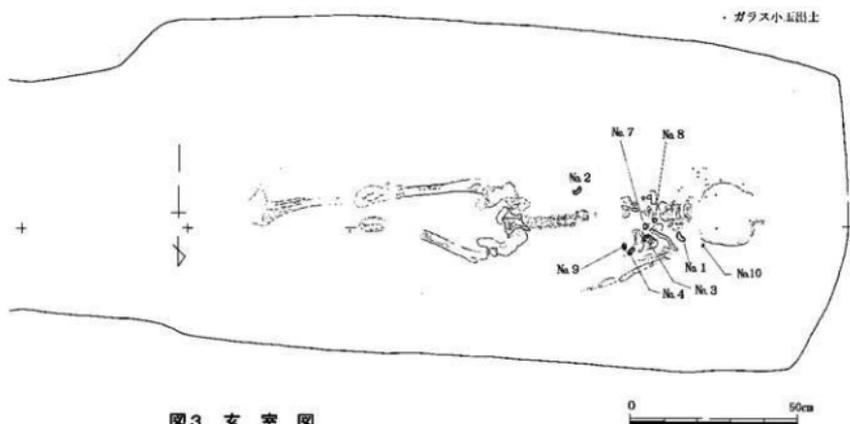


図3. 玄室図

3. 遺物

1) 人骨

埋葬人骨は1体のみである。保存状態は概して良くなく頭～右胸部と寛骨付近がややよく残っていた。埋葬後の攪乱はなく、うつぶせに葬られていた。この人骨については井上晃孝先生に鑑定を願ひ別項のように報告された。

それによると熟年(40～50才代)女性、身長約155cmである。その他所見として骨髄炎の疑いや骨粗鬆症が指摘された。

2) 玉類について

- (1) 勾玉は6点すべてメノウ製で、角ばって屈曲するいわゆる“コ”字形の製作である。玉材は部分的色むらがあり、研磨はやや粗粒で研面に条痕を残すものが多い。玉体断面形はやや多角形気味でもある。穿孔方向は左右区々で、孔径は入口側で2.5～3mm・奥では1.0～1.5mmであり、いずれも皿状の受け孔を穿つ。各個の長さは3.2～3.3cm・重さはおよそ7.2g前後であるが3.8cm・12.0gと大形のもの(No.4)が1点ある。

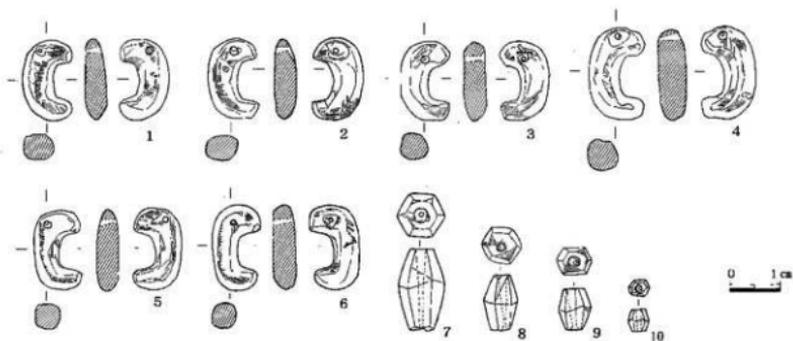


図4-1. 勾玉・切子玉

- (2) 切子玉は4点ありすべて水晶製である。大きさは長さ3.4cm・重さ12.10gの人形品から0.9cm・0.65gの極小形品までである。最大径では1.9～0.85cmまでである。径最大部の稜は正しく直線状にはならないが研磨の透明度は良い。穿孔は勾玉の場合と同じく一端に受け穴を穿っている。

- (3) 小玉^註は46個すべてガラス製である。内3個は破損片で図示していない。色は、応、青緑色・空色・青色・濃紺～藍色・くすんだ青色の5区分としたがいずれも青色系である。形状

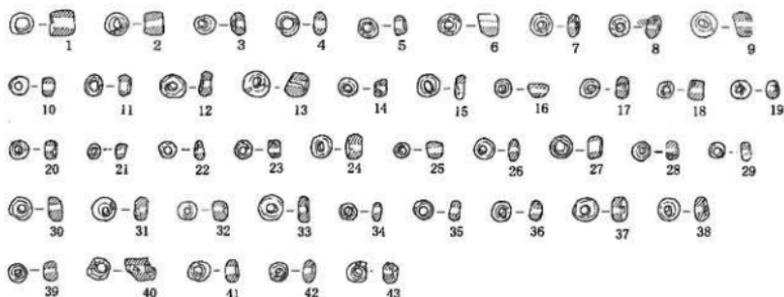


図4-2. ガラス小玉

0 1 cm

は外形・孔径ともに正円のもの少なく、また厚さも片寄るものが多い。顕微鏡で見るとすべてひき技法で製作されたものようで、内包する細気泡が孔に平行に列をなすものが認められる。また断面は再加熱して曲面をつくり、側面には条痕のつくもの(図版No.38)や粗磨きのため大気孔の縁がめくれているものも見られる。1個だけは斜めに切断したままに近いもの(図版No.40)もあった。

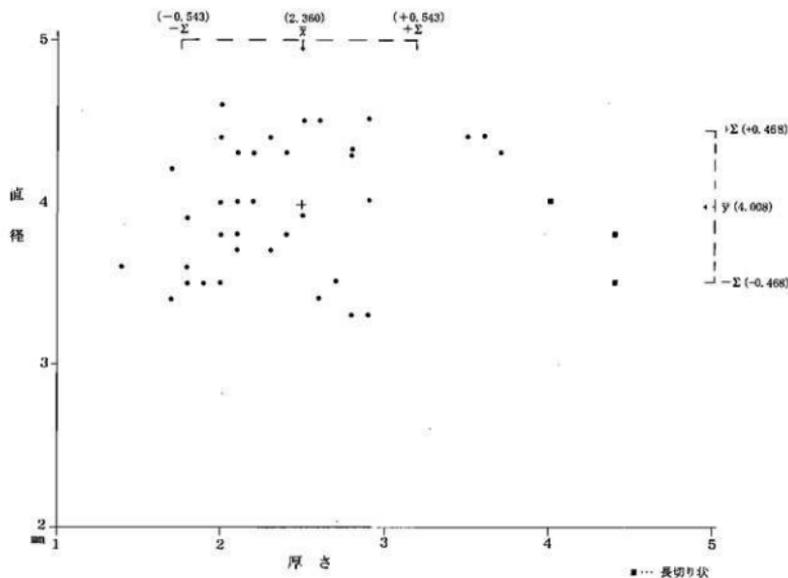


図5. ガラス小玉計測分布 (n=42)

表 出土ガラス玉計測値

図No	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重さ(mg)	気泡	技法	写点	備	考
1	3.7×3.9	4.0~4.7	2.9×2.6	120	細気泡列	ひき	○		取り上げNo.4
2	4.3×4.2	3.0~2.6	1.9×1.6	100	不明				取り上げNo.5
3	4.1×3.8	2.9	1.8×1.5	90	細気泡多				取り上げNo.6
4	4.8×4.4	2.0	2.0×2.1	50	細気泡少				取り上げNo.7
5	4.0(正円)	1.9~2.2	1.5(正円)	40	気泡少				"
6	4.3(正円)	3.9~3.5	1.4×1.3	100	わかりにくい				取り上げNo.8
7	4.3×4.2	2.0~2.2	1.6(正円)	60	大・小気泡少				取り上げNo.9
8	4.3(正円)	2.4	1.3(正円)	70	大気泡少			外面すじ	取り上げNo.10
9	5.0×5.1	2.7~2.8	1.4×1.7	120	細気泡やや多			めくれ	"
10	3.7×3.8	2.4~2.1	1.6×1.4	50	細・中気泡多			表面粗	"
11	4.0×3.8	1.8	1.9×1.7	40	細気泡列			外面すじ	取り上げNo.11
12	4.7×4.0	2.4~2.1	1.6(正円)	80	細気泡列			○ 外面すじ,めくれ	取り上げNo.12
13	4.4(正円)	3.6~3.4	2.1×1.4	140	細気泡列			めくれ	取り上げNo.13
14	3.7×3.5	1.4	1.3(正円)	50	細気泡少				取り上げNo.14
15	4.0×4.3	1.8~1.6	2.0×1.8	40	細気泡列				取り上げNo.15
16	3.5(正円)	4.4	1.3(正円)	70	細気泡列			パイプ斜め切り	取り上げNo.16
17	3.7×3.5	1.8	1.4(正円)	50	気泡少				取り上げNo.17
18	3.4×3.2	3.0~2.8	1.3×1.2	60	細気泡列				取り上げNo.18
19	4.0(正円)	2.1~2.3	1.4(正円)	80	不明				取り上げNo.19
20	3.8(正円)	2.3~2.6	1.2×1.5	50	大・細気泡少				以下篩中出上
21	2.9(正円)	2.1~2.2	1.1×1.2	20	気泡少				
22	3.4×3.6	2.0	1.2×1.4	30	細気泡少				
23	3.2×3.5	2.7~2.6	1.2(正円)	30	不明				
24	4.3×4.6	3.8~3.4	1.7×1.5	120	不明				
25	3.2×3.3	2.7~3.0	1.3(正円)	40	細気泡少				
26	3.9(正円)	1.5	1.6(正円)	60	大気泡少,小気泡列				
27	4.3(正円)	2.0~2.3	2.0×1.7	80	不明				
28	3.4(正円)	1.7	1.3(正円)	40	不明			表面あばた	
29	3.5(円)	1.5~2.3	1.5(円)	40	細気泡多				
30	4.5(円)	2.5	1.6(円)	90	細気泡たてすじ				
31	4.3(円)	3.2~2.4	1.6×1.5	90	気泡少,たてに列				
32	3.5(円)	2.7	1.4(円)	40	細気泡極少			○ 外面あばた	
33	4.4(正円)	2.0~1.9	1.6(正円)	70	小気泡少			条痕あり	
34	3.5(円)	1.7~1.9	1.6(円)	40	外面ややあばた				
35	4.0(円)	2.0	1.7(円)	40	気泡少,列				
36	3.7(円)	2.1	1.6×1.5	30	気泡少			たてすじ	
37	5.0(円)	2.7~3.1	1.8×1.7	100	細気泡列				
38	4.5(正円)	3.0~2.8	1.6(正円)	80	大気泡あり			○ 外面すじ,めくれ	
39	3.8(正円)	2.0~2.2	1.4(正円)	50	細気泡あり				
40	4.0(円)	4.0	1.7(円)	120	細気泡あり			○ 折りのまま 斜め切り	
41	3.9(円)	2.5	1.5(円)	60	細気泡列			みがき	
42	3.8(円)	2.0~2.1	1.6(円)	30	気泡少			外面みがき	
43	5.0×4.0	2.3~2.8	1.5(正円)	110	細気泡少			穴にめくれ(不整円)	

小玉計測値集計

	直径mm	厚さmm	孔径mm	重さmg
平均値	3.97	2.48	1.56	66.74
標準偏差値±	0.46	0.71	0.26	30.55
蓋然誤差±	0.31	0.48	0.18	20.61

これら小玉を計測値(表・グラフ)からみると直径と厚さには相関は見られず、平均値は直径4.0mm、厚さ2.5mmであり、その分布幅は標準偏差値で直径3.50~4.45mm、直径より厚い例外品3点を除くと1.8~2.9mmである。また孔径は1.38~1.82mmで平均は1.56mmである。重さは主に厚さに関わり約44~97mgで平均は67mgであった。

これらガラス玉についての化学分析による組成の検討は行っていないが、色調等の類似から丸子山古墳³²の場合のようにCuを含むソーダ石灰ガラスではなからうか。

4. 付近の分布確認

この横穴墓の発見位置が施工掘削計画のラインすれすれの点であることから、以後の施工範囲を中心に同様の横穴墓等が存在するか否かを併せて検討した。

先ず北東に向かって大きく下降する支尾根の東斜面についてみると、上部にあたる当該横穴墓と同レベルには地形に余裕がなく、北にずれながら落差3m毎に3本、合計35mのトレンチを等高線沿いに設けて地山への加工痕の有無を観察した。その結果はいずれも自然地形のままの斜面であった。なお、さらに下方については谷間に近く横穴墓の存在する可能性はないと思われたので試掘は行わなかった。

次に、谷の奥まるあたり当該横穴墓の南斜面については、非施工範囲で現状の林地のままであることから、処々に於いてボーリングステッキによる予備踏査に止めた。その結果は当該横穴墓より南へ6m・10m・15mの約2~4m高い3地点に表土が大きく落ち込む部分があることが判った。そしてこれが一連の未発見横穴墓群である可能性を指摘するにとどめた。

5. むすび

この時仏山横穴墓は南方の尾根上方の位置から数穴続く横穴墓群の下端に位置するものかとも思われるが、これから北下方斜面へは続かなかった。

この横穴墓は断面三角テント形妻入りの様式で、玄室長2.2mを測る、当地に普通にみられる様式・規模³³と云えよう。しかし、主軸方向が東方向であることは通例とやや異なるもので、これは地形の制約によるものであろうか。

被葬者は熟年女性1人とされたが、その埋葬については奇異な点が多い。玄室奥を頭位に玄室ほぼ中央に伏臥伸展位であった。また通例は少なくとも数点以上の副葬された土器等があるのだが、この横穴墓には玄室内は勿論、前庭部にも供献土器等は全く無かった。そして被葬者は勾玉6個をはじめ、切子玉4個・ガラス小玉46個と、その玉類の数において近隣の他例³⁴より突出している。

造営の年代については何らの手がかりもない。しかし、前庭・墓道の拡がらないことからすると当地方ではやや古段階かとも思われるが、明確ではない。ましてや、伏臥位の埋葬は管見の限り前例を知らず、異常な埋葬方法としか言いようがない。そしてこれが何を物語るのかも計り

知れない。今後の事例をまっけて再検討を要するものである。

(杉原)

註

※1 観察にあたって次の文献を参考とした。

三浦 清・渡辺貞幸：「山陰地方における弥生墳丘出土の玉類について—西谷3号墳出土品を中心に—」『島根考古学会誌』第5集, 1988

藤田 等：『弥生時代ガラスの研究』名著出版 1994

※2 澤田順弘：「丸子山古墳出土玉類の化学組織」『武者山遺跡・丸子山古墳群』仁多町教育委員会 1995

※3 「第3～6回横穴墓検討会資料」同研究会（研究会レジメ）1996・1997の集成資料など

※4 『仁多町・伊賀武井横穴墓』仁多町教育委員会（近刊予定）

〔東下谷横穴墓〕三刀屋町教育委員会1984

※5 井上晃孝先生の教示による

島根県埋蔵文化財調査センターの調査に関わる、島根県玉湯町所在岩屋古墳群5号墳第1主体の埋葬人骨3体のうち最終次である男性骨の上半身が仰伏逆転しており、半崩乱時に人為的に反転されたのではなかろうかと指摘された事例がある。（報告書近刊予定）



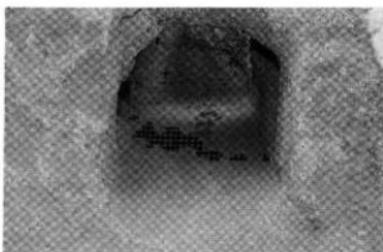
遠景



発見時状況



前庭部 土層推積状況



玄室内状況



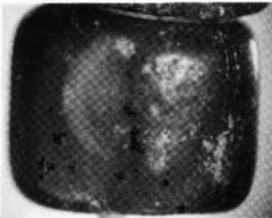
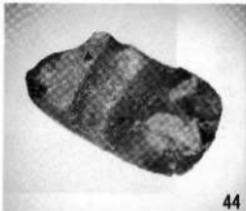
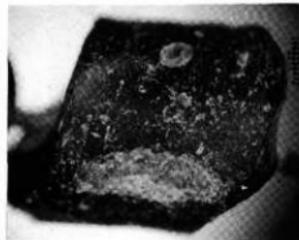
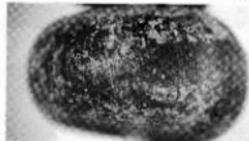
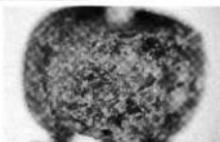
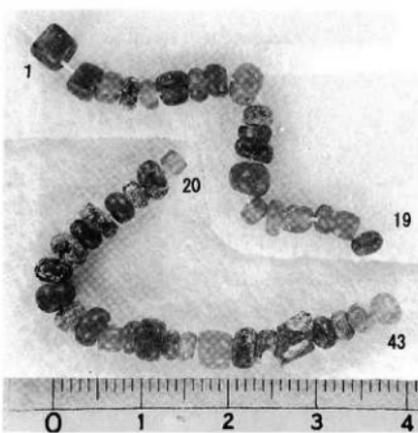
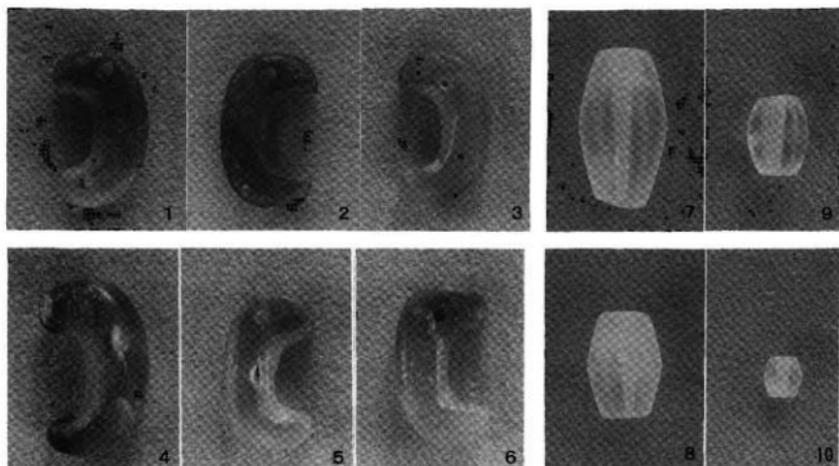
埋葬状況



完掘状況



人骨取上げ



40

玉類とその拡大写真

1

付 編

I 仁多町時仏山横穴墓・殿ヶ迫横穴墓群出土人骨

元鳥取大学医学部法医学研究室

井上晃孝

II 亀ヶ谷遺跡・殿ヶ迫横穴墓群より発掘された 木炭の¹⁴C年代測定

大阪府立大学先端科学研究所

アイソトープ総合研究センター

川野瑛子・柴田せつ子

III 亀ヶ谷遺跡出土鉄滓・炉壁片の分析調査

安来市体育文化振興財団和銅博物館

村川義行

付編 I

仁多町時仏山横穴墓・殿ヶ迫横穴墓群出土人骨

井上 晃 孝

A. 時仏山横穴墓

時仏山横穴墓は島根県仁多郡仁多町前布施地内に位置する。

本横穴墓はたまたま尾原ダム関連工事作業中に発見されたが、横穴墓群をなしていたかどうかは不詳である。

本横穴墓の玄室中央部に、被葬者1体が埋葬されていた。

古墳時代の埋葬法(姿態)はほとんど仰臥伸展位であるが、今回出土した人骨はこれまで全く報告例をみない、背面を上面にした伏臥伸展位であることが確認された。

以下、出土人骨の概要を報告する。

1. 骨の遺残性

本屍骨の胸部部は、天井の崩落によって埋没し消失しており、骨の遺残性はやや不良であった。

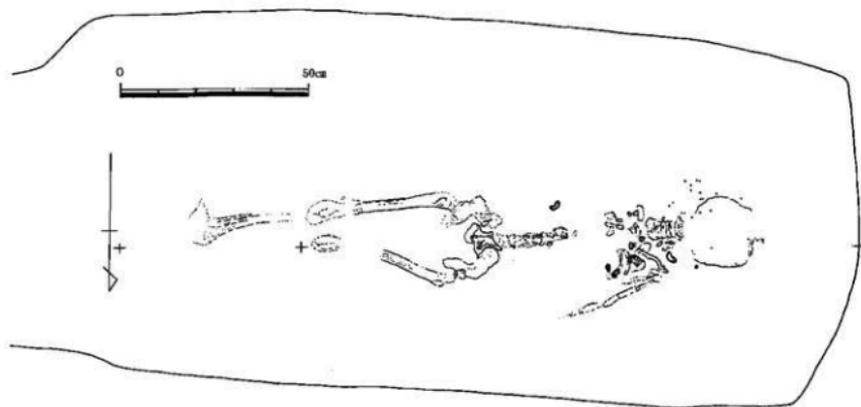
2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭骨：左右側頭骨、頭頂骨片、上顎骨（正中部位にて左右に離開）

下顎骨：左下顎体（臼歯部欠）

右下顎体（ほぼ完形）



時仏山横穴墓 玄室図

歯 牙：釘植歯牙 9ヶ

遊離歯牙 8ヶ

C ₂		C ₃											
△	○	△	○	○	△	△	△	×	○	○	×		
7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7
7 6 5 4 3 2 1						1 2 3 4							
□	□	□	○	○	△	△	○	○	×	×			

○：釘植歯牙

△：遊離歯牙

×：歯槽開放（死後欠）

□：歯槽閉塞（生前欠）

〰：破損部位

C₂：虫 歯（カリエス2度）

脊椎骨

頸椎骨：No.1～7；完形

胸椎骨：No.1～3；ほぼ完形

No.4～9；椎体と椎孔の周辺骨

No.10；ほぼ完形

No.11；上関節面部

No.12；棘突起部

腰椎骨：No.1；椎弓板部のみ

No.2；椎弓板部のみ

No.3；椎孔周辺部

No.4；ほぼ完形

No.5；ほぼ完形

仙椎骨：No.1～4；完形（完全融合）

胸郭骨

肋 骨 左：No.1～2；骨片

右：No.2～6；骨体中央部

上肢骨

肩甲骨

右：関節部，外側縁，肩甲棘の1部

下肢骨

寛 骨 左：腸骨；ほぼ完形

右：腸骨；ほぼ完形

大腿骨 左：遠位部脆弱化，遺残全長41.8cm

右：遠位部脆弱化，遺残全長41.2cm

脛 骨 左：骨体下部～遠位部

右：近位部（上端関節面のみ）

腓 骨 左：骨体中央部（脆弱剥離状）

足 骨 左：足根骨1ヶ（踵骨の1部）

3. 推定性別

人骨中、性差の最も著しいのは骨盤（寛骨）である。遺残の寛骨の左右の大坐骨切痕は鈍角で典型的な女性骨の形状を呈していた。

脊椎骨（頸椎、胸椎、腰椎）の椎体はかなり小さく、大腿骨は細く、きゃしゃで後面の筋粗面の発達も弱い。

以上の所見は、女性骨特有の形状であるので、木屍骨は明らかに女性骨と推定できる。

4. 推定年齢

木屍の遺残歯牙の咬耗度はプロカーの2度以上である。

寛骨の仙腸関節面の大陥凹の所見は、高齢者にみられる骨吸収（骨粗鬆症）によるものである。

以上の所見は、高齢者によくみられ、木屍の年齢は熟年（40代後半～50代位）が推定される。

5. 推定身長

木屍の生前の身長は、ピアソン法¹⁾で145.6cm、藤井法²⁾で154.3cmである。

6. 疾患

1) 虫歯

本屍右上顎の第2大臼歯（7）と第2小臼歯（5）に齲歯（虫歯）がみられた。

2) 歯槽膿漏

本屍右下顎の臼歯部は歯槽閉塞で平坦化しているが、生前歯槽膿漏に罹患して臼歯部の歯牙が脱落、歯槽部が閉塞しているが、骨髄炎を惹起した疑いがある。

3) 骨粗鬆症

本屍は女性で高齢者であり、寛骨（腸骨）の仙腸関節面の大陥凹と脊椎骨（胸椎、腰椎）の棘形成は骨吸収による所見で、老人性骨粗鬆症が疑われる。

7. 考察

1) 特殊な埋葬法（姿態）

占墳時代の石棺や横穴から出土する被葬者の埋葬法（姿態）に関する報告例は、これまでほとんど仰臥伸展位であった。例外的に追葬の際、石棺や横穴の大きさにより、便法として先葬者の遺体を側臥伸展位または集骨状に周囲に移動する例は時にみられた。すぐ近隣の殿ヶ迫横穴墓群からの出土人骨の埋葬法は、占墳時代の慣例通り、すべて仰臥伸展位であった。

今回、本横穴から出土した被葬者は、これまで全く報告例をみない特殊な埋葬法（姿態）で検出された。

即ち、横穴玄室中央部に熟年女性が伏臥伸展位（うつ伏せ状）で埋葬されていた。

被葬者の埋葬姿態は、端的に言えば、背面を上面（うつ伏せ状）にしていた。

本屍の遺残骨の上面を骨格順に記載すると、次の通りであった。

上顎骨は頸椎骨の下部の屍床の砂中より検出した。

脊椎骨の頸椎、胸椎、腰椎骨は、後面の棘突起部が上面に位置し、仙椎骨も後面の正中仙骨稜、外側仙骨稜が上面に位置していた。

肩甲骨も背面の肩甲棘が上面となっていた。

寛骨は腸骨外面が上面に、大腿骨は後面の粗面（殿筋粗面、恥骨筋線）と小転子が上面に位置していた。

横穴の出土状況からして、後世の人為的攪乱は全く考えられない。

被葬者は熟年（40代後半～50代位）の女性で、副葬品として土器類はなかったが、玉類を多く検出、この地域の横穴としてはかなりの厚葬である。

古墳時代人の平均寿命は、男女とも31・32才位とされているので、本横穴の被葬者は当時としては、かなりの高齢者であり、女性ながら長老格的存在だったのかも知れない。

1つの仮説として、被葬者は特殊な身分（呪師、シャーマン）で、一般の被葬者の埋葬姿態（仰臥伸展位）と異なる職業的、身分的埋葬姿態（伏臥伸展位）があったのかも知れない。

しかし、全国的にみると、古墳時代の各地域には地域性はあるとしても、それぞれに呪師（シャーマン）風の身分の人々がいたと思量されるが、これまで伏臥伸展位の埋葬姿態の報告例がない。

単なる偶然的な埋葬姿態であって、それ程葬俗的意味はなかったのだろうか。現時点では、納得のいく説明ができない。今後類例が出土したら、横穴の様式、伏臥伸展位、性別、年齢と副葬品等の関連性を精査し、比較検討する必要がある。

2) 仁多町横穴墓出土人骨の身長値

仁多町における古墳時代の横穴墓出土人骨（筆者鑑定分）^{3～7)}の性別、年齢と身長を表1にまとめた。

今回、発掘された時仏山横穴墓と殿ヶ迫横穴墓群の出土人骨の身長は、同時代の他の横穴墓出土人骨の身長値とおおむね大差ない。

時仏山横穴墓出土人骨は熟年女性で、身長はピアソン法で145.6cm、藤井法で154.3cmである。

殿ヶ迫横穴墓群3号穴出土人骨は熟年女性で、身長はピアソン法で140.0cm、藤井法で143.0cmである。

いずれもピアソン法では低身長値である。特に時仏山横穴墓出土人骨の身長値はピアソン法で145.6cm、藤井法で154.3cmで約10cm弱（8.7cm）の差がみられた。横穴墓の埋葬遺体の実測値によると、約155.0cmである。

古人骨、人類学の領域では、身長の計測方法はこれまでピアソン法が基準として用いられ、他遺跡出土人骨の身長値と比較する場合は文献的に有効であるが、これまでの自験例からみるとピアソン法よりも藤井法の方がより実身長値に近いのではないかと思量する。

8. まとめ

時仏山横穴墓には被葬者1体が埋葬されていた。被葬者は熟年（40代後半～50代位）の女性で、身長はピアソン法で145.6cm、藤井法で154.3cmである。

疾患として、齶歯（虫歯）2ヶ（いずれもC₂）、右下顎臼歯部は生前歯槽膿漏に罹患、その部位の歯牙が脱落、歯槽閉塞しているが骨髄炎の疑いがあり、さらに老人性骨粗鬆症の所見もみられた。

古墳時代人の埋葬法（姿勢）は、一般的に仰臥伸展位であるのに、今回出土した被葬者は明らかに伏臥伸展位（うつ伏せ状）で、これまで報告例をみない。

今後、さらに類例を検証していく必要がある。

表1. 仁多町横穴墓出土人骨一覧

横穴墓名	号穴	被葬者数	人骨No.	性別	年齢	身長		文献
						ピアソン法	藤井法	
上分中山横穴墓		3	1号	♂	壮年前期	—	150.0	
			2号	♂	20代	163.8	163.0	
			3号	♂	熟年	158.3	156.2	
比久尼原横穴墓	5	1		♀	20才前後	—	150.5	3
川子原横穴墓		2	1号	♂	壮年前期	153.7	151.7	4
			2号	♀	10代	134.7	136.2	
コフケ横穴墓		2	1号	♀	壮年前期	150.9	148.1	5
			2号	♂	壮年後期	164.3	163.3	
玄蔵坊横穴墓		2	1号	♀	成人域	不詳	不詳	6
			2号	♂	熟年	158.0	157.0	
須坂横穴墓		2	1号	♂	壮年中期	不詳	不詳	7
			2号	♀	壮年中期	不詳	不詳	
時仏山横穴墓		1		♀	熟年	145.6	154.3	
殿ヶ迫横穴墓	1-2	1		♂	熟年	159.3	157.8	
	3	1		♀	熟年	140.0	143.0	
	4	1		♂	10代前半	不詳	不詳	

B. 殿ヶ迫横穴墓群

殿ヶ迫横穴墓群は島根県仁多郡仁多町前布勢地内に位置する。

横穴群は5穴からなり、その内人骨が出土したのは3穴（1-2号穴、3号穴と4号穴）で、いずれの横穴とも、被葬者が1体ずつ出土した。

1-2号穴の出土人骨の遺残性はやや良好であったが、3号穴の出土人骨の遺残性はやや不良であった。

4号穴の出土人骨は未熟骨で人骨は全く遺残してなく、歯牙のみ検出され、骨の遺残性は不良であった。

以下、各横穴毎に出土人骨の概要を報告する。

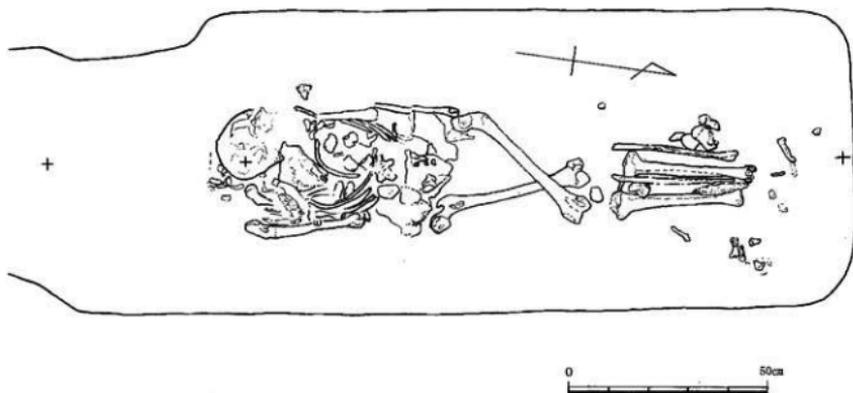
1-2号穴

玄室中央部に、被葬者1体が埋葬されていた。玄室中央人口側に頭位をおき、玄室中央奥部に足位をおいて仰臥伸展位で埋葬されていた。

特異的所見として、右下肢骨（大腿骨、脛骨、腓骨）はすべて後面を上面にして遺残していた。また、頭骨の頭頂面と右下肢骨（大腿骨、脛骨、腓骨）に損傷（切創）がみられた。

1. 骨の遺残性

被葬者1体が仰臥伸展位で埋葬されていたが、天井崩落により胸部部と足骨が移動、または消失がみられたが、骨の遺残性はやや良好であった。



1-2号穴 玄室図

2. 遺残骨名とその部位

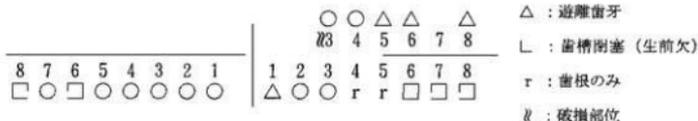
頭蓋骨

頭骨：ほぼ完形

前頭骨，頭頂骨，後頭骨，左側頭骨，左頭蓋底骨（右顔面骨，右側頭骨，右頭蓋底骨の1部欠）

下顎骨：ほぼ完形

歯牙：



脊椎骨

頸椎骨：No.2，3；完形

No.5，6；椎体の1部

No.7；椎体，棘突起部

胸椎骨：No.1～3；ほぼ完形

No.5～6；椎体の1部

No.7～12；ほぼ完形

腰椎骨：No.1～5；ほぼ完形

仙椎骨：No.1～5；完形（完全融合）

胸郭骨

胸骨：柄；ほぼ完形

体；ほぼ完形

肋骨 左：No.1；完形

No.不明；肋骨片10ヶ

右：No.2；肋骨片

No.5～11；肋骨片

No.不明；肋骨片若干

上肢骨

鎖骨 左：下角部欠

右：内側縁部欠

肩甲骨 左：ほぼ完形

右：関節面，肩甲棘，鳥口突起，外側縁

（形態長10.0cm，形態幅15.0cm）

上腕骨 左：近位部～骨体中央部（下端部欠）

右：骨体上部～下端部（近位部崩壊）

遺残長31.0cm

尺骨 左：近位部～骨体下部

右：ほぼ完形，全長23.8cm

橈骨 左：骨体中央部のみ

右：完形，全長22.5cm

手 骨 左：手根骨 1ヶ (月状骨) 右：指節骨 2ヶ (基節骨 2)
中手骨 1ヶ (No.3)
指節骨 5ヶ (基節骨 2, 中節骨 1, 末節骨 2)

下肢骨

寛 骨 左：腸骨, 寛骨臼窩部, 大坐骨切痕 右：腸骨, 仙腸関節面, 寛骨臼窩部,
大坐骨切痕
大腿骨 左：ほぼ完形, 全長41.5cm 右：完形, 全長41.5cm
膝蓋骨 左：ほぼ完形, 4.1×4.6cm 右：ほぼ完形, 4.1×4.6cm
脛 骨 左：ほぼ完形, 全長34.0cm 右：ほぼ完形, 全長33.5cm
腓 骨 左：ほぼ完形, 全長31.1cm 右：ほぼ完形, 全長32.0cm
足 骨 左：足根骨 2ヶ (踵骨, 距骨) 右：足根骨 4ヶ
中足骨 1ヶ (No.4) (舟状骨, 立方骨, 楔状骨 1, 2)
指節骨 2ヶ (基節骨 1, 中節骨 1) 中足骨 2ヶ (No.3, 4)
指節骨 3ヶ (基節骨 2, 中節骨 1)

3. 推定性別

遺残頭骨の諸形態学的特徴、下顎幅11.0cm、四肢骨長とその筋付着粗面の発達が良好なこと等、以上は男性骨特有の所見であるので、本屍骨は男性骨と推定する。

4. 推定年齢

遺残頭骨の頭蓋冠縫合をみると、内板では3縫合とも完全融合、外板では3縫合の内、冠状縫合は完全融合、矢状と人字縫合もほぼ融合している。

頭蓋腔のクモ膜顆粒小窩の出現程度は、矢状縫合に沿って軽度に出現している。

脊椎骨の内、胸椎骨と腰椎骨の椎体上縁と下縁の棘形成は中程度である。

以上の所見から、本屍の年齢は熟年 (50代位) が推定される。

5. 推定身長

本屍の生前の身長は、遺残四肢骨長からピアソン法で159.3cm、藤井法で157.8cmであり、大約160cmと推定する。

6. 損傷 (切創)

1) 頭骨の頭頂面

左頭頂部から矢状縫合部 (プレグマ部より後方6.0cm) を通過し、右頭頂部にかけて平行に並んだ (幅2mm) 2条の骨質 (1~2mm) に達する浅い創がある。

2) 右大腿骨 後面

下端部の内側上顆～内側顆にかけて、鋭利な切創面（径3.5×3.0cm）

3) 右脛骨 後面

上端外側の上関節面～外側顆にかけて鋭利な切創面（径4.3×2.0cm）

4) 右腓骨 後面

腓骨関節面正中部右上から右下に向かう切創（径3.0cm）

損傷1)～4)はいずれも鋭利な創で、特に2)～4)は右下肢骨後面の創である。

7. 考 察

1) 下肢骨の創

本屍の右下肢骨後面（大腿骨内側上顆部、脛骨上端上関節面～外側顆、腓骨関節面正中部）の3ヶ所に鋭利な切創がみられた。

受創が戦争（闘争）によるものか、単なる事故であったのかどうかは不詳である。

類例として、同じく仁多町大字郡村のコフケ横穴墓⁵⁾には、被葬者2体（男女）が仰臥伸展位で埋葬されていた。被葬者の1人、男性の年齢は壮年後期位、身長164.0cmで特異的所見として左大腿骨下端部の3ヶ所に鋭利な切創を認めた。

創面の骨の再生（形成）が全く認められないので本屍の場合同様に、受創後まもなく死に至ったものと推察された。

同じ仁多町内で、同時代に類似の鋭利な刃物による下肢の損傷例が検出されたのは、単なる偶然とは考えにくく、何か意図的行動阻止目的によるものと思量する。

2) 被葬者下肢骨の異常配列

被葬者は埋葬当時仰臥伸展位で埋葬され、骨は骨格順に配列していたと推察できる。

しかし、骨採取時、被葬者の下肢骨の配列に乱れがみられた。即ち、右下肢骨（大腿骨、脛骨、腓骨）はすべて後面を上面にして反転状態で検出された。その右側に脛骨と平行して断片的な木質片が検出された。

左下肢骨も移動しており、左大腿骨は上面を上にして右大腿骨と交叉してその上位に位置し、下肢骨（脛骨、腓骨）は右下肢骨と平行してその右側に位置していた。

右の大腿骨、脛骨と腓骨に切創があり、右下肢は恐らく「添え木」で強く固定されていたものと推察される。そして、治療することなく死亡し、「添え木」で固定されたまま仰臥伸展位で埋葬された。

骨折等の治療には、古代人（縄文後期以降）も経験的に骨折部の修復のために、患部に一定期間「添え木（副木）」をあてて固定し治療していた⁸⁾。

後日（死亡後半年～1年位）、遺体が腐乱、白骨化にともない結合組織（筋、靭帯）が弛緩、消失しかかった頃、「添え木」に強く誘引されて右下肢骨全体が反転し、大腿骨、脛骨、

腓骨の後面が上面に位置したものと推察できる。

古墳時代人の骨折、受創に際して、患部を「添え木」で固定した事例の検出は、山陰地方または全国的にみてもきわめてまれな事例であり、文献上貴重な資料がえられた。

左下肢骨は、その後間もなく祭祀のため横穴内に入った人が人為的に未だ韌帯の弛緩の間に（完全に白骨化していない）、左下肢を持ち上げ移動し、右大腿骨（後面が上面）の上に左大腿骨が交叉状にのっており、左下肢骨（脛骨、腓骨）は右下肢骨と平行に位置していた（下肢骨がすべて上、下の連絡性があるので白骨後の移動ではない）。

8. まとめ

1-2号穴には被葬者1体が仰臥伸展位で埋葬されていたが、下肢骨に攪乱がみられた。被葬者は熟年（50代）の男性で、身長はピアソン法で169.3cm、藤井法で157.8cmであった。

特異的所見として、1) 創傷（切創）①頭骨の頭頂面に2条の創 ②右大腿骨の内側上顆後面に創 ③右脛骨の上端外側後面の創 ④右腓骨の関節面の創 2) 「添え木」による固定 右下肢部の創部（患部）は「添え木」で固定されていた。

右下肢骨全体に異常配列がみられた。遺体の腐乱・白骨化に伴ない結合組織が弛緩した頃、固定された「添え木」に強く誘引されて右下肢骨全体が反転し、大腿骨、脛骨と腓骨の後面が上面に位置していた。

その後まもなくして、祭祀のため、同横穴内に人が入り人為的に左下肢が右大腿上に移動された形跡がみられた。

3号穴

玄室左奥部に、被葬者は頭位をおき、須恵器の土器2ヶを枕にして、玄室左壁に沿って足位は玄室入口側に向かって仰臥伸展位で埋葬されていた。

1. 骨の遺残性

人骨はほぼ骨格順に遺残するが、全般的に脆弱化してもろく、骨採取時に崩壊するものもかなりあった。

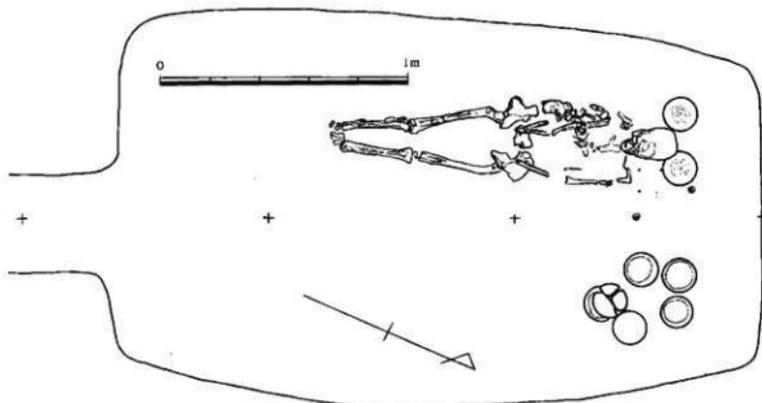
四肢骨と脊椎骨は、全般的に細ききゃしゃで破損骨が多く、骨の遺残性はやや不良であった。

2. 遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭骨：顔面骨，左右の側頭骨，後頭骨，頭蓋底骨

下顎骨：ほぼ完形，下顎角幅径9.0cm



3号穴 玄室図

歯 牙 :

●	○	□	□	□	○	○	○		○	○	○	○	□	□	○	●	○ : 釘植歯牙
8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	8	● : 埋伏歯牙
□	□	□	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	□	□	□	□ : 歯槽閉塞 (生前欠)

脊椎骨

頸椎骨 : No.1 ~ 7 ; 完存 (No.1 ~ 5 ; 完形, No.6 ~ 7 ; ほぼ完形)

胸椎骨 : No.1 ~ 4 ; ほぼ完形

No.5 ~ 8 ; 椎孔部, 棘突起部

No.不明3ヶ ; 椎体, 椎孔部

腰椎骨 : No.不明3ヶ ; 椎体, 椎孔部

仙椎骨 : No.1, 2 ; ほぼ完形 (完全融合)

胸郭骨

胸 骨 : 柄 柄長約1/2

体 体長約1/2

肋 骨 左 : 骨片若干

右 : No.不明 ; 骨片多数

上肢骨

鎖 骨

右 : 両端部欠 遺残長9.5cm

肩甲骨 左 : 関節面部のみ

右 : 関節面部, 肩峰部

上腕骨 左 : 骨体上面骨のみ (脆弱化)

右 : ほぼ完形 推定全長26.8cm

尺 骨 左 : 骨体中央部のみ

右 : ほぼ完形 遺残骨全長21.0cm

腕骨		右：骨体中央部のみ
手骨		右：中手骨1ヶ（No.2） 指節骨3ヶ（基節骨2，中節骨1）
下肢骨		
寛骨	左：仙腸関節面，腸骨体， 寛骨臼窩部，大坐骨切痕部	右：仙腸関節面，腸骨体，寛骨臼窩部， 大坐骨切痕部
大腿部	左：全般的に脆弱破損 遺残長36.5cm	右：全般的に脆弱化 遺残長36.8cm
脛骨	左：極めて脆弱化 計測不能	右：極めて脆弱化 計測不能
腓骨	左：骨体 骨片化	

3. 推定性別

遺残頭蓋骨の諸形状、寛骨の大坐骨切痕の形状と上下肢骨は細くきゃしゃで、筋粗面の発達も弱く、女性骨特有の形態学的特徴を多数有しているため、本屍骨は女性骨と推定する。

4. 推定年齢

頭蓋冠縫合は欠落につき不詳。

口蓋縫合にうち、切歯縫合は完全融合、口蓋骨縫合は完全融合、上顎骨縫合は下1/4ほぼ融合。

歯牙の咬耗度はプロカーの2度

脊椎骨（胸椎骨、腰椎骨）の棘形成 軽度

以上から、本屍の年齢は熟年（40代～50代前半位）が推定される。

5. 推定身長

本屍の遺残四肢骨長から、生前の身長はピアソン法で140.0cm、藤井法で143.0cmである。

6. 疾患

1) 歯槽膿漏

下顎の左右の大白歯部（876 678）と上顎の左右の白歯部（654 56）は歯槽閉塞しており、生前すでに歯牙が脱落している。これは恐らく生前歯槽膿漏になり、その部位の歯牙が脱落して歯槽閉塞したものと推察される。

2) 鼻中隔彎曲

本屍頭蓋骨の鼻腔内の鼻中隔が軽度に彎曲が認められ、生前軽度の鼻づまりを患っていたものと推察される。

3) 骨粗鬆症

本屍は熟年（40代後半～50代前半位）の女性で、腰椎骨の椎体の厚さが通常の約2/3位に圧平されていた。これは恐らく老人性骨粗鬆症による圧迫骨折の疑いがある。

7. 考察

古墳時代人の平均寿命は男女とも31、32才位とされており、今回発掘された時仏山横穴墓の被葬者は熟年（40代後半～50代位）の女性で、寛骨の仙腸関節面に骨吸収による大陥凹がみられ、骨粗鬆症の所見であった。

殿ヶ迫横穴墓群3号穴の被葬者は熟年（40代～50代前半位）の女性で、脊椎骨椎体の棘形成と腰椎骨の椎体の厚さが通常の約2/3位に圧平されており、老人性骨粗鬆症による圧迫骨折が疑われた。

骨粗鬆症が高齢（熟年）女性に多いことは周知の事実で女性が男性より7～10倍多いという統計もある。その原因として、閉経後骨密度が急速に減少していくことにある。

類例として、仁多郡横田町角・宮ノ峠横穴墓⁹⁾には被葬者女性2体が埋葬されていた。その内、2号人骨は熟年（40才前後）の女性で、胸椎竹（T₅、T₇）の椎体の厚さが1/2に圧平されており、老人性骨粗鬆症による多発性圧迫骨折と診断された。

これらは、古墳時代人でも高齢（熟年）者の女性が、現代人と同様に男性より女性の方が圧倒的に骨粗鬆症に罹患していたことを証明している。

8. まとめ

3号穴には被葬者1体が仰臥伸展位で埋葬されていた。

遺残骨はほぼ骨格順に遺残するが、全般的に脆弱化しており、骨の遺残性はやや不良であった。被葬者は熟年（40代～50代前半位）の女性で、身長はピアソン法で140.0cm、藤井法で143.0cmであった。

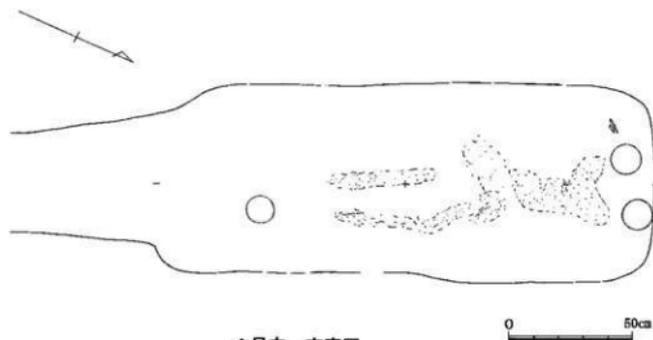
疾患として、上下顎の臼歯部は歯槽閉塞しており、生前歯槽膿漏の所見がみられた。鼻腔内の鼻中隔彎曲が軽度認められた。腰椎骨の椎体が軽度に圧平されており、老人性骨粗鬆症による圧迫骨折が疑われた。

4号穴

玄室中央奥部に須恵器の上器が2ヶあり、恐らく被葬者はここに頭位をおき、中央入口側に向かって仰臥伸展位で埋葬されたと推察された。しかし、人骨は全く出土せず、頭位付近の死床から歯牙17ヶのみ検出された。

1. 骨の遺残性

玄室からは遺残骨は全く出土せず、遊離歯牙（永久歯）17ヶが検出された。骨の遺残性は不良



4号穴 玄室図

0 50cm

であった。

2. 遺残骨名とその部位

遺残歯牙（17ヶ）はすべて永久歯で、その内16ヶは部位が特定できたが、残りの1ヶは大歯臼の歯冠片のため、部位の特定には至らなかった。

歯牙：部位特定歯牙 16ヶ

△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△：遊離歯牙
7	6	5	4	2	3	4	6	7		
6			2	1	2	4	6	7		
△			△	△	△	△	△	△		

3. 被葬者数

遺残歯牙には重複歯牙が認められず、1体分相当であるので、被葬者は1体である。

4. 推定性別

遺残歯牙の歯冠径の大きさから推察すると、本屍は男性骨と推定する。

5. 推定年齢

遺残歯牙はすべて永久歯で、第2大臼歯（M₂）まで遺残しており、萌出歯牙なら12才以上、また未萌出（埋伏）歯牙なら10才以上が推察される。

歯牙の咬耗度をみると、切歯、大歯と小臼歯に咬耗は全くみられず、第1大臼歯（M₁、6才臼歯）はきわめて軽微である。

人骨が全く出土していない所から、未熟骨が想定され、人体の中で最も硬く、遺残性のよい歯

牙のみが遺残したものと推定される。

以上から、本屍の年齢は10代の未成年であるが、10代前半位の可能性が高い。

6. 推定身長

遺残歯牙からは、本屍の生前の身長は不詳である。

7. その他

遺残歯牙のみで、特記事項はない。

8. まとめ

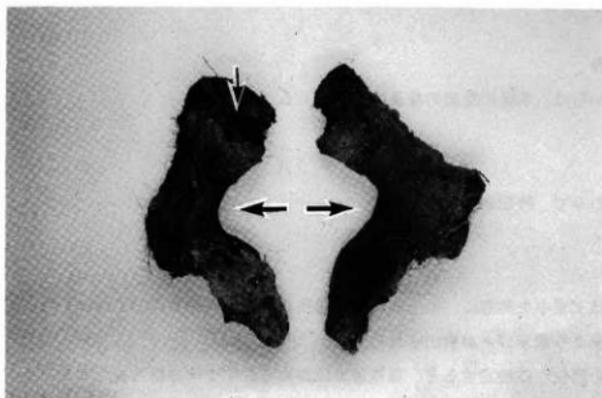
4号穴には玄室中央奥部に、須恵器2ヶが遺残、恐らく被葬者の頭位がおかれたものと推定され、その屍床より歯牙17ヶが検出された。

遺残歯牙を部位別に特定すると、重複歯牙は認められず1体分相当歯牙であった。

被葬者は恐らく未成年（未熟骨）の男性で、年齢は10代前半位、身長は不詳である。

参考文献

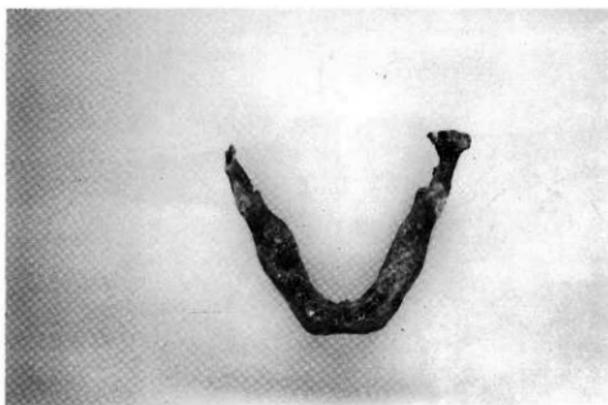
- 1) Pearson, K. (1899): Mathematical contributions to the theory of evolution, V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races, Phil. Trans. Roy. Soc. London. Ser. A, 192, 169-244.
- 2) 藤井 明(1960)：四肢長骨の長さとの関係に就て，順天堂大学体育紀要3，49-61.
- 3) 井上晃孝(1986)：比久尻原横穴群の骨鑑定，比久尻原横穴群緊急発掘調査報告 13-19， P L 1-8，島根県仁多町教育委員会
- 4) 井上晃孝(1991)：川子原横穴墓の骨について，島根県埋蔵文化財調査報告書 第XVII集 43-46 図版5～6，島根県教育委員会
- 5) 井上晃孝(1992)：コフケ横穴出土人骨の概要，島根県埋蔵文化財調査報告書 第XVII集 21-26 島根県教育委員会
- 6) 井上晃孝(1996)：玄蔵坊横穴出土人骨，仁多町玄蔵坊横穴発掘調査概報 1-22，島根県仁多町教育委員会
- 7) 井上晃孝(1997)：須坂遺跡第1号横穴墓出土人骨，須坂遺跡・他 47-51，島根県仁多町教育委員会
- 8) 小片丘彦(1949)：日本人骨の疾患と損傷 2. 骨損傷，人類学講座編纂委員会編，人類学講座 5. 日本人 I, pp191-194, 雄山閣出版, 東京
- 9) 井上晃孝(1994)：横田町宮ノ峠横穴出土人骨について，角・宮ノ峠横穴・柏原遺跡発掘調査報告書 14-25，島根県横田町教育委員会



時仏山横穴墓 熟年女性

寛骨大坐骨切痕（鈍角）大矢印

仙腸関節面（大陥凹）小矢印



殿ヶ迫横穴墓群

1-2号穴 熟年男性

頭骨（頭頂面）に2条の浅い刺 矢印

下顎骨